たるもの四五人遊ひ居候まゝ叱り候處表ゑ方ゐ出候樣子何か常ならす候間追參り候處銅吹所ゑ近邊にゐ見失ひ候由夫ゟ家内を貧家故とられ候ものはなく共乞食なと深夜に爲遊置候は如何と叱り候に曾ゐ夫等ゑものをらすと申しぬされ共まさしく右ゑ如くなれは其こと申せしにいや某はいまた寢ねすしてありしまゝ四五人ゑ子供臺所に遊ひ居らむには必しり候へし左にあらすたしかに見たりと爭ひしまゝに其夜は臥せり候由然るにあした途中にゐ人相よくみるものに行逢しに驚て申けるはそこは兼ゐ貧也しか一兩日已來か詮する所至ゐ近きことゝみゆけしからぬ幸こそはありたり御かたり候へと申色々といひしかはかはりたる事もなしよつてそかまゝ別しか尙おもへは昨夜のことは常ならぬ樣にてこゝろかゝりなきにはあらすよからぬ事かとおもひしにかれかかく申せし上は世には貧乏神なといふこともあれは夫をきのふは不計追ひ出せしにやとおもひ頻にうれしくて同し邊の陰陽家にみもらひしに其古考尤吉事にゐたとへは身に大なるまかつみのまつはり居たりしか二日か三日を過へからすして其患を遁たりされは是よりは福はおもひのまゝに來るといふ卦也と申せしよしよつて二丁目の湯屋には貧乏神を追出せしとゑ沙汰專也然るにかの行衞見失ひたるといふ邊のものいたくうれひてわれ等みな貧也此上に貧乏神の來たらむには三旬ゑ内に一食も覺束なかるへしとてかなしみ居候由歎候ものも悲しみ候ものも同し類の人なるへし畢竟是は銀山は殊ゑ外ものいみする所にてあれはをこれる話也とおもはるけふ家來十助か立合に參て地役ゑものより聞し也

○三日　大風雪　さりなから暖成かた也尤夕方ゟ風雨に成

こん春のこゝろにわれやなくさむるたへぬ雪けののきの玉水

雪つもるこしの旅ねに薄らひもなかるへしとはおもはさりけり

○四日　風雪　きのふ迄は前にいふことく暖也けるか夜半よりことにおひたゝしく風吹て忽に寒さ甚しくなりぬ所々ゐの寒氣尋として遣ぬる文

にも暖成ことなと記せしか今は詮すへなしと其まゝに過ぬ寒暖昇降は三十四度と三度のあひたにて甚寒といふ所より尙一段寒氣のかたへよりたりこれは江戸にはなきこと也されば共漸と手水遣ふあたり少し氷みゆる計にて手拭なと氷れるけしきもなしされば共顏冷なとすることは江戸より甚しきか如しさむさはすくれたれと寒暖昇降もてはからさらむには江戸より氷によりて暖也とおもふへき也尤至ゐゑ手當いたし申候夜九時頃まて例の如く文よみ居

夢の間に沖つ汐風吹よせてけさみそめぬる池の薄氷

うすらひにおもへは寒しかさねてもまたさへとをるけさの衣手

けふより衣類をも增し屏風たて廻し其うちに火鉢を置てよる書物よみ申候夫にても顏手等ひゆる也氷薄きは汐風の故なるへし

○五日　くもり　珍ら敷風なし此體一兩日つゝきなは御用狀參るへしなと申あひぬ今朝寒大に減す寒暖昇降四十二度に相成候尤雪はふり申候

○十二月六日　至ゐ暖氣也　四十八度にて中數ゑ内ゐ至る山邊の雪こと〳〵く消る谷間は少しみゆるをり〳〵雨ふる　昨日十助馬場道よろしからぬ故門前のりせしに馬の前とるをみて前とあとゝ足ちかひたる馬也とて驚きたるよし野あしの小にたよりしらぬ國故馬のることみしもの稀なれは所々ゟ人つとひ來て見物甚しくこまりたるよし也

○七日　微雨風なし暖氣也春雨の如し　けふは暮に例組頭其外ゐ料理出す事也御勘定奉行内より金おさめなといふ類也然るに魚類少もなし漸のことにて出來候燒物たこのあし也如何ゑ如き樣なれとさしわたし壹寸六七分ゑたこのあしを二つに割り夫にふりのみそやきを附たるは見事也たこのあし江戸の大根程ありし也菓子もかなり也きすゝりふたに九年母くはい蓮根あり以上ゑものいつれも佐渡になし大々を三月の節句に遣ふと

○以上「乾ゑ卷」

いふにてみかむ九年母の類高直なることおもふへき也蓮根にわさひくはい今日初ゟ給へ申候

○八日　くもり　今日初ゟ雨風ともになし

○九日　晴　風なしかゝることこの地にはなきことのよし江戸の十月頃の如し夕かたより馬場にて乘馬いたす此ほとは谷間に至ゟ少し雪みゆる計也里には曾ゟ雪なし越路の冬とはおもはれす候

○十日　くもり風なし至ゟ暖氣也四十八度前後也　相川つゝきの羽田の町にて頃日井を穿しにされかうへ出しを井を穿もの密に袖にして海濱へ捨しを子供の打よりて繩へつらぬき百萬遍のまねなとし果ては野邊のをくり也とて埋石なと建置たり然るに其夜羽田の名主の夢にわれ長く土中に埋れ居しにはからす世に出て回向をも受忝なしと申せし由不思義のことにおもひて心當ゝ事共聞しに前の次第聞出し則其骨を立岩寺といふ寺ゟ葬たりとそ

○十一日　雪　又寒氣に成され共氷るほとにはなし此頃風少故たらなと多し一尾五六十文位ゝ由よろしき燒物といたし候位のいなた一尾五十文位ゝ由ふりは至ゟよろし大鰤にゟ壹貫文位也

○十二日　風雪　昨夜より寒甚し寒暖昇降三十二度に至る寒氣甚寒のしるしより二度尚さむし　佐渡はたゝみのへりより天井のかたへ雪ふるといひしかさほとはあらすされ共椽の下へ一體に雪吹いるゝは相違なし甚敷雪吹の時は中間部屋なとにはへりより雪さかしまに降ること必なしといふへからす某か居る所は天井も床も二重にはりありといふ難有も又もつたいなき事也今朝は給人部屋なと硯の水こほりたりといふ某か居間は氷なし尤いつ方もいまた手拭なとこほりたることなしされ共手水鉢ある邊は薄氷也泉水半氷れり昨夜も九ツ頃まて書物歌なとにかゝり居しかあしひゆることはなし在勤にて可歎はこたつを忘たる也居間にこたつもやくらもあれと兼ゟこたつをやめむとおもひ居し故につくらぬ也

○十三日　風雪　昨夜より寒殊に甚し手拭も手水鉢もなへて氷らぬものとてはなし二十六度強半迄に寒相成る甚寒より八度尚寒し用人共の部屋は硯氷るといふか某か居間はすゝりこほらすあさも晝も夜も同しさむさ也是寒國の故なるへしけさ鑓遣ひしに鎌鑓三度素やり突身貳度六半時過より五過までに遣ひて漸に汗にしむ位也　けふは煤拂也とて民藏のしめ麻上下にゐ所々に竹をいるゝいにしへは某か單衣に手拭かふりなとしてなせしこと也くれ〳〵も昔わすれへからさる也頃日は佐渡も大になれてよし三年もくるしからぬ程になりぬ是は　君恩を荷ふ故なるへし

吹風のいく重隔しひまもりて閨の燈さそふさむけさ

さむしろのひまより風の吹上て梅とちらせる閨の白雪

前にいふは實事なれと末にいふ程にはあらさりけり涙の瀧つせ血の杵を漂せし類と御察し候へ

○十四日　風雪　寒甚し氷らぬものは某か居間の硯のみ也手拭なと板の如くに成る　けふ朝劍術を遣ひて向ふ陣屋より歸る時みしに家來共みな素あしにて雪をふみ勿論稽古著一ッ也全に某は衣類著替けれ共稽古場は奉行内玄關の向なれは也中々にこたつのこゝろにては成かたき也　土地のものは昨今は例より甚寒とおもふよし也

○十五日　よほと暖氣に成あられ雨にており〳〵日かけみゆ例のしくれ空也此ほとは越後の便たへ御用狀出雲崎にあるよし急用ゑ商人船なと聞參りものかたるのみ　寒暖昇降四十三度に相成氷とけ軒の雪け頻也　月並の禮を受ること例の如し

○十六日　昨夜よりの雨にゐ氷こと〳〵くに解る雪少もなし　昨日こゝにて作りたるいもかむを給ておもひ出けるは江戸と違ひて自然しよ多き所なれはいもゝよく扨又葛なと至ゐよろしされ共いもをうらこしにすることをしらす摺鉢にて摺たるものとみへて豆ほとのかたまりいくらもあり是料理の趣はしれ共其事實をしらぬ故也生質のよきものにゐ志ありて

もよき師につかされは存外に笑るゝことある也おもふへき事也譬は徂徠の門の詩人共か力もあり博覧にもあるへきか古詩の法をしらて清人に笑はれたると同しことにゐよき師あらされは一寸の茶話にきくことを一生涯しらて過こと多也されはよき先生の弟子共によきものあるも其故なるへし

○十七日　風雨あられ夕より微雪　五時より御宮幷御霊屋ゑ參拜いたす天氣都合殊によろし往返ともに風雨なしかさに不及候

○十八日　風雨微雪　けふもちつき也用達方にゐつき候ゐさし越す事也壹石程也夫にゐも夫々家來共ゑ遣す間至ゐ少き先例之由也

○十九日　風雨暖氣也寒暖昇降四十二度也　十月已來越後ゟ之御用船渡海なし寺泊に御用狀多たまり居るに又漁人のことものゝ往來はあれは江戸にて大名の國替ありき鳥居耀藏佐渡奉行被　仰付候ゐ同人名前之御用狀參り居るなととり〳〵の説此ほと被行候

○廿日　曇微雪　此ほとの如くにては江戸より寒少きか如し　きのふは七頃より雷雨にてあかり障子におり〳〵電のうつり例の大あられふりておそろしきこと也江戸ならは必落雷あるへきか其こと曾ゐなし田舍は木多く雲あつき故なるへし　御用狀の浮説たることけふよく相分る

○廿一日　風雪寒氣又甚し　一昨日用達之ものより寒氣見舞としてそはくれたり至ゐよろし近來は腹すちはり候故そはを多くは給へす然るにこの頃は健なる故子細もあるましやと昔のことく給しに少もあたらす二度給けれとかはらすよほとからたのよくなりしとみへし也

○廿二日　風あられ寒又甚し　昨日正太夫敷をりしたりとて申せしは敷内二てう計は十月位夫ゟ段々あたゝかにて末はいつ方もしゆはむ一ッにてこと〳〵くに汗になる也敷内にてかせく人足はまる裸にてとくひもなしと是は地中六十丈位の所也深きは百七十丈にいたる人力にゐ地中百七十丈も穿ちいるといふこと珍敷場所也

○廿三日　寒暖昇降二十七度に至る火はちにかけ置しもの朝こほり居候中小性正助少々つよき風を引候ゑ臥り無間もこゝろよくて出勤しぬ其血色をみるに不宜さて其後もはき〳〵とせす此ほともかはらす勤居るなれと例の大藏の同症とみゆ某いろ〳〵と世話し遣しかし羽の鷄なと用ちひよと申し醫をもかへなとしぬ何卒よくいたし度もの也初に某熱のをひ損しか勞かとおもひしに何分醫共のさほとに云はす兩三日にはよろしかるへしとてかく長引ぬ醫は至ゑ多くして病を療するものなき地也京江戸に行て修行しても官醫を師とせされは土地のもの尊信いたし不申よつて附子大黄なと遣ふ流派のものなし澤根といふ所に傷寒をよくなをす醫ありてつねに佐州十三萬石に醫壹人半あり一人はわれ也其餘一國の醫ことことくによりて半人也と申せしよし其醫を呼て試みむとせしにこその秋果しとそのこりをしき事也かく醫のなき所にゑは煩ひてならすと此程の手當わけて心を用ひ候當冬のことく健成こと曾ゑ近來に覺へぬこと也　新十郎ところよりしさいもち來る是も先例のよし八ッ給申候　きのふ用達より歳暮として肴くれ候鯛也くしらさし二尺餘也此邊にては漸二朱位のものなるへししけの時はまれに二分位の事もあるよし夫は一年に一度位のことなるへし都ゑ魚類は江戸の三分一直段也

○廿四日　風雪寒甚し　佐渡の雪は至ゑ細やかにて玉をくたきたるかことし風つよき所故はつかのひまゑふきいるゝ也けふなとは臺所又は廊下都ゑ板の間の所はこと〳〵くに雪をはきよせておくことよほと也嘉十郎いふ給人にかし置中間のまくらもとに昨夜よほと雪ふりつもりたりと寒さおもふへしされ共硯の水はいまたこほらすこたつなけれとよるさむしとおもひしことはなき也大柴胡給たる夜なと淨手に行こともあれと足ひゆることはいまた曾ゑおほへ不申候纔なることにゑさふらひの部やの硯も氷らす用人詰所の硯はあつこほり也けさ板の間にて鑓を遣ひしにみちむのことき雪いつくまても降こみて某は例之通わらちなるかわらちのう

らへ雪しみ附甚敷すへる也

○廿五日　風雪　兼好かつれ〳〵草の體にてもとしのくれは五百年前も足そら様に走りて物静ならぬことなるへし佐渡なとのとしのくれは御用狀の日附にておもひ出しはやとしも幾日には也けるよといひぬる計にゐ御靈屋ゐ參拜ゑ途中にてはるまつ門の飾軒に立懸ある計そ都の様也市中は風吹こと烈敷雪頻なれはいつくも門さして人をる様もみへすさむしきことといふへくもあらす正月にくるものなけれ田つくり煮數の子あらふこともあらす御役所は只々くれと正月をかはらぬ浪のよせくる音にのみ聞過しぬることゝおもはれ候けふ市中ゑ貧人共二百人計へ例にゐ御賑恤の米とらすること也貧ならぬ名のものみてさへも驚かれぬることなれはこのさむさにかのさきをりの單衣の膝の半に至れる男女共にきて繩細引なむとを帶として目もあてられぬ様也此國の賤かならはしにゐ尋問等ゑ時名承りてもかく申す辭書ゑ通なるやいかになと聞てもいらへすることなきにけふは御惠のほと申聞せしにみな聲を立て難有とはいひきこの國へ來りて賤か答の耳にいりしはけふ計にそありけりものもらひてよろこふは異國近き島根もおなしこゝろなるへし○某か封し文に朱の印をしたることはなきに中番の奴の狀へ某の人ゐ參る御直披あれとの斷書して小なる朱印おしたりおかしき事也またも一笑なるは渠俳諧をいさゝかなして怪しけなる走り書なとなし奇と稱し可笑は自書もておのか曹司に蠖屈と大書せし額をかけたり周易に尺蠖の屈するもて龍蛇の蟄するとならへ稱しあれは身を抱關擊柝によせしもしるへからす某か大公望とせむには相應なるへし近頃承るねきことありて日々に王子に詣つるもの其百日と申日くれに稲荷ゐ行老翁のさき立行をみて弘法大師のことおもひ出てかの前へ出地に手して額つき物申せしにその翁は近邊の倉父にて野よりの歸りなれは狂人也とて驚たるよし女中湯と記せしをみて女中堯舜の類とし街にたちあみかさかふりはやり歌うたひて幼きものに賣與ふるものをみ

て熒惑星の下かいに下りて童謠を致ゆるなとゝせは大なるあやまりなるへし古に泥みて今をしらさる村學究に此こと必なからましとはいひかたき也おもふへき事也　昨今のさむささふらひの部やは二十九度某か居間の椽頰は二十七度いるかわは三十二度いるかわのうちは四十二度なりいまた居間の硯氷たることなしされは某よりよほと末々のものは五段も七段もさむきものとおもひやらされはむこきことあるへき也ひるも朝も夜半もをなしさむさなれは一たひ氷たる手拭のとくることなく次第にいたの如く成りて手拭ふこともならすなる也　才右衞門方かしさいもち來る九ッ給申候

○廿六日　雪風　一兩日已來正助よろし此體にてつゝきなはよろしかるへし當年兩三日の寒氣のことときは近頃になしといふされはおもひしほとのことにはあらし

○廿七日　雪風　かく日々の雪なるをこゝのものは大雪なき故に寒甚しといふ江戸のことくに氷はり霜とけて路に行なやむことはこの地になしといふ霜なくともかく雪あらむにはいかにこゝろくるしかるへき土地のものはほこりかほにかくそいひける住ぬるさとの都とはかゝる類なるへ雪もつめてふるにはあらす氷を微塵にせしことを汐風をり〳〵にさそひふる也雪にてさみたれ時雨をかねたるかことときもの百日もつゝけるなるへし

○廿八日　昨夕より暖にてけふは曉より九ッ頃までこゝろよくはれ風もなく雪けに軒の玉水おとつるゝなと都のさまにも似たり十一月廿三日よりけふまてのうちにあかり障子にひかけさしぬることは九日とけふ計也當大晦日より十五日迄之間家來目見より朝夕の料理等迄書付にて家來か伺出るおかしきことにおもひしかは大に笑ひて何にてもよしとて返したり　歳暮の禮受る人數つねよりも多し醫者其外迄ものしめ也家來給人迄同斷也

○廿九日　昨夕より花くもりの如くにて風もなくけふは雨静にふりて氷こと〳〵くきゆる也　前にもいふことく御用狀の渡海たへ果候故十月巳來之義曾ゐ存不申第一は組頭山本丈右衞門先達ゐ差控相伺候まゝ否不相分候間松かさり等も出來不申氣之毒に候處今日夕方十月巳來之御奉書六ツ御用狀箱共一度に相屆其内に恐入候義共有之夫々觸達いたし不申候ゐは不相成且は組頭ゟ之御褒美も有之候に付七時過ゟ御役所初り其上呈書都ゐ四十通餘明日中に差立不申候ゐは不相成俄に火事場之如き混雜にゐ呈書方は不寢夜通と申候譯に相成

三御親樣倍御機嫌恐悦之御事其外入記等之通夫々相屆申候

母上樣ゟ　思召にゐ御手つから之冬衣被下置恐入難有候私儀朝夕江戸にゐ着候古き太織にゐひるは新敷を相用候間衣類は曾ゐ手を通し不申候品多有之候得共　思召之品故正月に至り候はゝ愼ゐ著用可仕と奉存候ゐ今日申付仕舞爲置申候

此頃は茶は番茶之外曾ゐ給不申候處御菓子被下候間早速家來共打寄候ゐいたゝき申候其節茶給候ゐ久々にゐにはなの味を得候處格別に御座候被下候みかむのりは正月の樂しみに可仕と奉存候

屋敷替も無滯相濟右に付鐵作新右衞門等骨折之義段々忝候

尾崎の伯母御病死之由扨々氣之毒之至小子居り候はゝ少々はいたし方も可有之歟と別ゐ氣之毒に候

此頃日々の修行にゐ少々心くるしき欲心少相成居候夫故給物なと之義はとんと心に懸り不申候此體にて江戸にて暮し度ものと心懸候只々日々おそれ入候ゐ

君父之御恩難有と奉存候尤日々如斯つゝきはいたし不申候時々存外之案事等有之追ゐ後悔いたし候事も多をろか成事とはち入候

廿六日ゟ毎朝之武藝相納申候八日よりはしめ候積に候幸三郎ゐ日記幷明細書之義忝存候親類書はいまた不參候あまりと存候尾崎之義御屆書

に叔母と有之右は伯母に可有之候處親類書突合出來不申まことに當惑也百八十日懸り候ゑいまた認出來不申候は一筆三禮之親類書なるへしあたしことはさし置等閑故かゝる差支も出來る也（かくは記せしかあとにみれは親類書明細書の控は）

○晦日　くもり　けふは蕎麥給るにきのふのわさひのりなと用ひて江戸おもひ出る體也わさひを臭たること半年之内に今日を初とす鼻へ通ること甚しきか如し　きのふの呈書けふのうちに果さねはならすとて廿九日の夕よりけふの夜半過るまて呈書のものは少もいねす某かいねしも明かたに「成ける

天保十二丑年正月

○元日　こゝの例にて元日は奉行布衣にて　御宮ゑ詣夫ゑ八幡大山祇へ參り神樂の事ありて（此時は組頭も參る事也）のち御役所ゑ歸り麻上下になるもあり布衣のまゝなるも奉行の心々にゑ（近例布衣なるはなし）地役人の禮受ること也某はことしは障ことありて　御宮ゑは詣てす

御靈屋もあれと同し構のうちにおはしませすはゝかりて不參あしたより麻上下にゑ直に禮受ぬ旅故にこゝに簡易とおもひしか手輕を好めるはわか僻なれは人にことかくこともなくおこりたらさらむにはとおもひてまかせ置しにあしたに衣あらためてのちのし福ちやとそ重詰（例のかちくりの子之類也）なとを出し畢ゑ用人祝義を申夫ゑ用人披露にて給人其外之さふらひ共出畢ゑ表へ行序に徒之もの目みへいたす也をかしくはおもふなれと禮にあれはとおもひてたへしのひ居し也表の禮ははしめて某かこゝに參りしにかはらす廿九日よりはこと多く又某かみつから筆とりて年賀の狀の端書しるすも多く中々うたよむことは一兩日はならさるへき體なれは口きよめてあらひ面あらひする間に

萬世もめくれる君のさかつきの都をしのふけさのはつ春

たらちねのけさは都に千世經ぬる數ますとしのはるや迎ふる

立歸りきしはつはるもあら玉のひかりをうつせおのかこゝろに

にこりなくひくきに安きわかみつをみなうちよりてくみそあけぬる

あつかれるこゝの島人つとゐ來てけさあら玉のはるつくるなり

雪のみの島根もけさはあら玉のはるとしはしの朝日かけかな

こゝかしこ松のかさりのかとゆかてことたりかねしたひのはつはる

おもひきやわれにつかふるものもありてはるの壽祝ふへしとは

なとおもひつゝけるまに雜煮出夫よりは又禮受ること年賀のことになり

しかは歌はよまてけふはやみけりけふは朝に雪いさゝふりてくも間より

日かけみへしか又もくもりていとさむし幸ひに風なきのみ　我六朝五代

ゑ盜賊のはつかの人集めて忽に借上ゑ事共多身を亡すは器の至小なるこ

とを常に笑ひをれは殿さまの御せむのと被申候事を深くおそるれ共遠國

なれは仕かたなく右等ゑ稱今の世の常なるをいたくとかめは又人情にも

とることもある故にこゝろくるしきまゝ捨置ぬ甚しきはとかくに奉行の

ことをカミといひぬ夫はあまりに恐れ多けれはおり〳〵に風諭し上裁の

字にて正德に論ありしことなとしは〳〵咄し聞かすること也

○二日　雪風なし　けふは書院にゐ昨日當番ゑもの幷部屋住にゐ御雇御

奉公いたし候もの共御役所詰醫師共ゑ年頭受る畢ゐ廊下ゐ出候水主其外

目見いたし候町醫師共御用達町人共ゑ禮受る廣間役披露也名披露も役名

披露もあり二百人餘もあるへし　けふはこゝにゐ醫師きも入といふもの

三人ありいつれも大島のこしかはり時服風ののしめにゐ白むくをかさね

著て別段某か居間ゐ出年頭を申す是はきもいりに限候ことにて大に佐渡

にゐは高慢にすることのよし也よつて暮も正月もなきかことしと戯に申

せしにこゝも大晦日いつれもいねす元朝もてうちんにゐかけ取はくるよ

し申せし也表へ參り候町人共玄關ゐ別段年頭に出るいつれも供のものあ

り内玄關ゐ參る體いつれもあさ上下に一刀は江戸にかはらす乍去草り取

江戸ならは桐油たけの子かさといふへきを非人のかふり候森田坐いふかことときなりの花色又はちやの頭巾をかふりもゝ引にゐ下著は長くいたし上著計はしをりゐ主人のかさをあら縄にゐからけ首にかけともいたす也主人もかさなしにゐ家來は木綿頭巾も一奇なるへし風ある所なれは奉行ゑ家來にてもさしかさはあれ共用ること少しかるきものは大體すふぬれ也右ゑからかさはみせものにゐ主人も表の往來にゐは定ゐ木綿の頭巾なるへし御かめのかふる頭巾三拾年前迄は江戸にゐも小供は多くかふりたると覺へし也

すみなれしの返し

いつか早なこりとそ待あらいそのわひしきおとはすみなるゝとも

來てみれはの返し

まつとしのことの葉にしるわか宿のかはらぬいろの梢ありしと

珍らしきの返し

珍らしき咏島根も海山の日をふりつもる常とはの雪

佐渡のうらのかへし

ことの葉をみかくこゝろももしほ草けふりいふせき佐渡のうらなみ

木からしの返し

はつはるの霞鶯たねとしておくりきかせよ花のことの葉

○三日　終日大雪風　風烈敷海あれて浪のおとのみにて雪はたゝいくつもなへて白とき風の吹しやとおもふ計にて少もみへす花なとのことくひら〳〵とすることなしけしからぬ咏也さむさ尤甚し今夕かせの吹廻しは庭のうちも五尺餘とみゆる所あり臺所に雪かきて土手のことくにつみをく飯をたくもの桐油著て働き候由申出なとけしからぬこと也

○四日　きのふにかはらす雪甚し寒暖昇降器二十三度に至る甚寒より十一度ひくし

風あらきいそ山の端をのこしつゝ麓は丈にあまるしら雪

夢結ふしはしうきねのひまもりて衾につもる夜半のしら雪
吹おくる雪に竈もうつもれぬ賤はみのきてあさかれいせり
人もしれ秋果しより雪あられ降らぬ日もなきうきたひねとは
はかりぬる器を今はうらむ也なからはかゝるさむさしらしを
汐風の海のえにしにのこし劍硯はけさも氷らさりけり
玉ならぬものとてはなき氷哉うきよの外のさむさ也とて

○五日　きのふにかはらす雪甚し臺所のものみのかさにて飯かしく也風強故雪霜ほとにて眞砂地みゆる所もあり板塀白のたすきにやゝ近く成たる所もありそれは五尺より深かるへし

○六日　けふはこゝの寺院神主より町人座頭迄の禮受ること也寺院はさしてかはりたることなく神主も是又おなしたゝみ三疊目獨禮或は貳人立四疊目又は五疊目なともありそれへとの辭遣すと一疊すりよる寺院もあり廊下に參れは坐頭其外銀山方々もの共に名披露役名披露等こと〳〵くあり夫々地方役所々入口へ參りたち居候ゟ百姓共々禮受る村々名主共御年頭と廣間役披露するなといとおかし山伏の一刀を帶しときむかけしはけしほうすに似て奇也玄關へ參り候ゟ年賀也とてほらの貝吹立るは怪しくもまたかしましし　昨夜四過に筆とり居たるにはしめて硯こほりたりけさは筆あらひなと氷たり二十二度のさむさ也かゝること是をはしめとす土地のものいふいく年にもしらぬさむさ也と甚寒のしるしより尙又寒きかたへ十五度よりたり夕かたより又三十六度へかへれり　大山祇と申候は銀山の鎭主にゟ江戸の山王とも神田ともいふへきもの也そこには元朝奉行參拜すること也こゝには昔大盛の時出來たりし金ののへ五幣銀ののへの五幣あり奉行參れは其序に組頭迄には金のかたいたゝかすること也昔根岸肥前守の時右々幣一ひらかしらの上に落たりとそ其外銀山方大盛等々はしめ其引受人のかしらへ銀の幣一ひら落れは必其効ありとて大に祝ふこと也然るにことし鶴子といふ自分かせき引受居る銀山師のかしら

へ三枚まてふりかゝりたりされは右ゑ鶴子はさら也そのもの外に二ヶ所の間歩引受居しもことしは大盛なるへしとて相川のもの祝ふこと大かたならす其上三枚にゑ三は奉行ゑ頭字也とて去年よりの大漁大豐作までをいひのゝしりて佐州のものことの外によろこふ也是にて此國になへて富を突ことき こゝろあることを思ふへし吉瑞等のこと喜ふはみな欲深きものゝすること也いくらも吉瑞にほこりて身をほろほしよき夢ありとて富を札をかひ身上をつふすことなとよに多也みなよく深き迷ひゟ起也

○七日　朝ひる頃ゟ例の風雪に成けふはわかなの禮受ること也畢ゑ在々の寺院社人すけむ年賀として出るをのか名を披露する時あいといふいらへする寺院もあり布衣にひふとりのかさね附て著し神主もありなかには白むく著し寺院も少しはみゆる也可笑は七草まて並正月十五日は禮として出るものゝ混雜するとて御役所の門外へ供のものおかぬ也佐渡の定役といふもの五十人餘六十人に近かるへしいつれものしめきるもの也のしめきれはこゝの風にて必鑓をもたする也されは御役所外に正月は鑓の五十本もあるよし夫をめつらしとて見物に出るものもあるなと田舍のことおもふへき也こゝにてかた衣きるものにて正月十五日まてかた衣夫ゟは羽織なるもあり夫等はかた衣きることの少故にや仕來にゑまつのうちゟかた衣也同心より少立あかりたる使役とて某かかたの中番と同格につきあひ晝めしは中番とゝもに給中々条藏時太郎なとは頭のことくに敬ものあり夫等も十五日迄はかた衣のよしされ共七種も具足祝ひの日もかた衣きるといふは江戸になきこと也けふも村々名主等迄の禮受ること六日の如し

○八日　大吹雪　只いつ方も白粉を吹ちらすかことしなにもみへす雪とはいふへからさるかことしけしからさる咏也風甚しく家ゆれて船に居るかことし入側の障子をも吹はつし坐敷にある紙をも吹とはすなとまことけしからぬ風也某か居る所は二重三重に風の隔あるもかくの如し其餘お

もふへき事也

○九日　風雪　けふはよほと暖也とて寒暖昇降をみしに三十一度にて甚寒より尚さむしはしめ寒氣もよも甚寒よりはこさしといひし頃は甚寒のしるにきし日はさむしといひてみなかこちける也然るに二十二度迄にいたりたることありていつしかあられぬさむさにもなれて三十一度もあたゝか也といふことくにはなりてけりされは身はなれぬれはいかよふにも凌かるゝものなれは鍬五郎なと構へてわれはかくもせりこの上はならぬとおもふへからさる也いつも足らぬこゝろにて身は窮屈におくへきことそかし二十二度の寒になれて三十一度をもゆるみたるとおもふにて平日のことといか様にもなること也既に近き證あり巨たつといふもの用ひし時は一日こたつなき時はこゝろくるしかりしか某久しきおもひにて去年よりやめてけふに成みるになきそひまあきてよき也こたつのことは更に忘たり某か酒をやめしも是又同しされはくるしきは十日あまりのことなれはよからぬとおもひし仕くせはこゝろ附日こそ良辰なり其時よりやむへきことそかしあさ夕にはゝ木もちてきたなしとて塵はらふうちは外目よりは玉のことくにみゆる也をの宿にはゝ木はあれとなきかことくこゝろせぬ宿は足もいれられぬことく外よりはおもふ也人も日々に身の掃除にこゝろつくすへきこと也其つくしかた前の論とおなしことにて財このめるものゝ今果ぬるに一錢をいとふかことくつむへき事にや

○十日　風雪　寒きのふの如しをとゝ日の大吹雪を

白妙のけふり立けり磯山の雪吹ちらすさとの濱風

初はるも雪吹かせの白たへに霞みてわかぬさとの山の端

佐渡の島沖つ汐風吹あけて海よりそらにおくる白雪

あまつ日のしはしさす間も白雪の風よりふれる佐渡の島山

○十一日　風雪　夕かたより雨に成寒氣四十一度まてゆるみ候　具足ひらきの祝義あり家來にあつきもちなと爲給候　けふは役替かゝりかへ等

夫々申付るいつれも地役也其始末に寄書院或は御用談ゝ間なとゝかはる也

○十二日　風雪　正助段々よろしからすこまりたるもの也けふは當人望こふによりて醫を取かへつかはしぬけふよりふせりしよし也きのふは某の給仕をもいたし候醫師はさして六ケ敷不申候時かふあたりの類にて追ゞ之樣子勞症たるへしもしるへからすといふ潮熱もなく食物もよろしわかきものなれはけふの醫のくすり相應せはすら〳〵とよかるへし

○十三日　風雪　けふ參る醫師のはなしに何年にもしらぬさむさなりといふよつて正助はかねて病ありたるに甚敷成たるもの也とそ正助こと都ゞこゝろを附候へ上下共に主從は一體也されは正助にするにあらす則某へいたす也某昨年已來幸にして恒よりも健也されはそのかはりとおもひて只々深切をつくし候へと兼ゞくれ〳〵も若きもの共へ申聞置候身に病ことのあるに不實のことゆめ〳〵あるへからす若哉某かおもふことくにせさらむものはゆるさしと迄にいひ聞置候いまた此たひのくすりこの効ありやしれかたし醫師は六ケ敷は不申候　けふは節分なれはとて民藏の豆まき家來共へそは給うへさせしはかはらねと江戸の節分のことくにはあらすされ共此頃は大になれてうしとは不存候何事も習はしによるものにそ

谷の戸はつもる深雪に鶯のなか〳〵しらしはるの立とも

島根にははるもわたらしふる雪のまた風あらき佐渡の海原

立歸るはるの名たてにもしほくさ笘やの雪の下にもゆ也

軒端こゆ雪にうもれて立春に冬こもりする佐渡の島人

立歸るはるとし聞はまたる也都よりくるかりの玉つさ

○豆まきの事民藏のしめ麻にゞ某の居間并次ゞ間いるかは計其餘の場所は徒の勤むる也主人につれ用人のつとめもあかりたり絶倒

○十四日　風雪　寒甚しけふはとしこし也とて組頭はきたらす候　稽古

とくにはしめ可申處嘉十郎寒氣によはりたるよし等内々申日延申故無餘義今少し雪にてもやみたらはとて延しぬ實にまた稽古いたす所に雪ふりこむも甚し梁かへなとまて雪也と是は戸さしなき所はつかにあるにはやそこよりふりこむ也

○十五日　風雪　遠在所々ゑ寺社幷寺役人ゑ禮受ること例の如し　兩三日已前也漁師共怪敷海獸を得打殺候ゑ百文に賣たるをある醫師の見て壹分貳朱買たり是は東北海に居るヲットセイといふものゑ由生とりにいたし候はゝいたし方もあるへきにはやゝ鹽漬にせしよしをしき事也右ゑ時大騒にて漁師共ヲットキナセと申かけ聲きこえ候由ゑ風聞もあれと無覺束事共也あたし事はさし置ぬ佐渡の海よりはをり〳〵たいまいと申候ゑ所謂鼈甲に相成候龜あかることおり〳〵あり其時生なから得れは江戸ゑ申上ること也邊鄙異國近きことおもふへき事也あまりさむさに寒暖昇降雪鳥越といふ相川銀山ゑ遣しみしに十八度迄になりぬけしからぬ事也

○十六日　風雪　夕かたより風雪やみぬこゝもはるの遊ひや童のいかのほりもてあそふか風箏の雲井に吟するこれそはるの咏なるへしみとりにふちうち廻したるあやあるうちにあかく字を出したりいかのほりは都にかはらす夕かたゑ三十七度にさむさ減す

○十七日　大雪　珍らしく風少なし江戸風の雪也とて笑ひき　十五日十六日は在のもの休なれは相川ゑ出し序に馬やへ來りて馬をみる也別當佐渡かゝへの中間に別當或は火消屋敷の中間は走行こと馬より早し鳥はものかはとはわれらかことなりなと大にほこりきかせ又重助より兼ゑ其こと聞て若き中間の十助か雪中のせめ馬に馬の脇をとも走にはしりはつかに度に及はて倒まろひ氷に手足破りて別當のことを天神のことく感しいさや走みせよといふ故別當もいつはりのあらはるへきいとゐて火事は雪中かゝるけしきの時はなき也夫故雪中にはなれでおほつかなしなといひてあさむき置もおかし十助か門前のりにはめつらしかりて見物夥けれは

晴衣なときていつる體也いつれも可笑こと也

○十八日　雪　けふ屏風澤銀山へ例の通參る俊藏歸てのちきゝしに四人つれ也しかいくたひも雪ふみまよひて深雪のなかにおち入ては互に助あひて今歸りしとなへて五尺六尺もあるへしと深きところは丈餘なることいふにも及はさること也この雪のうちに晴間あれは一しきり宛あられふる也あられは雪のうちはなきものなるかこゝはけしからぬこと也

○十九日　風雪　物ことはなるゝそよけれ彼銀山の敷内は俊藏嘉十郎一度宛入しに嶮岨とも何ともいふへくもあらす危きいのち助りしこゝろにて歸りし也然るに佐渡の廣間役内江清五郎と申候は七十四五の翁にてしはもてつくれるかことき弱々とせし人物也され共此ほとも數十丈の敷内へ安々と往來する也自らいふ敷内へ行はこのいたむこししらすのひて却あるきよしと十助けふその體をみて歸り舌をまきて某にかたりし也是全習らひ故なるへし

○廿日　風雪　けふヲット獸差出す腹たち割て鹽つめてあり耳小にひけありて手足尾ありかわうその毛いろにて顏又相似たり手はうさきなとに近くあしは魚の尾に爪を附たるか如きもの也本草綱目啓蒙をみるにヲットセイは膃肭獸にて和にて右の如くいふは臍（ホソ）を加へいふ也さて又海のかはうそといふものヲット獸に似たるもの也只獺は上下の齒ひとならひ也ヲット獸は上齒二並也とあり此たひの大サ貳尺よりよほと大にして又齒ひとならひ也海獺なるへし松前へ行し醫はヲットセイといふなれと海獺と齒並の相違あるをしらさるか書物のかた誤るか誰にも問ふへきものなしわれは用なしとて下け遣し候

○廿一日　雪　暖氣に少々成四十一度也けふ雪中に獸のあしあとあり狸也犬にはあらすとさひたることおもふへし

○廿二日　雪風　けふヲット獸の肉を買ひて家來庄助に遣し候是は同人虚勞の故也唐山の抱龍といふ藥もありしか悉遣しぬされ共日ことにかけ

薄くみゆる也佐渡國内ゑ醫はこと〳〵くにみすれと格別にあしくは申さす某か見込とは違ふ也違ひなはこゝろうれしかるへし

○廿三日　風雪　こゝの例にてけふ白洲はしめなり第一に九十歳以上ゑものゐ御手當九十五才以上ゑものゐ御扶持被下之申渡以上六人あり次に孝行奇特ゑものゐゑ御褒美也是も三人あり　正助七日計いねすこゝろ附居しかけふひる後にわか病かく平愈せり貞助とすもふとらむなといひしり只ならぬ體故大勢よりてなため醫師にもみせしに全癇症也とそさりなから又穩になりぬ

○廿四日　風なし少々雪　是等は江戸の晴天よりもめつらしき也去年くれの廿八日ゟ初ゐ也　正助の病氣はけふは立さわくことはなしされ共眞疑半なることのみいふよし手足もはれ息つかひあしく言舌もさたかならすされと寢はいたし不申候すはりて火にあたり居る也晝夜よときのもの中番中間貳人侍共貳人宛也みなうちよりてあはれなるものにおもひて給物なといたし遣す也不便なる體也若萬一のことあらむには亂世のうち死也某にいたすおもひにていたわり候へと一同ゐ申聞置ぬをり〳〵本性になりたる時は難有とて泣候由也いとゝあはれにおもふ也母上より某へ給ひし護符とくに遣せしに先達ゐ百日法華とかいふものになりて密に髮のうちきりて日蓮宗の寺へおさめたるよし也

○廿五日　風雪　正助先同篇也　さむけさの冬と同しことのことくけさもおもひしかよくみれは手水鉢もこほらす四十度のさむさ也二十度以上ゑ時にみれは大にゆるみたる也されは共日かけみぬと日々の風雪はおとろきおもふ事にゐ御用向も段々と御取締附安心いたし候事にゐ扱又さふらひ共に一人も給人立合ゑ外は御役宅ゑ御門ゑ近所迄參りしものも無之候中間共ゑ出歩行不申候と酒なきとさふらひの外出なれは土地にても不審かり居候よし也みな民藏茂兵衛ゑ取締とさふらひ共のおとなしきによりたる故也いまた一度も叱りたる事も無之候

○廿六日　風なし雪少々ふる

○廿七日　きのふより暖氣雨に成　此ほと正助の不快いつれもしてこゝろよからしめむとて此地のきこへある醫はこと〳〵にあひて某自ら試み問ひみるにさても片田舍ははかなきものにて是といふへきもの壹人もなし去る頃淳介のきやく煩ひしころ藥をのむことといたくきらひしも宜也のむものまぬもおなしことの藥なるへし某よつて家來にこゝにて大病を得むには手をつかねて死をまつの外あるへからすされは常によく手當して身わつらはさらむ手當こそ第一なるへしといひき某なと日々の藥灸少もおこたらすなすは家來なと密に笑ふ位のことのよし也

○廿八日　くもり微雪風　よほと暖氣也雪大に消へし也　月次の禮受ること例の如し

○廿九日　くもり微雪　けふは夕かた風少し所々にいかのほりあかりたる風箏のおときこへて大にはるめきぬ　正助こと少々よろしきかにていろ〳〵のわかまゝを申し看病のものこまり其上病發已來別ゐこゝと甚敷なりし故人のこまると追々申出る故病人には某につかふるこゝろへたるへし追ゐこゝろよくならむには嚴敷しかるへしと申し置ぬ夜中給物こしらへなといたさせ蠟燭の四五丁宛もかゝり炭其外大造にてなか〳〵かれかことく煩なはつらきかたかるへしなといふものもありきされ共此程ついゆることいとふへきことやあるとてつゐえをゝしますよくむたなることなき樣にと民藏にも申せし也正助平日口やかましくこゝとをいひ順之助なとをそれ居しもの也

○閏正月朔日　風雨　月次の禮受ること例の如しけふにて御用狀三十二日渡海なし　正助よろしきかた也醫は死病とは不申候快ならは高運のもの也

○二日　微雪風あられ　所々浦方ゝ參る役人の相川へ參る時は逢遣して

其地の風俗等聞こと也其内にのぼり下り四里はかりの山の麓のものあり
しかは獸はおるやといひしにいたちの居候と答しかはこの猪鹿狐さへに
おらぬ國なれと深山なれは貂の居るよとこゝろへてんの居るならは皮
のほしきもの也と貂鼠の皮至ゐあたゝかにてさて又筆によし朝鮮の筆多く貂毛也いひしに俗間にてんとは
申せともいまた年古たるにはあらすかく〳〵の毛いろ也といふ申す樣よ
く並のいたちの如くに聞ゆれは尙尋しに家の邊におり〳〵出て鷄雀なと
とるといふされは常のいたち也けり獸と聞しに貂とこゝろへいたちの話
にいたりぬおかしきこと也このものに聞たらむには烏はといひなはへ
といふもの數羽出て夏は飯なととりくらふといふへし某こゝのものは末
々迄も例を尋し上逢遣せしになかには前後を失ひけしからぬ答せしもあ
り又耳ふたかりたるかことくにて何やらむしらすなといふものもあるよ
し某か前にてもなれぬものはかくの如し人の上たるもの下のものよりこ
と聞かむにはいかにも色を柔らけてものいひよくして聞へきこと也

○三日　微雪夕かたより晴風なしあすは御用狀參るへしなととり〳〵の
噂也正助同篇也只頻にこゝとをいふとてみな〳〵看病人のこまる體也
○四日　風雪夕かた晴　又も雪とは成けりこゝの常のよしなれ共吹雪に
はあきるゝ事也
○五日　雨に成珍らしく風少し　正助けふもひるのうちに燈心十二筋ま
ていれて道中の記認候ゐ民藏にしられ候由としとはしらねと病ひにて目
うとく成てひるも燈火用ゆるかとおもはるあはれなること也

春雨につもりし雪もやゝ消てあらはれそめし庭の柴橋
をとに聞汐風たへて打しめり佐渡か島根も春雨そふる
春雨のさそひ來ぬらむ咏やる磯山遠く雪そかすめり
はるさめののとけさしらはこし路なるわかなも雪のそこにもへなむ
佐渡の島けふるはる雨瀧つせと雪けともなふ軒の玉水

○六日　風小雨又微雪　明日役替ゑものあり某より重立ゑものは申渡組

頭より申渡もあり某か申渡の分は五半時ゑ呼出しにゐあすは御用ひとあるなといふ也絶倒いかなれはかく仕來しことにや

○七日　風微雪　役替ゑもの大勢ありこゝにても江戸ゑ如く所々にゐとり〳〵の沙汰あり申渡ゑ始末により歸りにはさふらひつるゝも鑓持するもある也其内堀口尉之助といふもの實年十八九歳計ものなり是は一國騷動のことにより て親の市太夫關東にめされ牢舍せしと聞て其日より更にの麁食しこの寒國に給壹にて夜のものもきす夜ふけてひとり雪中にはたし參りなとして神佛にいのりけるよし其時のこゝろをいためけるにてよほとわつらひけるか此程は健に成ける也平日の立居ふるまいは更也何事も行屆たる事にゐたとへは某か白洲ゐ出る程組頭へしらせむとて椽のあかり障子の外に控居るに外々の子供はみな人のみぬ時なれはさむさに手を懷にすることなとある也尤のこと也然るにこの尉之助は少も組頭の前にあるにかはらす手を附つゝしみて居るよし其外人のみるもみさるも少もかはらす此弱年に君子の行跡のきさしみゆよつてあけもちひし也こは組頭の衆中の見もし聞もせしことにゐ某もいろ〳〵と承りし也こゝのもの江戸の次には相川なりとてほこり顔にいふこと多くはかたはらいたき事なるにかゝるもの江戸に何ほとあるへしや都なれは多かるへけれとあまりにきかぬ也かくいふ某なと當時御騰用にはあつかりたれと尉之助にはちおもふ事多き也尉之助か今の姿もて日々に長したらむにはまことの君子なるへし青年のものにしあれは頻に行さきを案しおもふ也鍬五郎なと此尉之助か如くならむには某におひて何の望かあるへき才あるものは溫順と愼とに足らぬものなるに才もありておとなしく且孝なりと聞へしは可賞こと也夫か弟も孝行のきこへある也　けふ白うさき二ッ持參る一貫文にゐとゝのへ家來共に給うへさせ某もものせし也白兎はもろこしにては瑞物のことくいふにと家來へ申せしにこれらは眞の白兎にあらす秋たけしよりきつねのこときいろやゝ白くなりて雪中にはいつれを雪とか

り人の尋迷ふことくなるよし夏のうちも白き兎は野にはまれなるものゝよしけふはしめてしりし也されは江戸のとりあきのふ家に白きもまたらなるもあるは珍敷物なるへし

○八日　風雪　又さむさに成る御用狀の來らぬの外ことの葉記すへくもあらす十二月正月の便江戸にいかなることありしやしらす十一月三日に御用狀參り其後十二月廿九日に參りさてけふまて御用狀はこぬ也けしからぬ國也

○九日　くもり風なし　こち風のとかにていかのほりの風に吟する聲なと春めきぬこの體にて明日まてことなからむには渡海あるへしなとみないひぬ　きのふ同心共博奕打十人計召捕來る今日落着申渡す水野正太夫懸也こゝろきゝたる男也

○十日　くもり風なし　けふは御用狀參り可申とゝ事にゐ一同まち居候處七時頃御奉書貳ツ御用狀四箱參り候ゐ正月廿二日までのこと追々と一覽所々ゝ書狀數十通に付一兩日は書物歌もやすみと存候今日は珍敷南風にゐみな頭痛いたし候由私も少々頭痛せしかかたなと爲打候處忽に相直り候わさひ御菓子のり等被下難有候御用狀如山御用多に付菓子等ゝ沙汰に不及いたゝき候まゝ先つしまい候其内大みかむは直に初尾いたゝき候ゐ此程正助不快以ゝ外よろしからすみかむの類好み候處更になく今日用達ゐ申付穿鑿いたし候程ゝ事故私初穗たへ直に一ツ正助へ爲持遣し候處頻になみたをこほし候由也あはれなること也其外ゝ家來共ゐは追ゐ菓子遣し候由にゐ後日のたのしみといたし候家來共おとなしく候故給物は私より家來ゐ遣し候事たのしみに相成別ゐよろこひ申候舊年來三度の食事ゝ外少ももの給たくなくなり申候書物の御かけかとよろこひ候ものくひたきは佛に申餓鬼道なるへし其くるしみを少々のかれ候と存候され共家來共ゐ遣し候時は必一同にゐよろこひ候ゐ給へ候間別ゐ難有候　乍序相記し候日本も天竺もからもおなし天地故少々宛の名は違ひ流義も違ひ候

得共おなしみちにおち候事多可有之是神儒佛のおしへのある所と存候お
なしみちいにしへもおなしことに候得は　御三親様朝夕御信仰の法華經
今の日本へもひろまり候事に候なれ其内にもいかりと欲とはいたくいま
しめられ候ものにゐ此二ッありて則法華經に背き候故ほうぼうなるへし
子の慈も孫の慈も過れはみな欲にゐ法華にそむくにて衣類のよく居所の
よく食物のよく尤法華の大敵と存候この頃は以上之欲は少々減少いたし
候歟と存候間私は佐渡へ參り讀之不申法華の信者に成候様に御座候　御
三親様は別ゐ御信心の御こと故不信心のわたくし笑奉り候ようのことな
くと御笑くさにしるし候

○十一日　くもり夕微雨　春色也

○十二日　くもり　正助今七半時頃死病いたす某か供いたし遠國にて果
候上は討死も同前なれは手厚いたし遣候様申付遣す尤今日ゟ三日之間某
は精進いたし遣す是は正助ゐまことにこゝろ計のあいさつ也

○十三日　春雪のとかにふるいそ山打けふるけしき珍らし　正助義今七
時葬送てうちん四つ侍等爲連候寺は相川寺町曹洞宗高安寺法名石枕院天
外輝昇居士給人幷さふらひ用達等供いたす月拜料等附遣す積也母上様御
信心の義に付一度題目講被成可被遣候當人百日法華に成候

○十四日　風雨さしてさむからす候　此節魚類多し新十郎へ頃日のわさ
ひ遣し候處ひらめのさしみいたし家内一同にゐ珍らしくたへ候ひらめ一
枚は五十文也とそ此程は十六文之かれいにて一度のさい澤山也野菜豆腐
のうれ不申ことおもふへし　一同無病也御欠々

○十五日　くもり　月次の禮受ること例の如し

○十六日　春雪　池の氷全とけぬ　けふ死罪のもの二人あり見物夥よし
也死罪に申付候旨の申渡せしに忽にこし拔てたゝれす荷ひ參りて切しよ
し也これは江戸にはきかぬこと也こゝは牛馬の小に力なく人もそれにつ
れしにや正助か葬式の時の導師を用達共ほこりて袈裟も美々敷燒香又江

戸風也といひしよし燒香に江戸風けしからぬことはさらは出産なとにも江戸風あるへきかといひきけふはこし拔たるを聞て新十郎は夫は佐渡風の死樣かといひて笑ひし正助か葬式は用達のものも參候出僧も四人ありてにきやか也しと也たそかれにて雨ふりしか例の見物多出て老人なとは念珠を出してをかみなといたせしよし也されは遠國にてあまりに手輕にすれははつかしき事ある也挑灯も四ッ其外も右に准してよかりき

○十七日　雪風　けふは正助か初七日の逮夜なれはとて俊藏か料理にてすあえ其外葛かけのひらなとにていろ附の飯たきてみな〳〵にふるまひし也あすは某か使者もて代拜あり月々の香花の料なと此ほと定てをさむること也民藏よほとの入用と申せしかはされはとよよからぬことに物いるはもとよりよろこふへきことかはされともかゝる時にこそ心はかりのことせむとて常に儉素にするにあらすやといひしはさはありかたき事に候とて退けり

○十八日　くもり　けふは正助か初七日也あはれ早きものにそ有けり給人其外寺へ參りぬ某か代參のものゝ坐には毛氈なとしきていかめしき樣也とそ讀經の僧數人參り立派なる佛事也とそ

○十九日　晴　八ッ時頃まてめつらしくくもなし唐山に常に雨ふる所ありて日出れは犬ほゆるといふ佐渡も多はおさ〳〵其ことのおとるへくもあらす半日も日かけみへたることと十一月より閏正月迄のうちに四日計なりけしからぬこと也（晴候日去月廿八日同九日十一月廿七日同廿日同四日此外多分は雪雨也あられは此五日之ころにも必ふりし也けふも夕かたより）

はくもり也されは冬より春に向ひては晴るゝ日一日もなしといふともそらことゝいふへからす

○廿日　春雨暖氣也　今朝迄庭に高壹尺餘にゐ三四間程のこりたる雪夕かた迄に少もなく消申候　夕かた十三日出之御用狀相屆菓子柿等頂戴新右衞門其外之書狀相屆いつれも不相替と之事大悅其外に恐入たる風說頻に落涙され其微臣のいたすへき樣無之卽刻身分相愼精進にゐ尤魚類たうへ不申候とて精進と申譯には無之候間魚類は勿論都ゐうまきと存候もの

は給不申候積にゐ三度なから湯漬にゐ香物ゑ外は當分給不申候積家來ゐ申付御用向等ゑ外上下一同つゝしみ候積申付候留守宅にゐも別ゐ心附候ゐ一同精進にゐ御信心の法華經にゐも御よみ萬々分一ゑ御恩を報しのこゝろ可有之候一同少も不慎あるへからす某かかたなとにゐ若哉如何有之候ゐは別ゐ不相濟少も禽獸の相違なきものに可有之候間一同格別ゑつゝしみたるへし是は　三御親樣御手本出し候ゐ一同ゐ爲御見被成候樣と存候義に御座候

○廿一日　春雨　つねにかはらす何事もいたす（脫アルカ）只こゝろくるし

○廿三日（二カ）　くもり　北海によし島といふ所ありてそこのよしは竹よりもふとしをり〳〵石州なとゐ流寄といふ故に定ゐこゝにも流よるへしとおもひし故に承候時とし〳〵いくらも流寄といふふときはさしわたし壹尺壹貳寸以上なるもありとてけふ四寸はかりにてしなり（さしわた）長六七尺ゑものの二本をみたりよしといふは世に女竹といふものにおなし姿なるへきに並の竹のことくいかめしく節立てよしの姿は更になし全の孟宗竹と少もかはらすされ共こゝにては唐よしといふものゝよし曾ゐ論決せす田中從太郎にきゝしに是は異國より流寄ものにゐ竹ゑ類にゐよしにあらすこゝの矢からといふ浦へよりしには地名のこときもの捷云々の五字穿附てありきされは朝鮮地方なるへしかしからみなとの類に用ひしや貫の穴のこときもの穿ちしもあるといふ眞竹は大小二重の筋ふしにあり孟宗は一本かと覺たり孟宗竹なとの北海筋に弘くならさるうちに見なれぬ節の竹なれはよし也と申せしや今この竹の流よらむに誰も孟宗ならむといふは必定也既にけふもきゝしにこれは何そといふにみなよき孟宗竹也といふ也されはいにしへより唐よしの名あるは解せぬこと也奥羽越後信濃なとに竹あるは至ゐ近頃のこと也越後には今もなし佐渡より參る也

○廿三日　朝晴夕かた春雨　けふ　御宮幷大山祇幷八幡ゐ年頭ゑ拜禮として罷出夫々孔廟ゐ參り拜禮いたし同所武藝所ゐも參りみしに孔廟は十

七史其外書物稽古所に夥つみ重立候役人三人教授目付句讀師等あり十歳より十六七なるも多參り居四書其外をよみ夫々手習し畢り大人は武藝所に參る也武藝所八間計あるへし立派なること也六七人にゐ素やり鎌鑓の勝負ありき夫々組頭宅に參る組頭麻上下にゐ出迎いたし奥に通り家内之もの共迄にも逢候事例也即日組頭はまた某か宅に禮に參る也是も例也新十郎の御役宅は市中にありけふ某か出門より右之往來途中見物山の如し愚にも又けしからす候子供あとより附歩行牽馬をみて與し聲をあけてほむる也可笑のいたり也江戸ならはひき廻しか氣ちかひかなまよひかいつれかく子供迄附歩行見物によきことはなき也子供はさら也犬まてもほゆる也是は陣屋の犬三疋あり前々より奉行之外出にはいつく頃迄も附歩行也出立之時は五十町道十里ある小木の湊迄參り逗留中も附をる也よつて犬の歸にて奉行の渡海をしるといふその犬例のことく附歩行故に町々の犬ほゆるなるへし犬は珍敷ものを吠るものなれはかちをたてゝあるくものをみてほゆるも是又しるへからす　奉行御宮に正五九月等の拜禮あれは御役所は割休なるかこのほとは至ゐの御用多故例の通組頭參り黄昏迄居りし也きのふも然り是は此ほとしらへものゝつとひし故也例の通寢起をするなれと正月は日々に二十三十の歌よまぬ日のなかりしかこのほとは一二首位也

○廿四日　くもり　春雨のあとうちけふりなかめのとかにみゆ

○廿五日　くもり　今般人撰にて目付役に成し清水季左衞門は大龜と盃ことして三升の酒をのみたる或はあやしのものにたふらかされし人を救ひしなといくらもはなしある人也其内に浦方の御番所役たりし時在住故相川より引移しに其頃異國船の御備向にゐ彼御番所役人の住居あらたに移したるよし也然るによる〳〵喜左衞門臥りし夜のものゝ上に老さひたる女來るよと夢みて目さめけることよこと也けるか終には現にもみへけりされ共得とためし てのののちとおもひて一日二日過けるうちに留守の夕

濱手浦といふ所の御番所也

かた雨戸建るとて喜左衞門か妻の喜左衞門か居間へ行しに小紋の單ものきて細帶しこしより上はけふりのことくこしより下はあり〳〵とみへける老婆の居て妻を見なから雪隱の内に入たり妻は人こゝちもなく歸り其ことを喜左衞門歸りてのち語りけれは喜左衞門の申せしは實は此頃かくし居しかわか顏の色のあしきは彼か故也いかゝせむとおもふ也其内彌の所見定たらむには仕方もあるへしとて其後はひとり右之居間にいねけりよくみるによことに雪隱のうちより出て障子を明喜左衞門かまくらへ來り何事もせて明かた又歸る也かゝること凡二十二三日得とためしてみてある夜障子を明ていり來る所をわきさしにゑたしかに乳の下まて切たるかことくなりしか手答もなくかの老婆は障子のうちにいりもせす又雪隱のうちに入けるよしある人の語りし也今日家來高村俊藏もて聞しに喜左衞門の答ゆること前の如し喜左衞門の申せしは御番所新につくりたる所墓所に近しおもふにしらすして古墳の上に雪隱を建たるなるへしとおもひしかは尋みはやとおもひし内に轉役せしと也尤切られけるのちは何事もなしそれはある人にきゝしにかゝる化物はふし戸の外におのか草履の左のかたをうらかへし置はいてすと申せし故きりしあけの日に錢もいらす出來るなれは申ことくかせし故に出さるも又しるへからすと喜左衞門より俊藏に物語せしよし也

○廿六日　くもり風　きのふよりさへかへりさむし初冬のころ雪ふりそめし峰計に少し雪ふりて里はおり〳〵雨也　澁手といふ所におとなしき百姓のありけるか与風行衞しらす欠落せしとも海獸に食れたりともいふ也けしからぬことにて且は御預りの民壹人行衞しれすに成しは恐入たる事とおもひて手をかへて品をかへこゝろをつくして尋しに其村にあやしの聞えあるものありけれは三人迄召からめて尋問ひしにさたかならすこと至ゑまきらはし其内又彼をとひこれを尋ねて疑敷もの貳三人禁獄せしに漸盗して人を殺し遠つ沖にしつめたることのわかりし也島國にも又相

應の惡人はありけり

○廿七日　はる雨にゐのとか也　鍬五郎其外共よくこゝろへ候へばはのそたてたるは三百下ると卑諺有之候此ほとは養實御三父母のおはしませは定ゐ別ゐ御いつくしみ深かるへし夫にあまへ候ゐ三百下り候はゝ御三方三百ッゝにゐ壹貫程の下りなるへし御いつくしみは有之候とも心得候ゐ三百文下り無之樣心附第一たるへし

こそよりの氷もとけて池のおもにあやをりかくる庭のはるかせ

あらかりし磯邊のなみの白雪もきゆるはかりのはるのうなつら

こし路なる花なき里もはる雨にのとけこゝろの空つありけり

こし路にはみ雪ふる也都なる東のひえは花もみへきに

此ほとかれい至ゐ安し相應の燒物なるへきより大成を十三枚にゐ百五十文にゐ買たりと中間いひて壹枚の半を民藏にくれしか一度にはあまりけると也

○廿八日　晴　けふ前の幽靈に逢たりしと聞し清水喜左衞門目通ゐ出しかは聞しに少々相違あり二十三年以前に季左衞門澁手村のうら目付被仰付其頃は獨身にゐ老母と兩人御役宅ゐ引移し也母は玄關ゑ方喜左衞門は御備の鐵砲等ある所に刀を床に置わきさしを枕元におきてふせし也引越せし日ゐ夜ことに二度三度つゝ何か來りて夜具の上ゐのりたると覺胸くるしく成て目覺たり夜こと故こゝろを附しにはしめ雪隱のひらき戸あく音してまもなくあしをとしてやかて夜具の上にのほることたしかにしるゝ也よつて脇差をとらむとするに手もあしもなへしひれて少も動かす殘念におもへともすへき樣なし十六夜の間つゝけて如右多時は一夜に五たひも來りたりとそ十七夜の時は手少しのひてわきさしのさけ緒指にかゝりけれは力にまかせて引たるにわきさしころ〳〵と轉ひていたしかたへ鍔のあたりたり然るにいかなる故にや身自由に成たれは起あかりみしに白髮ましりの六十計の女細帶にゐ白地の單物を著たるか喜左衞門か起

あかりたるをみて居なほりて見かへりたる樣さしておそろしくもなしなみの老婆也とそ立て便所ゑかたへ往かむとする所を力にまかせて切たるか手こたへもなく忽にひら〳〵と便所のかたへ如往にて行衞もしらす成たり然るに其後も又毎夜來れともこのたひは少も手足きかぬ故にそのまゝに置し也其内澁手村に臼杵如庵といふ醫のありて夫に書物をかりみしうちに板本にて厚き小本のよし いろ〳〵病氣のくすり又はましなひまてあり其内襲（ナツフ）といふ廉ありけるうちに草履のまちなひありけれは其ことくにせしに二十一日夜まてに止たりされ共右は深くかくし置たる也其内に妻を迎へて其妻か喜左衞門ゑ居間にゐ前に記するかことくなることのありし也されは共女の尙も可恐かと前のことは語らてありける也ある時に當時江戸本郷ゑ御役所ゐ勤番の山田市郎右衞門は叔父なれは其ことかたりしに夫ををひをひに語つたへて某か耳にも入恥入たりといふ尤右ゑ御役所は古墳の多ある地故にか其後も怪敷ことはあれと喜左衞門かことくなるはあらす扨又刀に恐れたらむには又と出へからさるに其後も來ること若恐さらむには切たるとも逃にも及はすこれはいかにも解せぬこと也其餘は不思義なることなしといふ　よにおとき奉公といふ書ありこの日記は母へのおときこゝろ故に怪敷こともありのまゝにかく也怪敷ことはかたるましきことなりとて餘人のとかむことなからむことを欲する也おとき反古のおとき奉公の幼なりし時みし書なれは忘たり　怪敷ことにゐおもひ出せり西洋のことは鍬五郎學ひもいたし不申候得共されは共いかなる取沙汰等あるとも決ゐいふへからす其御役にもあつからて西洋のことひたる林子平渡邊崋山かことなとおもふへし小學のいましめにも邊防のことはいはぬことはありしそかし

○廿九日　あさは例の風にゐしくれの如く村雨ふる

都よりこと國近き島根にはしくれふるなりきさらきの空

村しくれ驚ぬらし梅の花雪にはよしやなれてさくとも

雪解のあとに庭きよめして

これのみの春のなかめそ若草をはらはて賤の庭きよめせよ

うかりけるあしの下をれ枯尾はなはらえはあとに花そまたるゝ

○晦日　晴さむし　このほと魚類多し四寸以上のかれい十二枚にて百文なりとそ

○二月朔日　さむしおり〳〵雪ふる　こゝにて江戸風なるものは兒のあくるいかのほりと風箏（うなり）の音のみ也月次の禮受ること例の如し大蛸を退治したる牧野左司馬にけふ逢し序承りしかきゝしにかはらす江戸にて畫かける蛸の化物のことし眼金色に光り大さ三寸其餘もあるへし頭は至ゑ大なるかほちやほとありたりといかる時は朱のことく成いろを發せり海底より左司馬をめかけてうかみあかりたる時は緋の衣たる僧の走るかことくみへたりとそいほのあたりたる所は手はれたりされと一日計にゑ治たりといひき

○二日　晴寒甚し泉水又氷れり三十四度の寒氣なり　けふひらめを買て家來ゑ遣す丈貳尺五寸餘あり至ゑあつき身にゑ二枚におろして煮るとそ代五百文也某はかゝるひらめをみしも初て也味もよろしといひき某は此程精進中に付たうへ不申候

○三日　雪又あられふる風はけし　二三日已來寒氣さへかえり雪にて例の大あられ汐風吹あれて又ももとの姿に成ぬされとも泡雪にてかつそのなかに鶯のなく樣はるとはしられけり池のおもの氷のとけもはてぬにあられ打ましりて波のまに〳〵動さまめつらし

しまねなる春をはかくと鶯もなれてなく蘭あられ汐風

鶯のこゝろもしらて玉あられ今きさらきの長閑成日に

松の葉の濱のかたに向ひたるはなへてくち葉の色になりぬ枯るゝかとおもひしに汐風にもまれてかくは成也今にみとりの出へしと地役人のいひ

けれは

常盤なるまつの梢も汐風の更にやしほのいろみせけり

夕日かけうつるとみぬる松かえは汐風そむるもみち也けり

○四日　晴至ゐさむし三十二度に成　頃日魚の價記せし通なるか組頭に聞に組頭か方ゑ商ふ價は奉行と凡三分の一をたかえり地のものゑは又三分の一のたかひあるとそこゝの一匁は廿六文なるに以前御徒目付の家來魚荷ひ行をみて價をとひしに十匁といひしかは貳朱につけたるを無餘義さまにて貳朱に賣たり十匁は三百にも遙にたらぬをかくはせし也尤其こと聞へてつくのひたると承る昔より利欲深きくにといふか某の目にはおなしことにみゆる也只奉行の家來等江戸のもの珍敷けしからぬ價を貪る故にかくはいふなるへし江戸ものゝいなかものとて欺かは島人の江戸ものとて欺かた少としるへしされ共われは別段なりとて己か智より欺かれたるには大なることもあるそかし人の欺は少なれともをのれより欺かれたるは甚敷にいたる也智の弊をそるへきこと也

○五日　くもり　さむし此程御用狀之渡海無之に付江戸之樣子不相知候落著物其外白洲向相かた附候義にゐ至ゐ御用多也今日等も白洲ゑ貳度出申候落著物四口有之候

○六日　きのふより少々暖氣にゐ風よろし　御用狀之渡來まち居候處ひる後に廿一日廿六日之御用狀同月晦日之御奉書共到來同日　大御所樣薨御辰刻被遊候と之御事鳴物普請とも停止之旨被仰下何とも可申上樣も無之尤　公方樣右大將樣には御機嫌不被變候間可心易と之御事も御奉書にゐ申參り一之安心には御座候得共いかにも　大御所樣御事は恐入たる御事閏月七日以之外之御容體かとも奉恐察候得共萬一之浮說かとも欲目とやらむにて奉存され共其頃ゟ愼はいたし居候處今日之御奉書今更之樣にゐ只落涙之外可申上樣も無之某は　御先代に支配勘定之出役に被　仰付候義はしめにていか成事か事も整不申義を布衣之士に被召加候御事迄は

御先代ゟ　御當職中にゟ其年ゟ玄猪に賜り候　御手嘉珍にそ某か家にて
のはしめにはありき其翌年御辭職あらせられけれは其嘉珍は世にもなき
寶と常に甲冑とゝもに納置也其のちは　御目見なと月々はなかりしか西
丸御普請ゟ事に付殊更ゟ御沙汰共かふり奉り去年七月出立ゟ節も　御前
ゟ近く被召候ゟ殊更ゟ御沙汰共ありき其ときいさゝか御ものこしの常に
おはしまさぬかことくに伺奉りて長く健に世に被爲在候得と計心に祈り
御沙汰ゟ趣難有事におもひ居りしにけふゟ被　仰出頻に其時ゟ御姿おも
ひ出て可申樣もなき御事也　御先代樣ゟ諸役人ゟ御直話ゟ事長守りとも
なると承れはあはれ一たひは御直ゟ御物語共伺度と常にこゝろにおもひ
しかおもひし事ゟかなひてか七月ゟ　御前も被　仰付ける也　兩御所樣
とももとより露變らせ給ふことはなけれとも　上は萬代の御齡に被爲在
は運あらむには尙も　御前のあるへけれ共　大御所樣の御事は七月後は
又も御不出來勝にゟ表ゟものなと殊更の召出しはなきかに承候得は今に
いたりては千金にもかえかたきことゝなりけるそいともかなしきことに
ありけるかく輕き某を御取立ある御恩少も忘れなは人にはあるへからす
よつて妻子家來に至るまて少も停止中はさら也よのなかつねの樣になる
まて人よりも深くつゝしみおるへきことにそ　母上樣より御細書相屆
難有奉存候此節普請はなされす候得共屋敷は　大御所樣より西丸ゟ御褒
美にて被下たると思ゟは少も普請なとの御心附あらせられすとゟ御事御
尤に御座候　大越より菓子被賜候由難有よろしく御傳可被下候御老人お
り〳〵の逗留等有之樣いたし度ものに候一同別條無之とゟ義大慶に候
中務大輔殿ゟ御不快さたかならねとも家來より文通等心得かね候最早七
十五歳にかならせらるとおもへは頻にいかゝと御案事申也家來竹内喜平
ゟ兼ゟ御頼ゟ石廻し方ゟ事斷參りたるなとこゝろかゝり也
○七日　くもり　けふは昨日御奉書のこと地役人共ゟ申渡其外江戸ゟゟ
呈書等にてこと多し

○八日　晴風　あたゝか也御凶事に付何事もなふ只つゝしみ居るはかり也　親を切候ゐ逃去候盗人を其子捕へたり子のうけたる疵十五ヶ所深疵六ヶ所也されば共死へきほとのことにはあらす親の疵は眉間其外二ヶ所なれ共あさしさとには珍敷勇氣あること也

○九日　晴　此程は漁も天明ゑ御例に寄三日ゑ間漁家にゐ相休市中は物さひていかのほりあくるものもなしよるは木戸を打ゐ往來なしたま〳〵海上に小ふねみゆれは舟を出し候ゐ漁師か否を糺すほとの事也

○十日　晴　西南風にゐはるめき申候

○十一日　晴　大にのとか也

○十二日　晴　大にのとか也けふはいさゝか東南風のこゝろにて庭より遠目かねにてみしに冬の海をおもへはまことかと疑ふはかり也山なす雪とみへし浪はいそのまに〳〵はつ花程の咏をのこしみとり成筵をのへたるかことくなるに漁舟花のことくうかみつるも網引も手にとるかことくみゆ遠沖は能登ゐ越後への船のかよひちなれは帆かけ遙にみへたり咏いふへくもあらす候この島にてはすけとうと云魚を冬よりかけて今も夥とる也その子或は干し或はしほにして大坂より中國にあきのふ也日々の出帆ことに多し（すけとうは江戸にていふ小たら也すけとたらともいふこしにてはなへてすけとうといふ也佐渡にて國々にも商ふ故に佐渡のたらといふ心にて佐渡といふをすけとうとなまりしや土地にてもかく心得るものもあるよし也）人々とみたらむにはさそおもしろかるへきにと却ゐ故郷の情おこる也昔は北海を乗るもの佐渡と越後の間をのりし也（佐渡の名は瀨戸の狹渡かの類なるへし）夫故に佐渡の小木赤泊夷なといふ湊はにきわひけるに凡二十年前よりのことのよし佐渡より遠つ沖のかたを乗船多なりて右ゑ湊は大に衰たりちまたの説に松前より東北韃靼の地かたみゆるまてに佐渡を乗こし遠沖をはせてひとまきりに西南へ行は下の關ゐ行也却ゐ危からすといふなつより秋の半末まてはよく西北に帆かけみゆる也此ほといまた此海路は乗らぬとみへて西北に帆かけなし梅花はいまた粟粒ほとのつほみ也なか〳〵廿日も其

餘も過すは咲へからさる也こゝにてとる魚にこうなことといふものあり甚いはしに似たる下魚也漁人か極下さまのものならては食せぬ也是か海上へよる時は水山のことに高くなるよし夫を漁父のみて舟よせてすくひとる也是はほして田の肥し或はしほりて油と成して國々に商ふ也

○十三日　快晴　けふははしめて春霞たちて椽よりみるに相川の町より海へかけうちかすみたるけしきよろしよつてものみに行みるに遠沖に春霞うちなひきて海原へあさ日のかゝやきたる霞のなかをもの見の前をも漁舟いくらも行かふけしきこゝの辨天か崎春日崎なといふ所の春色まて眞によき咏にて何もわすれひとりものみに居しに御用狀の參りたる旨を民藏より申聞る間居間に歸り候ゑ夫々一覽候先以いつ方も別條無之　三御親樣とも御機嫌よくとゝ御事奉恐悦候其内晦日四日ゝ内四日ゝ御狀に母上より養生ゝ義被仰下難有候專養生仕候此便に友野先生方も段々と巨燵其外ゝ事身を大事にいたし候樣とこま〳〵と被仰下候事　母上と御同樣にゑ別ゑ難有候某こゝへ參り所々ゝ文通も多候得共教諭のこと有之候は　母上扨は友野先生并林大内記佐藤一齋翁澤村宮門以上ゝ五人ならては無之候いつれも諺にいふ膽に銘したる御事也よつておもふに親族は別段ゝ事餘は書籍ゝ上に明成人ならては異見は容易になしくれぬかとおもひしかは地役人の田中從太郎と申候ものは學者にゑ詩文もよくいたし田舍風は可有之候得共よほと學問は有之佐州にゑ漢末に楊震を稱するのことく申ものなれは卽刻に居間によひ其こと申聞友野先生ゝ御文通をよみ聞かせさて遠國百里外よりも如此ゝ教諭ある也學者の眼といふものは別段也そこは某か朝夕のこと昨年來日々にみもし聞もせし上は定ゑ議することと多かるへしもとより短才不行屆なれはそはにて日々見たらむにはいふこと尤多かるへし以來はいふもさら也唯今迄ゝ内のことをこ也とおもひしはつゝますにかたり候へ信切なるもの百里の外なをかくの如しといひて深く從太郎にたのみおきたり從太郎はよほと本はよみたる男也君の

喪に居る禮さていつ頃か魚食をたうへ候ゑ可然哉なときゝしによく答へ
き序にふち衣の喪の服とすること日本の禮也ふち衣は海士か汐かけ衣な
とに類することにも用ひ貴人の喪にもよみたる歌共多けれは今いふたふ
さよみなとの類にてあらよみの麻なとかと聞しに日本の古きためしを引
さてふちとは葛布にゑ今も駿河其外の田家にゑ葛をふちといふことなと
夫々に例を引たり其外先達ゑ如矢卷て懐にするの講義をするを聞しに漢
書を引ゑ遽伯玉か卷といふに其直こと弦の如しといふより事なきときは
弦まきにおさむるかことくにて弦の直に似たるといひき矢よりの對弦と
いひしもおもしろし母上并友野先生か養生のこと被仰下候間こゝに其ほ
とを記しぬ頃日菜の物給不申候（菜をも止候は西城の御こと承りし以後也追ゑ復し候積）間家來の申にまかせ日々地黄をのみ勿論
桂樹并柴胡の劑をも隔日にたへ灸は三里からかさ脊の十穴とも日々に御
座候多分三百てうより以下なることなし食物も三度のうち一度は汁たへ
申候汁は多分自然薯蕷也其外ゑもの何も少もたへ不申候菓子も小さく切
たる羊羹三切れ位給候義正月以來今日まてに二度有之候今日も家來ゐ被
下候煎餅の初穂三本被遣候干菓子ゑ内ひとつ給あとは組頭に進し家來ゐ
遣候是にて煩候はゝいたし方は無之位に御座候湯も月に三度くらひにゑ
必潮湯にいたし申候先達ゑゑ便に記し候尉之助孝行なれと親の禁獄を案
し且は三年の間の精進其外にて體つかれたりと聞て某の筆序に左の如く
記して家來ゐ遣し家來より地役人へ遣し候よし是は尉之助位ゑ身分にゑ
は奉行か親敷言葉遣しかたけれは也

枝折くさと題しぬ

孝は百行のもとゝ申候得は能孝行に候得は何事も出來ぬと申ことはな
きわけに候其内にも可心得はおのれか身を敬ふ事に候己か身を敬ふ事
のうちに近くはわつらはぬ樣にいたし度ものに候孝は力をつくし候事
にゑ身をいたす事には無之其上おのか身は親の枝に候得は枝のいたみ
候はみきのいたみ候に付親の身といふことゆめ〳〵忘るへからす畢竟

道を二つにいたし候故とし老て不行跡になり親へつかへ候みちをもて君につかへかたく成行候一毛をそこなひ候は不孝なるに戰陣に勇なきは孝にあらすと申敎により思へはもとより忠孝は一つのものに付今親へつかへ候心を失はすゆみはり月のたゆまてひかりまさり候ことくせむには末なかくものゝふのみち正敷ふみて日の昇かことくなるへしされはわつらはぬことくするそ孝のみちわけのほる枝折なるへし

右之如く心得居しか大雪中に笠取の山をこへ銀山の見廻に行へくといひしはことは果ねと宜しからすとの先生の御敎によりて尙おもへは尉之助へ書遣し書にもたかへるかことし以後はつゝしみ可申大雪中に右之山こへいとつらしとかしこへ行家來常にいひ地役人共も某等はかく辛苦也此こと序もあらは聞え上給へかしなとしは〳〵家來にもいひしよしなれは一たひは其辛苦をもしるへく且は雪中に先年泉本主水正か銀山へ行て役人共の勞を慰しことあるとの例をも聞し故に一たひはいひ出しなれと先生のことのありかたさにをりかへしおもへは過たるかことくおもひて深くおもひかへし候也　きりほしゆは被下難有候追ゟいたゝき候樣可仕候藥灸計に無之氣之保養可仕旨難有候其氣之保養と申候義第一之工夫に御座候得共中々一寸に參り不申候此ほとは庭の雪もきへ候間被出候得共頃日迄は出來不申庭は梅さくらも五六本計有之候松の下には水仙福壽草なと有之殊に福壽草はよく開き居候間おり〳〵見申候ゟ慰に相成申候氣之保養と申義六ケ敷事にゟ遊ひくらし候義氣かゝりにて却ゟよろしからす書物をみ武藝さてはむたのかきりに候得共長唄又は謠曲のこゝろにてひまに歌をよみ申候日々夜も遲くあさも早過候義つゝき候時は五六日間位に春來は何事もおき候ゟ暮六くらひより夜明までふせり申候是は保養之樣に御座候されは共おり〳〵臥り候計にゟねられ不申候事も有之こまり申候昨年來氣之保養專に心懸候ゟ何事もなくこゝろ安かれといろ〳〵工夫いたし居候得共六ケ敷事にゟ十年も立候はゝ少々は出來可申歟おほつか

なく奉存候され共右之如くいたし候間御安心可被下候在勤は見も聞もせぬことにて却ゐ江戸より心の保養に成候事も有之候得共又不出來之時は江戸のことをおもひ出し候ゐ氣くろうにも相成候され共こゝろをよほとくはり候ゐ氣くろうはなくくらし候樣いたし申候昨年頃よりはよほと減申候御安心可被下候兎角に氣保養は宋明儒之書一覽候ゐ人しらす被叱恐入候とあとにて暫こゝろをたやかにて苦しく無之哉と被存候間こゝろのやすきこそ氣ほように御座候間書物は毒には相成不申候御安心可被下候正助哀傷之歌共一覽感吟候　市川ゐよろしく短冊之禮申通し之事　老僕五助不快と承り候あれは十四五年も奉公いたし候ものに付柔かなるものにゐも被遣候樣いたし度若萬一之義有之候はゝよく御手當可有之候五助は某か脇坂より遲歸り候時は案事候ゐ不寢扨又おのふゐ附候ゐ島を市川へ遣し候處島の娘上總にて大病之時其こと島へ咄たらむにはもしや暇にても願可申歟されはおのふか難義なるへしとあの愚直よりまことあれはこそ其心附ありて島へはかくしたりとそ其身の孫よりも主人之娘を大切に心得候はまことに得かたき老僕也おり〳〵考候にさては某はこれにては愚の五助に遙におとりたりとおもひてみつから叱ることもある也某なと五助か忠直にて更に忠直をしらす居る程のまことに一生のうちに成候はゝ前の氣保養はいくらも出來可申に五助にはつかしきこと多くおもへは恐入たる事にかく被　仰付置候は猶更のわけと存候義に御座候くれくれも五助のことよく御いたはり候樣とおもひ候義に御座候老人殊に病氣に候上は酒を被下候ゐもよろしかるへく候

○十四日　天氣ことによろし鶯其外しらぬ鳥なと庭にきなく也しらぬ鳥といふはほう白の類なるへし燕一兩日已來みゆる也いまた船のかよひなし外の國より來にあらさることよくわかる也

○十五日　晴　あさ上下著たる計月次之禮もなしけふはわけてのとか成ひる前迄前の山ゐ海より霞かゝりてみねより麓のかた半あらはれたるけ

しき遠沖の船もみへすなりたるなといふへくもあらす次第に甚敷なりてあるひは晴あるひはくもりたるかことくなること二百間前後までおほつかなくなる樣霧かとおもへは霧ならす霞のかく也はしらぬこと故白くれといふものゝ海にあるといふに夫かと船かたのものにきかせし矢張霞の深く立にゐこゝには三月の氣候になると長閑なる日にあることのよし也佐渡にてはこれを花くもりといふと江戸のはなくもりとは大に異也きりともやとをかねたるもの也日うけ候て薄紅の如くなる所もある也成程霞なるへしもしほのけふり霞と末はひとしく成なと少もそらことにはあらさる也

○十六日　はれ　きのふは晝後より前の山へ人の往來珍ら敷たへすみゆるねはむの日は常に三味線なと携山にて遊ふことのよしされ共此程のこと故つゝしみはつかに老人等の佛に詣る迄のよし也けふ二月九日ゑ御用狀來る鐵作より書狀來る市川よりも相屆　母上よりゑ御用狀も來る　三御親樣御別條無之とゑ御事恐悦ゑ至也　鍬五郎より文章か詩作か日記か此ほとは武藝其外共あるましけれは可參とまち居る處近頃曾ゐ不來如何に候哉病氣歟又はをこたりの病歟いつれにも心懸に候此次ゑ便によく承り度候先達ゐ幽靈に出逢たると申候喜左衞門ゐましなひの書取寄候ゐ差出す醫方指南大成と申候書也其内魘寢ノ條ニ夜臥禁魘ニ凡臥トキ鞋ヲ以テ一ツヲハ仰ケ一ツヲハ覆ルトキハ魘及ヒ惡夢ナシ（起居雜記）ト記シアリ

○十七日　雨暖氣　此ほとの海をみるに冬のあれたりしはまことゝはおもはれぬほと靜也汐の心はかくなるへきを風の動かすによるものなるへし人もよく風に動かされさらむには心靜なるへし

○十八日　雨　ひる頃山より海へかけはつか成隔の梢もみへぬまてに雲おほひけるかしはしに遠山みゆる程になりて北風に吹かえさむし

○十九日　雨風おり〳〵あられふるさむし　こゝには二月の九日には山の神のいくさする日也とてさまてのことなけれはまつは山へ行かぬ樣に

此話海士町之塗師幸治およひ須田與兵衞之直話也といふ廿一日に與兵衞か悴太郎某か前へ出候節聞しに船のみよしに射つけてありしなり子供の時ひろい得て追ゐ一郎次に遣したる時は筵はなしといふ神軍のある所は鹿伏村の字ひらき山といふ所にゐ九日之前七日に行てみれは平か成石のうへに削くついくらもあるといふ

する也十日より所々に矢の根石のある也矢の根石は奥羽蝦夷濃州のかゝみの野なとよりも出るときく眞の山の神のいくさにもとより用へくもあらす又あるへき様もなしされ共九日には奇なることもありて相川下戸炭屋町幸次郎鹿伏村のひらき山へ行て左の股へ矢のあたりて大に煩ひ地役人須田與兵衞はあるとし十一二日の頃山の木の枝によしをのにして矢のたち居たるを枝ともにとりて箱に納置しか組頭添田一郎次か望にまかせて遣したりなといへり受かたき事也尤矢の根のけつり屑といふもの山の平らか成石の上にはあるよし也某もいくらもみしにかふら矢のかたちかりまた征矢なとに類せしも銀山の石赤玉の石又は見馴ぬ石にて造りたる或は半つくりたるなとある也肅愼民より周へ貢せしといふも此類なるへし韃夷に近き國故なるへし各務野より出しは坪内左京か知行の百姓持居しを家來重助はもらひ持居る也北狄に近き國ならてとおもひしに美濃よりも出るといへは所々にもあるなるへきかいろ〳〵に尋もとめるに地役人の某か顔にあたり疵あるなといふ程のたしかなることなしよくもとまて聞けは申つたへ也といふ也園三郎か奇を稱すると同事にゐ矢の根はあれと其奇はなきことゝなるへし

○廿日　晴　この頃はめしの外はにはなものまぬことになれて更に何もくひたくとおもひしことなししかるに臺所のかたにて中間のよし魚類燒匂ひのものほしき頃しもけふきゝしにこゝろ動たりこはけしからすとおもひし也某等か身はあさましき事也

○廿一日　晴　又暖氣に成このほとはます〳〵丈夫にゐ腹のこり及ひほその上にありたりしこふのことくきものは更になくなりて只々日々腹のへるにのみこまる也小なる茶碗故五椀と定置候得共三度なからよほと飢たるかことしされ共朔望なとのしるも菜もくひたる日は十分也

○廿二日　晴　此國にて一二を爭ふ醫の物語に江戸の多喜の奇應丸は神のことし某か子か癇にて今や〳〵といふ様になりたるに此國の醫うちよ

りたれと可施術もなし人のかの奇應丸くれて用ひしに効ありて治したり
とてことの外喜ひたる樣也醫のかたるもいかゝあるへき是にゐも失し庄
助かこと不運なることあはれに思ふ也

○廿三日　晴　十四日出ゑ御用狀來る御菓子被下之相屆申候庄助ゑ義御
回向被下候次第難有奉存候　今便り村田より歌數多參り申候老人健と相
見艶成歌おかしき事なと申參候八十に近き人ゑ氣分驚入候

○廿四日　晴暖氣也六十五度に至る廿日は御出棺と承りてかしこくも手
のもの失ひたるかことくおもひ奉る也嘸哉奥つとめの面々此ほとはいか
ならむなとおもひつゝけ候

○廿五日　晴　天氣ことによし暖氣六十九度迄に至る

○廿六日　晴　天氣ことによし暖氣也兩三日已來日々東南風也俄に梅も
開なるへしけさみれは早きかたはつほみのしろく成たり一兩日には必さ
くもあるへし此草花はいかなるものそときくに名はしらぬよしなれと庭
のたむほ福壽草のうちに江戸の蓮華草といふものゝ如し多さきたる所は
まさこちの雪のはつかにふりたるかことくみゆる也

見なれつる雪かとはかりしら〳〵し花めつらしき庭のはるくさ

雁のこゝろもしれとこし路よりはるを都へおくる此花

よう〳〵に梅もかくなり候今日はしめて火鉢を止申候

いまた銀山へ行みちには少しつゝ雪ありとこゝよりみゆるはしめにふり
しみねはまた雪よほとのこり居る也此ほとは冬よりの汐風にて濱のかた
によりたる風あてつよき所はいつれも松の葉こと〳〵くにかれたり黄菊
飄零滿地金の語のことく風土によりたるものとみゆる也こゝも冬の汐か
せ強からぬ南受の所はかくはあらし既に庭木のまつは風あて強からぬ故
にみとり也松の常盤ならて葉をかへることなとは珍敷こと也されは菊の
花のちるといふ詩話をもおもひあたりし也

○廿七日　くもりおり〳〵はる雨暖氣七十度に至るさくらも大いに春め

きたりけさは一二りむ梅ひらきしか夕かたはよほと開たり庭にて家來かつみつるよめなつくしなの珍らしくおほへて味あり江戸のつみくさはかくは味のなかりしか此ほと何もくはぬ故なるへしなといひてわらひし夕かた被下候煮まめ給候其かはり汁はまつ休申候先年當松平肥前守話に同人七年ゟ間一菜にて汁あれは菜なしと極置たりといひき大諸侯の常時にかくの如きもありきましてこのほとをや

○廿八日　くもり夜雨　梅こと〳〵く開く所々のさくら開よし梅はけふ風吹けれはちるもありと陣屋は高み故寒氣も常に強きときく春遲きとみへたり　けふは三ン日なれはあさもしるひるは豆腐のひらあり菜珍らしくうまきことに覺たりいにしへの人は親の喪に三年のうちは美きものもうまからすときく日本に追腹を切たる臣も夥ある也さるにわつか三十日計なにもくはぬとて菜をうまくおもふはあるましき恐入たることゝおもひぬ精進の豆腐もめつらしけれはうまき也常にたへす食好みなとするものはなれてこれもかれもといひて終に珍敷ものくらひて歡くことくにはなる也果もなきに至りてはをろか成こと也けふ心附たり

○廿九日　はるさめ也　もや至ゟふかし來る六日出立にて國中巡村ゟ旨觸書出す

○三月朔日　曇　さへかえりさむしけふ庭のくさとりて家來共のよりて園子つくりたりとて某にも物せよといふ給みるに味あり數二十もらひたり珍敷こと也

○二日　雨　此ほと廣惠倉といふ所へ籾を運也いつれも女共也十町計ある所を五斗俵壹俵にて八文宛ゟ賃錢也肴賣のことに付書面をみしに十人に七八人は女也青もの商人も是又おなし江戸のうら店ものゝ夫を遣ひてかみゆひにかみゆはするなとけしからすおもふ也

○三日　晴さむし四十六度に成　けふはのしめは着せしか禮もなし用達

より常は魚類くるゝなれと此節故なるへし竹の子にまことの艾葉いれて
つきしもちなとくれたりさくらの葉を一葉つゝもちに附たるしんこあり
よくみるにさくらにならひてしきみかかしわの葉のことものを附たる
也頃日在出ゟもの歸りて申せしは園十郎かしはらくの畫を表具して正月
みき備たる所あり珍ら敷ときゝしにゑほうし着たる人にて太刀はきたる
樣いさましよつて何かはしらす正月の懸物にせしといひしよし右等いつ
れも伊勢の御師を生る神のことくいひて夫か湯あみせしあとのあか浮た
る湯をのむといふに近きまた開けぬところあるなるへし

○四日　晴　庭のさくら少々開申候

○五日　雨　明日は巡村ゟ出立ゟ積ゟ處是にゐ如何哉とこゝろいられ也
さくらけさは半ほと開たるに例の風もありぬこゝろにくき事也　ひる後
も雨不止延引ゟ義觸させ候この度は鳴物御停止なれは船うたなしされ共
船手より差出候間一ッ二ッ左に記す

我戀は春日の山のはつれ雪とけてこゝろのうれしさよ末は目出度のヤ
レみなともに白髮はゆるまて
磯邊通れは千鳥かたつたつな千とりよ寄せてこゝろのみたるゝにおも
ふまいもの身によにこゝろのある人を
みねの小松にひなつるすめは谷のいはほに龜遊ふ

○五日（六カ）　くもり折々雨　けふも又あすの出立はかりかね候いまたさたま
り不申候巡村は海上をきしにそひ候ゐ船にて廻り候處多候間御船手ゟも
の天氣申出次第にゐはあすは巡村に出可申候當月の廿日頃に歸り候積に
候御中陰中故つねの巡村より都ゐ物こと靜に爲致候尤村方ゟ難義をいと
ひ候故已前よりは人數も大に減し用人は茂兵衞給人は淳介近習中小性は
時太郎鐵藏粂藏貞助にゐ人馬ゟ觸出しを省候間例は給人以下ゟものも乘
候積りにゐ駕籠をつらせ候得共夫をも省長刀をも爲持不申候尤御中陰中
故某は精進に付都ゐ當日ゟ料理向精進也途中に出候ゐは某計ゟ積也こゝ

のくせにゐ巡村ゑ時は酒なと出しさて料理向よからぬ村ゐ參り候ゐは中間幷佐州にゐ雇ゑものいたつらいたし候由承り候間右ゑ制禁を嚴敷いたし一汁一菜ゑ外曾ゐ不相成ひるは辨當にゐ某は燒飯計其外は有合ゑ菜至ゐ手輕にいたし候積尤ひる休ゑ時麁茶幷さゆの外決ゐ出すへからすと取極其ことおよひ若哉間違不行屆ゑ義はゆるし可申候間村入用をかけす疊かへ雪隱ゑ建直等都ゐもうけ事少もあるへからすと兼ゐ觸出しゑ外目付役ゑもの外用にゐ廻村ゑ度に嚴敷觸させたり土地ゑものは奉行ゑ先にゐ遊山に參り候積にゐ常に日ようのものなと大勢云々ゑあるよしの處右ゑ勢ひに恐れけむあまりいひ込ゑものなし用達方ゐ日傭のもの中には度々參り如何ゑ聞へなとあるものは彼方より却ゐ斷申いれ候ゐ參らさる位にて扨酒をのみ候事嚴敷きらいといふことは相川のものもしりて上戸のものは參りもせすやとひもいたし不申と用達のはなし也右は勿論供方等ゑ義も先例等しらへの上にゐ文化のはしめ金澤か廻村ゑ例によりたる也在

勤場はとかく御在勤樣ゑ思召次第と云樣なる仕向にゐおもひ〳〵なる故このたひは一寸しらす並書院へ出るも目付に聞例によりて例なきことはせぬことゝ取極候處巡村に料理人ゑ心得或は醫師迄つれたるもありこはけしからすとかの先例追々承り候處簡易ゑ例ゑ段々と長したるかに付近例ゑ內簡易なる例に隨ひし也都ゐ金銀山其外ゑことにゐもこの在勤に新規の工風等少もせす只先例によりたる也され共二百年來の人々定置れたる良法共多ありて中々守りきられぬ也　此ほと魚漁多し當年も國地はゆたかなるへしすけとう。こうなこ（是はこやしに成）にゐ大に利を得ること也壹尺二三寸のます（さけたる魚に似）六十四文位也　一兩日已來は庭の咏ことによしさくら四本つはき壹本桃梅李みなさかりにて芝地にはるくさの花たんほゝすみれなとこと〳〵くに咲たり此咏に此山水あり江戸ならは築山にゐ田かく燒ことあるへしといひき在勤先は食物をいたく身に禁し候事いたさねは夕も朝も其ことにかゝりをりたくなる也某それを深く恐れて飯の外先

つは食せぬことにせしかとそれにてもその何もなき飯を待かことき
のこゝろある也小人之間居して不善をなすといふことわか今の身とこゝろに
引くらへては日々に小人たることをはつること也ひまの時おもふことを
段々としらへみるによきことは少くいつれも妄念雑慮といふものにゐも
とは欲より出る悪多くありて深恥おもふ也

○七日　けふ巡村として立出ける積之處きのふよりくもりてけふはいか
ゝあらむとてとり〳〵のこと故御船手のものゝいふを聞にあすは六日よりけふを云也
けふよりはよろしかるへしされ共風のことはいかゝあるへき必とは
いふへからされと雨はあるへからすと巡村は相川より北の方に向行に海
濱千仞の岩ほのうへをからく傳ふこともあれは危けれとも風あらむには
船よりはよかるへしとて彌天氣あしからはもゝ引牢てんにゐ出る積にゐ
みのかさなと用意したり是は少々事なれは巡村せぬと村々のものこと日くゝる頃尚御船手
のものよりあすの天氣よしといひしかは彌其積之處曉より雨頻にふり出

此こと笠取嶺類風波にのの雪あ風ひ且又等なと出立故事好みあらさる也
行らすとは途中雨は微はきをは奇なをに

しいかなる事かさしての風もあらぬに六半時頃より海上例の大浪になり
て白雪の天にさかのほるか如くなるけしきになりて沖のかたはしめ静也
ける故あまた漕出ける漁舟こと〳〵に逃かえるさま也其上にみる〳〵か
のかさとり峠のかたは雪ふり出てなか〳〵御船を海へおろすへくもあら
す某は陸行とも雨三日の間は海上船行へからすとて御船手のものより天
氣見損し恐入たるよしいひ出たりされとも天氣見損するは船かたの常な
らぬことの常なれはとかむへき様もあらねは其こといひて延引觸を出せ
り嘉十郎銀山に行歸りていふは途中雪みそれふり至ゐこゝへたりと四十
七度迄に成たりさくらのさかりに雪のふるなと北地の故なるへし

みねの雪浪のしら雪花の雪彌生のこしの咏也けり
泡雪のふるにならふなさくら花あきなかりける浪もありぬを
同しなの咏の雪も白浪も花の梢の香はなかりけり
けふ水野正太夫いふなまの椎茸決ゐくらふへからすこの巡村に其こと家

來へ申付候へとしひ茸は毒のなきものと聞はなまはわけて某の好む也いかにといひしに正太夫か知る人甲州にゐ撿見に行生椎茸を給へ御代官の手附手代おなしまくらに病ふしたりそれかなかに中間壹人惣身むらさき色にかはりて死せり恐るへきこと也といひき早速に其こと家來ゐ云きかせ某も已來旅行中なと構へて食へからすと定たり佐渡に椎茸あり椎の木よりのみとるとおもひしに栗くの木なとの類よりもとるよし也いつれも鬱蒸して生する樣にすることのよしされはは つ茸なとより毒あるへき也陰氣鬱蒸して生するもの故其氣の變する所に奇毒あることなしといふへからす久須美の話にも岩崎彦右衞門は椎の毒にあたりて卽死せしをみてほしたる椎茸を食さりけるとなむわか宅のものもこゝろすへきこと也椎茸毒あること初ゐ聞し故にのちのためこゝにしるす正太夫は煤の入たるをくらひたるよしいひしかふくにも煤をいむよしいへとさにあらす一種の毒あるふくある也されは椎茸もすゝにはあらて一種の氣の變する所よりまれに大毒を生するなるへし可恐こと也

○八日　晴　彌天氣と定けれは明日は風なからむには晴雨共廻村として罷出候旨を相觸候

○九日　晴　天氣殊によろし風もなし曉より髪とりあけしのゝめ過に朝餉して相川の御役宅を出る（御門内に廣間役共數人暇乞として罷出）夫より帶刀坂といふを下り濁川通を大間町ゐ參り海岸ゐ出る（此町之入口に廣間役鑓挾箱にゐ壹人暇乞として罷出居夫か半町計隔りて山方役其外役々之もの數十人醫師神主御別當等迄町家之軒端に扣居候ゐ暇乞いたす）海岸に小はや御舟と申候海船（此船上之間と次之間之隔幕にいたし有之上之間は八疊計其次は八九疊もあるへし其外勝手あり）繫有之（船印等建船こゝにゐ仕立有之候）乘船也此邊例之通見物夥し千を以數るなるへしこゝより半みち計のり出して常にいさゝか浪立時も見へかくれする岩共をみるにいつれも築山ほとの大さにて驚かれけり貝を吹候得は漁舟數艘にゐ船を牽也夫か海岸廿町計の所にそひて漕行也海防のある所うら〳〵の番所にゐ小のほり目印たてあり達者姫津北狄戸地炭町戸中村を經て南片邊村にて上陸（以上四里半餘海上は三り半程）同村水上坊にゐ晝餉給申

候けふは供立は鑓貳本徒三人士四八用人給人等也目付役磯野新平地方懸頭取水品孫十郎野袴にゐ先立いたす戸中村にゐは石鐘乳のある岩屋有之候ゐ上陸岩山の直立貳百間も其餘もあるへきみとり成岩ほの裾に穴四五十間もあり其内くらくて何もみえす兼ゐ差越置たりとみへて銀山大工奥より出て鐘乳をうちかきたるを籠にいれていたす珍敷といふ迄にてみるへきものにもあらす戸中と片邊ゟ間に四十二曲する須坂なと聞へたる難所ありと地ゟものはいふ也則家來共ゟ内陸より廻しみせしめしに左ほとのことにはあらす木曾の山へ行たる心にては平坦ゟ芝地を行かことくおもひしといひき左もあるへし途中ゟ人物夷狄の風今も存せる如し男女更に見わけかたし數百人うちよりわか行をおかみ居るうちとよめき笑ふ聲ゟなかには女のこへかともおもふもあり此末みなかくの如くなるへし海邊はことく奇石怪巖つらなりていふへくもあらすひる前三里計のうちの岩も圖に出名あるものを數えみしに八十餘あり夫にゐ海岸の嶮岨おもふへし

其外咏ある瀧いくらもあり磯山のかひなとにさくら咲みたれたるなといふへくもあらす四十二曲の邊に山莊太夫か舊跡ありきさたかなることはしらす右ゟ南かた邊村より北片邊村石花村後見村河内村立島村入川村千本村高下村田野浦村を經北野見村にいたりて止宿こゝにて浦目付役等ゟ目見あり茅屋の門長屋あるあやしの村役人の宅也され共床に花あり備後表のたゝみ欄間のくみ物等はありき御治世の御澤なるへしされとも軒端の化粧たるきに事たらて船板の腐たるなと用ひあり其外のさまひなふり又驚こと多し小便なき雪隱也御湯の御かんはいかゝなと いふ風呂の蓋二百年來のものとはみへす

ひまあらき笘屋もはるはたのみあり更にかよへる軒の花の香

このさともゝ戀はあるらし蜑小船いかにうきねの夢結ふらむ

けふひるの辨當は例ゟ燒飯故別に論なし夜食は村にての料理也兼ゐ某は精進とふれたれはひらは芋人參あふら揚しるは椎茸也いつれも好ものなれと甚味なしよつておもふ佐州の地役人に必人ありて一國を治るには事

足へし然るを某か料理鹽梅のよからぬよりうまくいかぬ也をなし芋椎茸にも煮方料理かたにて人の賞することもある也されは味あると味なきとはみな料理人の科そかし相構へて以後慎みて佐渡に人少きよ人氣のあしきよとのことといふへからすとおもひ定たりわか此頃食するにたへぬことあれは麁食の稽古として衣類より厠なとに至るまて得たへぬことあれは卽座に夫に堪忍の稽古と定たれは湯殿にゐも厠にゐも何にゐも少も心くるしきことなし　以前は用達のものを供につるゝこと也さすれはそれか休泊の先へ行て何くれと食物迄の世話する事也されは共其ものゝ供山駕籠なと迄自然百姓のあふらとは成也とおもひ三十年の昔はなき例なれは旁以つれぬ也おもふに以前かの用達か内實仕出しといふものにして利を得しもしるへからさる也

○十日　風雨夕かたより雨止　五時前に北野見村立出石名村小田村大倉村矢柄村五十浦村岩谷口村眞更川村鵜島村願村鷲崎村にいたる岩谷村迄北野見村ゟ五十町みち三里半にゐ晝飯岩谷口村ゟ鷲崎村迄三里にゐ止宿也以上六里半なれ共殊に嶮難之所故十里にも其餘にも向ひぬけふは海上風雨にゐ船行難成に付俄みちを變候ゐ參り候處駕等に乘候ところ無之半みち程駕にゐ其餘は悉歩行なる所ひる頃ゟ風雨殊に甚敷さて又道はまことの樵路故其嶮岨にして危難成こといふへくもあらす落葉膝を沒するか如き所もあり新にみちを直したるに剛雨之上を珍敷數十人之歩行にゐ踏ちらし候故田のことき所もあり平坦之所稀にあれは砂と石とにて眞に歩行にかくまて辛き所いまた聞かす日暮頃鷲崎へ行たりしに上下の勞殊に甚し山水之奇絶は遙に昨日にまさりたり濱邊之岩ほ又是に准すさくらの盛なる所玉椿の數十本さかり成峰等咏もありけれといくたひか倒れむとして其危さいふへくもあらす且大に勞れたれは歌も咏さりけり其岩ほの奇なるといふは仙家の牧羊のことく四五尺六七尺の眞黑にゐ獸のうつくまりたるかことき岩數百二三町もつゝき續きたるあり矢柄　又帝釋天の戰にう

ちたりしつふてもいふへき（と脱カ）大岩打ちらしたるか如き所もあり常蓮坊濱に
は眞黑の碁石ゑ如きものあり（眞さら）こゝには岩の上に人參に似たるくさ生
す　こゝにも笠取峠といふあり（岩谷口村）のほりくたり五十町みち壹里半也南
は山北は海なるに實に山削るかことくにゑ千仞のみねの半へ細みちを附
たるにて其下は大海也よつて絶頂へ登るとき風烈敷こと甚しけふは此峰
にかゝると大雨如傾大風にゑ雲深く四五間の外は少もみへぬ也既に絶て
うにゑ某かかふりたるは晴天に可用一文字の菅笠故微塵にもみつふされ
たりよつて用意の雪帽子をかふり辛く雨を凌きたれとみねを下りたる頃
は羽織も半天もぬれぬものとてはなくなりたりよほと可恐體なりき又大
くら村のはしりといふ所は所謂親しらす子しらすといふにて波の間には
しる故にはしりといふ也絶壁のきわ迄波うちよせる其内を行也扨其はし
り二町計を經て岩ほにのほるに岩ほを二尺はかりにみちを附てそこを傳
ひ行也某か行うちは人足數十人出てもしや踏外したらむには途中にゑ救

ふ心なるへしみちより下壹間計の所に岩ほに壹人宛ならひて虫の梢に這
附たるかことくなし居る也されは共下は海にゑ岩石數十丈なれはなか〳〵
ふみ外したらむには可防樣なし幸にこゝは微雨にて凌よかりし也其外は
しかけ（矢柄）なといひて棧道の尤危き所其類けふは奇絶の難所いくらもあり
五十浦と岩谷口村の間のみねのおりくちより木の葉石出る（いくらも拾ひ得たり）願村
にさいの河原といふあり（こゝは石いくらも積あり人ありてこと〳〵くといへ共一夕にして如元成といふ）小田村重
泉寺に空海の梵字水有今に水に浮といふ無覺束某か目にはみへぬ也　大
倉村に梶原平三と今にもいひて景時の子孫也といふ百姓あり豪家也景時
の刀を奉行へみする事也太刀拵也二百年前のものには相違なしよき士の
さしたるものとみゆる古色至ゑ可愛もの也武州下原の康重か銘あれは永
正以後ゑものなるへし天正頃いつれにも戰國のものとはみゆる也
○十一日　晴　けふのみちは人足共からみにて參るもよう〳〵との義に
付如何哉と相談中御船の帆影みへ候由注進有之候間夫々兼ゑしたくいた

し置候ゟ無間も御船手參り候間出立いたし候積之處二月廿六日三月三日之御用狀其外御奉書共參り候間先出立差延候ゟ御奉書拜見候處さしたる事も無之候依之直に出立見立村小浦村（此所にゟ兼ゟは辨當之積に候得共出立九過に成故上陸いたし候計也）虫崎村黒姫村歌見村浦川村平松村松ケ崎村馬首村和木村坊ケ崎村玉川村北松村を經白瀨村に至り止宿きのふよりけふの村々佐州中之山中にゟけふの邊は磯山に雪ありて高き山は冬のまゝの咏ひきゝ山は雪村きへて佐州はさくら多き地とみへ磯山花殊に多し自然のさくら六七本も又は十本も其餘もまつ其外之木々の間に又雪の村きへたるかことくにさけりけり雪かくもかといふこと僞ならぬ也大屋形のことくなる御船にゟ漁舟數そうに靜なる大海を引かせなから磯山の花をみるなと此一事計をいひたらむにはよきなくさみなるへし

さく花と咏あらそふ越路なる今こむ夏のみねのしら雪

三月十七日は立夏なりといふ故かくは咏せし也

村きへし雪間のこしの山さくらいつれをわけてそれと定めむ

きのふ途中のことを

雨はふるとまりは遠き旅なるもしはし忘るゝみちの邊の花

いくさとゝきくに袖こそぬれまさる雨しのき行旅のころも手

汐風に吹破られてあたならぬ名をそしりけり笠とりの山

行なやむをのかこゝろも大くらのはしりのみちの岩の山ふみ

白瀨村にて所々よりの狀ともみて

よきことをしらせのさとにたひねしてうれしくもみるふるさとの文

三月二日附　養御二かた樣ゟ之御書難有候御菓子被下候明日船中にゟ下役共ゟも遣し候半と別ゟ難有候　實母御方より之御文北條にゟおこと安產之由何そ祝ひ被遣可被下候　口にあひ候もの給候と之御事難有候此ほとは巡村故自然と朝夕は一汁一菜に相成候尤ひるは辨當に梅干二ツに燒飯と定申候夫をこりへいれ候ゟ爲持候尤家來の辨當は菜の物

上あらめゝし
中いごめし
下めかつめし
右方言也

をも爲持候これほとにいたし漸と酒又は錢なと内々中間にねたらせぬ
様にいたし候義出來候村々にゟ入用大に減たりと〻義喜ひ候ゟ内々家
來ゟ申出候給物悪しくいたせは仇なとせし下さまのものもむかしはあ
りしよし也きのふの泊りにゟ内々村方のものゝ朝夕の給物上中下と出
させみしに上と申候はあらめと草の根と二分に米壹分程を加へたる也
中と申は名もしられぬもくさ共に少々米ませたる也下と申はそはから
とひへの粉のうちへよくみれはまことに名はかりほと米を交たる也は
なしの種とおもひ豆ほと給みしにもくさ加へしはのむとを下りしかひ
の方は舌の上にのせたるまゝ少ものむとにくたらすかゝるもの給候百
姓の割合にゟ食このみ出來可申哉これをみても憐とおもはさるは人間
とはいふへからさる也御家人等著もし給もするものはみなかゝるもの
ゝよりあつめたるあふら絞りて御年貢となせし也しかるを一文たりと
もむたに遣ひよき衣類よき食物にこゝろひかれて何くれと夫而已にか
ゝり居るは　上の御恩もしらす百姓の歎をもしらぬと申もの也鍬五郎
なとわかきもの故よく御了簡候へ　大御所樣　御葬送の御時　御棺荷
ふもの共其身と或かね出して荷候樣大勢ありしよし
國家二百年〻　御仁惠　大御所樣の　御仁德難有ことゝ頻に落涙仕候
其上やさしき町人共〻心やと彼等に引競候はゝ某等はいかゝいたし可
申哉と及はぬことゝ恐入候　大御所樣の御事はかしこみにて歌も出不
申候三月二日附〻御文白玉被下難有候この度の宅にさくら有之候由來
はるはなかめ可申と樂しみに御座候
こむ春はこゝろして咲さくら花とし隔みるあるしなりぬに
老僕五助二月廿二日病死〻由あはれなること也かれか忠義しるして石碑
立遣し度候おさとか歌殊にとゝのひたるかことく聞へ感吟候　新右衞門
より毎度なから細書縷々忝候其内櫻井生のこと大悅候都筑へよろしく賴
入候　幸三郎々書狀忝候わさひ忝當國めつらしきもの故一本宛玉のこと

くいたし人々に遣し候

○十二日　晴　五時白瀬出立駕にゐ北五十里村椿村迄參りこゝより下乘吉住村を經羽黒村へ參り羽黒山正光寺に參詣常に候得はこゝにてかゝり湯いたし　御宮に拜禮いたす事なれとも此程柄に付拜禮いたし不申正光寺は古跡の大地にゐ住持上野へ二十年餘參り居たりと久々にゐひなふりなき出家をみたり一體上野に出家にとり廻しは諸宗にすくれたる故別ゐ別段におもふ也こゝにて蕎麥酒もちを出すよし兼ゐ觸故なるへししんこもちを出せり白雪のことくなるしんこにまさきの葉を附たるもの也味至ゐよろし此邊いまた甚寒の體也方丈の庭に殘雪三尺餘もあり杉の木立見事也こゝは五月雨山といふまことか

年を經て積りし越の湖は五月雨山の森の零か

と爲兼か咏せられし名所也とそこゝより梅津村を經夷町に至り小休夫ゐこゝにて畫かれい給候ゐ同所の御藏御番所見廻り湖水を船にて巡覽きしのさくらなとよき咏也常にはこゝにて網引かせ獵師にかもなととらせてみるよし鐵砲はさら也網をも引かせす湖水に中央迄乘出せしまゝにて引かへりし也夷町は東南にうみ湖水あり北に金北山あり咏よきのみならす地理ことによろしこゝの本間といふ某か宿せし本陣は則佐州に國主本間か末にて今以豪家也夷町湊町にゐ高百石計にゐ人別三千にあまれり廻船等に入津もなくてかくの如しゆたか成ことおもふへき也こゝにてかりかねを聞しかは佐渡へ來り初ゐのこと故

めつらしくこしに聞也あまつ鴈早都よりかへりきぬらむ

なと口すさみたり折節こゝの定番役（昔は夷の町奉行といひし也）佐々木紋左衞門參りしかは鴈の珍敷ことといひしにこゝには鴈かも共に多しかもは夷邊に春夏共に居る鴈も下中興村には夏もをるといふ

汐のほる越の湖近けれは蛤も又ゆられ來にけり

右に外可記義も有之候得共唯今呈書差立候幸便故今便は文略候

○十二日　御用狀差立候後本陣は本間ゑ一類と承る古武具等あらは一覽いたし度旨申候處燒失にゐ何もなしとて大身の鎧貳本爲見候銘は朽たり戰國のものに無紛見ゆる鞘の古色可愛關ゑ兼常の刀爲見候正眞無紛ものゝ打に大成しないあり近頃つかませられたるものとみゆ田舍の豪家縉紳家の衰たる時よく賣に出るもの也さて又正中建武より應永頃までの古文書出し爲見候にいつれも眞物疑へくもあらぬものにゐ手跡等又別段也其内興國元年と南朝ゑ年號を用候もの有之貞治五年と北朝ゑ年號なるもありおもしろし五六通は本間某又は佐渡國云々等ゑ義有之別ゐたしか成ものと相見此家ゑ舊家の證たるへきもの也をり節廣間役露木兵助來けれは其ことといひてこの頃の梶原平三か宅の下原ものゝ太刀とは大にこと變りたるよしいひしに本間か舊家なるよしは夷町にゐもいひ傳へたり且こゝは佐渡のうちにても舊家又はもの持多く百石にたらぬ村にゐ二十二史涑水通鑑綱目通鑑其外書物等多持たるものありかの平三か梶原の末也と云ひしは近き事にゐ廣間役永井四郎兵衛か祖父（當四郎兵衛六十餘也實曆前後の頃なるへし）四郎兵衛か頃の平三か名は何といひしや忘れたり顏はせ甚畫ける景時に似たりよつて土地ゑもの梶原と異名しいつかなへて梶原といひしをよきことにおもひて近頃苗字御免に成し頃より梶原平三と名乘持傳の太刀をも平三か物也といふに至るよし（ある人を志賀團七と異名しかけにては團七々々といひしをその下にたつものゝまことに志賀團七といふ名也とおもひて夫のことは團七の主の聞濟玉ひしなと書記して出しけるをその人みて大にいかりたりといふことと以前きゝて其人をみしに其人をみて其名を信したりしことありき夫とはこと相類して是は實事になりたる也其人はとしへて名をわすれたり）可笑こと也世にあまりに驕奢に長し終に他人の先祖を己か先祖のことくいひ段々に甚敷成てまことしやかにするものゝあらさると計もいひかたし若哉あらむには己か親はうへこゝへて路頭に迷ふをも捨て人の親に朝夕の手向なすに至る也愚とやいふへき不孝とやいふへきはしめは一時の僞より起りて二代三代の子孫は實事とおもふ也是みな父祖の毒の子孫に流れし也

（此所にゐ夜按摩の笛を聞髮ゆひ床なとあり昨年來初ゐ見聞せし也）

五月雨山にゐ

はるゝ日も麓のみちの露ふかみ五月雨山のなそしられける

鴈を聞て

かへるさのうれしくもあるか聲立て行かりかねのめつらしき哉

故さとに鳴音もねたし歸るかりわれもこそより旅ねしつるに

湖にて

いろくつも迷ひやすらむわたつみとしら波かよふこしの湖

○十三日　雨　夷より湊町に至る勝廣寺は東門の末にゐ什物多あり東門の自書等は眞物其外疑敷もの至ゐ多し同所日蓮宗妙法寺は什物日蓮歸島ゑ節木きれにて被書とて木筆ゑ題目といふものをみする眞物とみゆるこゝにては十枚板刻せしを差出事也夫ゐ原黑村住吉村を經眞言宗久知河内村長安寺に至る古文書多し夫ゐ河崎村にゐひる休いたす此邊鹽濱あり則濱邊にまち居て汐くみたれてみする也きのふけふの所はうちうみ也同村より船にて三分一村椎泊村西尾村羽丹カ及生村大川村を經て水澤村に至るこゝは新潟ゐゑ渡海十里計に付廻船かゝる也出羽等ゑ山迄もみゆるよしなれとも雨故みへすこゝより外海になる水澤村至ゐゑ貧村也けふの海邊花あり瀧あり奇岩等多きこと前にかはらす

勝廣寺ゑ什物親鸞かゝ書に歸命盡無碍商無阿彌陀佛とあり覺たりしと理をたきわめ命たつくしなつて凝滯なからぬとのこるとかもしるとへからさる也

磯山の花もこゝろにかゝる也晴いのる身はくもと咏て

○十四日　くもり八過ゐ雨に成　五時に水澤を出て片野尾村月布施村野浦村强清水村にいたるこゝにゐ晝休いつれも谷間の磯邊に漁家少々宛也貧村也强清水ゑ休は名主の宅にゐ庭も坐敷も相應也夫ゐ東立島村蛇村赤玉村こゝは江戸にて所賞ゑ赤玉石出る村かた也立間村尾戸村小浦村柿野浦村東□島村岩首村松ケ崎村にいたりて止宿けふは水澤よりこゝまて門前より船に乘かことき所也松ケ崎は貳丁計歩行せり咏きのふの如し麥畑のうちに桃數十本盛にて蓮花草の芝間に置たるか如き所ありき强清水より松ケ崎ゐは海上三里餘也順風故はつか半時にも及はすして行たり夫故歟松ケ崎にては少々浪あらし二三間の築山ゑ上を船行かことし地方役水野孫十郎か父四十年程已前に水澤の御番所役

たりし時同所ゑ辨天岩に年々盲人のよりて勤行のことあり風島の辨天といふ四五十間もあるへきか松茂りてよき岩也海上にあり其時隣村大川村ゑ盲人あやまちて海中におち入行衛しられさりしか強清水ゑ辨天崎是も岩にて少社ゆ水澤ゑ二里也みの岩ゑ上に三日ゑ後にあかり居たるを人尋出したるか過ちにゐ海中へおちけるよとおもひし後はしらすといひしよし也此邊數丈の水にゐ崖殊に高き岩岸なれは人ののほるへき所にはあらさる也不思義なること也　水澤村に九十五歳に成一人扶持宛被下候農夫あり目見に出る歸るさを船中よりみるに下駄をはき杖をつきたるを悴なるへし六十計の男殊によく介抱して行さま殊勝にみへし也　松ケ崎は高三百石の村なれ共人別八百人餘ありて富める村也春日社銅瓦にゐ石の鳥居にからかねの額をかけたり民潤ほはては村持の小社をかくはせしよき村也こゝには昔日蓮流罪の時はしめてこゝに上り槻ゑうろゑ内に三日三夜勤行ありしといふ其槻今にあり古木はかれてわか木あり古木は村内ゑ本行寺ゑ寶藏ゑ内に納ある也其由來にゐ文永八年開基にゐ本行寺と云寺あり則巡見所也村ゆた

か成故てらもよろし日蓮自筆の題目其外品々あり信心のものにみせたらむにはみな落涙の品なるへし其内に池上本門寺ゑきわめ札ある日蓮の消息といふものあり三通ゑ内□といふ字の書出にゐ中字の草書あり走り書美事にゐ龍蛇の勢ひある筆跡也某讀まむとせしかよめす住職に聞に昔よりよみたるものなしといふ其内紺地金泥にゐ辨慶ゑ法華經あり古物無疑一行三禮とあり末に辨慶の名のある所勇氣紙中に充滿せしや名の所のみ紺地色變居たり不思義也右某かよめさりし消息といふものを家來に爲拜しに淳介みて是は千字文のふるき手本のきれ也といふいかに淳介昔より消息とはいふ也卒爾成ことといふへからすといひなからよくみるに荒日月、、、、餘成とあり宇宙洪荒日月より閏餘成年とあるへきを左右はきれて荒より成まてあるなるもしるへからすされ共既に住職は勿論昔よりよみたるものなき消息の殊更にしきの表具なとして置たるものに手本ゑきれたるものあるへからすされ共列張辰宿およひ閏餘成の字は某にもかく

法華經は要品也と住職はいひき要品とは別に板華せしこと辨慶かもあり頃しらすいつやれとも能書のことも古のくの書たるものとはみゆ昔小野道風和漢朗詠集を記せしかこれはこと寿永の人永よりの末の文こと書たるこのことくに若なりたりともくるしからさるか三藏心經を唐太宗王羲之書を以集字せし例ありかゝることいくらもあるへし其

外南朝の達磨日本へ來り印度無熱池の水數萬里をくゝりて日本へかよふこと其例いくらもあり中々凡慮を以はかりかたし

此松ケ崎は年々に潮陸へうちあけて御番所もいにしへとは場所かはれり年々に變地いたす也こゝは地の減るかことし末の小木あたりは地のまさるかことし盈虚變をあらはすなるへし

は讀たりされは日蓮の深きこゝろをこめて千字文の輯字にて隱語を以消息ありしも知るへからさる也こゝの尤大切之靈寶に春日大明神の日蓮の盃こと成たるといふ土器あり至ての古物かけたり樣其外盃之臺といふもの瓦器にて又古色あり六角にてわたり七寸計山水ともいふへき圖ありて其圖のあひた〳〵になみと雷文の如きものをいかにも至極細密にほりたる樣古色可愛のみにあらす凡作とはみへすつら〳〵おもふに日蓮在島のうさなくさめとして神通力にて高麗もろこしより此器をとりよせて盃事なし玉ひしも是又しるへからすかゝること神佛の不思議中々後世よりはかりかたき不思議共神社佛閣の縁起靈寶等にはあるへからすとはいひかたき也日蓮は　父母の信し玉ひけるとおもひ出て

　ふる秋の霜もきへぬるあまつ日の蓮の光なをにほふ也

行ひを本とさきぬる法の華敎をのこす古寺そこれ

○十五日　くもり　五時前松ケ崎村を出て直に船に乗多田村筵場村腰細

羽茂本鄕は草刈の里千くさの里といふとこゝのみの開たる所故なるへしかしこくも順徳院の御味に草刈の里を尋て來しかとも駒に物こふあるしなけれは色々の千種の里は下もへの春はひとつのみとり也けりこしの菅原ともいふ万葉藻鹽草等に歌ありとそ大石と羽茂本鄕迄之内に過る村名清士岡村也西方村

村德和村赤泊村に至り上陸晝休いたし夫ゟ眞浦村柳澤村新保村杉野浦村大杉村赤岩村野崎村大泊村大石村迄乗船にて大石にて上陸こゝの御藏御米を見分いたす御廻米懸りの廣間役等出居る也此所之御番所役色砂を一盃差出こと先例也あかきも水晶のこときもある小石也大石ゟ羽茂本鄕にいたる此村之耕地はうち開けたること也佐州第一之耕地なりと左もあるへし女共泥の如くに相成田をきりかえし居たり羽茂本鄕大蓮寺に止宿眞言宗にて相應之寺也　赤泊湊ハ三四十町計に成某か船より六七間もあるへし材木のことく成もの浪にゆらるゝかことしよくみれは大魚のひれと尾なるへしいくらもあり御船手のいふふかといふ大魚のむらかりて行也と珍敷覺たり人にもおそれぬにや供ふね其外六七艘の間にいくらも尾ひれを出せり眞浦村に日蓮の石碑あり上陸せされはいかゝ記しありしやしらす此處は則世に聞へたる波題目のうかみ出居るといふ所也こゝろしてみしかしらす廣間役山中又四郎（先達て江戸にて揚り屋ニ入たるもの）日蓮宗信仰故きゝしに兼

ゐ信仰のこと故若き時よりしは〳〵行みしに浮たることみしことなし信心のたらぬ故なるへしといひき某は又四郎より信心深きにや既に其半はみたり題目まてはみさりしか波をはよくみたりされは半とはいふ也といひて笑ひし也　赤泊村禪長寺は眞言宗也靈寶空海か筆の畫佛二幅いつれも眞黑にゐ少もわからす是そ空海のしるしなるへし毘沙門堂大納言爲兼流罪の時持たるといふ竹二本ありいつれも雙生せしもの也きそに浦島子かつりさほといふもの林泉寺にあり是も雙生也てらの靈寶みな此類也書は空海像は空海惠心雲慶といふことつねのこと也まれには外ゑ彫刻もあるへきにや

爲兼流罪ゑ時寺泊遊ゑ女よみけるよし玉葉集

にあり物おもひと越おもの浦に行波路も立歸るひあり習けりこそきけり

○十六日　晴　五時前に羽茂本郷を出て蓮華峰寺に向ひ行みちの耕地ことによし此邊は苗代をまつるや苗代小田には水口にさくらつゝしなとさしてゆふのことものかけしもある也この邊花ならぬ所とてはなしされ共至ゐ寒しわた入三ッ胴着に羽織にゐ十四五町も歩行せしか汗出ることなし

羽茂本郷村へ
ゑより小内ひ
迄ゑ飯内岡崎
上瀧川下大平
外川茂川
山茂

都すて鴈の歸れるこしなれは行さとことに花さきにけり

打かへす苗代小田の水口に秋かけいのる花たむくなり

春さむみ小ひへの山のさくら花なれて雪かとあやまたれけり

二十町計にゐ小比叡山蓮華寺峰寺に至る九拾石ゑ　御朱印にゐ當國第一ゑ大刹也十町計外へ黑衣僧兩人出迎いたす大門ゑ口に香衣著たる僧貳人出迎いたす其ものゝ案内にゐ境内燈明堂其外所巡覽奥ゑ院に行みちは弘法姿みの水といふより先女人禁制也寺ゑ門口に院代出迎いたす住持は留守也本堂に弘法大師の額　嵯峨天皇ゑ　勅額等あり庫裏客殿等都ゐよろし某を通せしは上段ゑ間格天井ゑ所也こゝは先格にゐ蕎麥飯强飯酒吸物等いたす由也　御宮もあれと此程故不奉拜候頃日一菜の外いたす事をいたくいましめける故かきのふ役僧伺出たり夫は目付役地方懸りゑものに可相伺と申遣せしに實は伺たりしに某かもしや蕎麥きらいのときあししそこの

下里山上山田
小村ひへ山小内
木町ゑ野浦ゑ
少木小木村町

誰かいひけむ
御きらいかなゝ
そはから
引かけて
水品うまくむけて
くはせる

心得にゐ伺出候へと内々沙汰ありしよし申しぬされは地方懸頭取の水品孫十郎某か心得ゑ程はかりかねたるなるへし昔よりゑ仕來可改ことかはは蕎麥のみ手輕出し候へと申遣しけれは酒吸物を出さす强飯に猪口平蕎麥およひ只の飯なとを出せりそはか成也四椀ものしぬ强飯は一椀也只のめしは斷ゐたへす候こゝにて是等ゑ事することは一件帳といふものにも記しありて仕來也こゝは御朱印寫ゑ外みるへきものなし古寺院なれと百五十年前に佐渡の小木定番役の某伊丹播磨守を怨むことありて此てらゐ立こもり候故播磨守か家來共此時播磨守は奉行家來は留守居ともいふの也一國ゑ人數を傾て取懸り戰爭に及ひ定番役も住持もけなける働して寺ゐ火をかけて死てけり以上ゑ事佐渡年代記に委細みゆ其時悉燒失して　御朱印も御三代樣より末也

此承應元年三月也衞門と辻藤左ふいもの也今此騷にあ半分はあらはるはへいかきこの國ゑ隣手ゑ播ゑ役ゑ事ゑ大時名等ゑ手ゑ地ゑ見事ゑ成

山水のおとを聞て

きのふ迄つゝく旅ねの雨にあきてかけひの音もをとろかれけり

寺の靜けれは

つもりぬるちりにも法の香そふかみうきよに遠きみねの古てら

一とせはすみてみなまし更によのうきをはなれしかゝるみてらに

寺のあるしは望ありて都へ行しなと聞へしかは

靜けさをたのしむこゝろなかりせは一日もこゝに住れやはする

よにしらぬ樂みしりて樂しまはかゝるみてらやすみ家ならまし

にきわひし市もしつけき山てらもこゝろひとつにかはらさらまし

ならの木立ことにしけくみへけれは

秋ふけし風の夕のおもはるゝならの木立のなかの山さと

寺領を過るあたりみちよけれは歩行せしにはや小木町へ來たりこゝは佐州第一ゑ湊といひて町村にゐ高七百石餘人數貳千七百人計あり夷町ほとの富家はなけれとよきみなとにて筑紫かた蝦夷か島へ行通ひの船々多き時は百四五十艘もかゝる湊なれはうきねの妻たるものもありてことに賑し夫故家つくり等相川よりよし只の商家ゑものも紅かみかけなとせしも

のある也ふなかゝりする湊のなかに城山といふ山ありめくり五百間餘に
ゐ直立十九間といふのほりみしにさくら數十本あり（植たるものとみゆる也）よほとよき
咏の山也雪月花ともに比類なかるへしとおもはるその城山へ行みちを隔
て西は内淵東は外淵といふ享和二年の大地震にゐうち間の水二丈五尺餘
減して今はよほとあせ新田なと出來たりと今の御番所ある邊はいにしへ
三百石以上ゑ船かゝりける所也といふこゝに安隆寺といふ日蓮の舊蹟あ
り日蓮日親の眞蹟深草の元政か眞蹟等あり海にのそみ新敷十八疊の客殿
次ゑ間附にゐよきてら也この寺に蒙古か日本にゐ破船せし時溺死ゑもの
菩提の爲とて元朝より贈たりとて唐人ゑ法華經とて聞へたるものありな
るほと古きもの也表紙等凡ならす手跡も一通りのものにゐはなし裏書を
みるに

至元廿二年乙酉五月日特爲因我所傷水陸飛沉一切衆生伏我功德因緣發
菩提心成等正覺兼及己身現世不逢九横當生淨土化度群生又願小男大願

至元――――
――――爾
右散――廉□
誌五行半也

寶體病厄消除壽命延長成就大願一門眷屬消災解厄福壽增延先亡久遠難
苦生天法界含靈俱霑利樂爾

右散騎尚書上將軍廉本□誌（此二字書判に似たり）

されは元人の書たることいかゝあるへし然れ共中々一通のものにてはな
き也こゝの祖師堂の脇に大木のもみちありめたしことに美敷みゆる也

わか葉より紅葉しぬるはうらなみをかけてはしほに染しなるらし
彌生なるみとりのなかにもみちしてはつ花よりもめつらしきかな

羽茂本郷に百五歳の女百貳歳の男あり貳人扶持つゝ被下故目見に出し也
錢壹貫文宛とらせ候其男のかたは召連て出し子八十二歳孫五十六歳曾孫三十五歳に
成といふ親子ともに健にゐかの百歳の老夫も小木町迄商ひに今以出ると
去年より少々耳遠に成たるをかこち居るよしかきりもなきこと也何か手
業ありやと聞しに飯匕（シャクシ）をつくることを知るといふ夫もて業とするよしな
れは　母上ゑ奉らむとて二三本造らせ候積其筋ゑ申聞置たり

○十七日　くもり　小木町より小木村宿根木村强清水村犬神平村深浦村澤崎村に至り晝休同所ゟ白木村江積村田野村木流村大浦村井坪村堂釜村小泊村椿尾村高崎村西三川村に至りて止宿以上不殘船にゐ海岸見廻り也堂釜邊ゟ沖より佐州をみるに大佐渡小佐渡のわかちよくみゆる也大佐渡と小佐渡の境は海潮通かことくにみゆる也其所則國なか筋也竊におもひしは大佐渡小佐渡元二島にゐ前ゟ小木のことく變地して間の水淺き所良田と成たるもしるへからす既に塚原三昧堂なといふ所日蓮のむかし配流の時は海は近かゝりしか今は遙に隔たり大小佐渡の二島たるは洋中ゟ體にゐはよくみゆるなと申せし也（間宮林蔵ゟ話に唐太とサカリンもと二島にて後年一島に成たるかといひき）然るに西三川村に著して澁手村ゟ浦目付よりさゝゐ蛤なとの石に化したるを出せり佐渡には貝のなき國にゐ蛤等は北海都ゐ少と承るにいつれにあるといひしに梨木岑を穿てはまゝ出るといふ也其所は海へ遠きみね也されは右はいにしへ海底にゐ右ゟ小木を以大小佐渡の境を論せしもあなかちに捨

（山上より貝の出る所多し備中其外相州のあから山の江戸ゟ類の道灌山ゟ尋はいくへゟ海へしらもあるのみる貝佐渡ゟ海上ゟ地の體ゟ出ること符合すとい也）

へからさるかとおもひし也小木の湊に經島といふ岩あり昔日蓮の赦免狀を日朗携來りて此所にて法華經よみたる所也といふ也これも今は地つゝきの所也　けふの船よりみれは岩水とひとしく海上へ三町も四丁もおし出し其うちに築山飛石のことき岩ありて漁父つり垂ておるけしきめつらしくみゆる也尤咏いふへくもあらぬ也

花のちるをみて

ちりかてに花はなりけり眞帆かけし船より早くはるの行らむ

半なる彌生のけふに夏たつをいかにしりてや花はちりけむ

いとさむかりけれは

夏立しけふも越路のたひ衣いく重かさねてなをさゆる也

○十八日　くもり　五時前西三川村を出てもゝ引半てんにゐ笹川十八枚村の金山に至一里餘といふ近しみち嶮岨なる瘠地也金山は相川金山とは更にことかはりたり立殘山峠坂山船久保山といふ金山は砂と石との赤き

（けふの村々西三川十八枚笹川切澤　田倉谷　大小立立）

大田龍春
新澁須
所脇谷
町手谷

山にて小松生居たりそれを段々と穿ちて崩し取る也夫故此邊の山二百年來に大に平坦ゑ地に成たるなるへし立殘山へ行みしに數十丈の大砂山を半は崩し取半はのこしあり（立殘山の名是より起るか）其殘の所へから堀のことき物を附其内およひ山裾をくわに似たるものにゐ打かきてみちに砂をもるかことくにしてやりて人を走らせし也水はいかにと役人申せしにこくよしと人足のいひしかやかて譬はなら小笹へあられ村しくれ一時に夥ふりかゝるかことく成おとしてそのから堀のことくなるものの上より瀧つせと成て流れ出右ゑ堀は忽に谷川のことくに成也其内にゐくわのことき物を上を穿ち末へ貳尺計りなる筵をならへて二人して一枚つゝもち其樣魚をとるかことく成ことをする也さすれは金は筵にとゝまる也其砂を又筵よりなかくほの板へうつし水にゐゆり砂金を取る也此所ゐ出る金佐州第一也須叟に五分計とれたり（金計也）やかて役人にみせはかりにかけて腰なる印籠ゑことき物ゐ人足いれたり其水源にそひて行みしに大なる池あり

て山谷川をせき入てそれかけし也瀧つ早せと成て流るゝ樣すさまし夫ゐ左右百四五拾間計の谷を行也（こゝも昔は山也しゐ五十年來穿ちとりそこを行こてかくは成たりといふ人力可恐こと也）と二丁計にして峠坂山に至るこゝは數十丈のかけをくわにてうかつ也（五六人也）壹人たんない爺といふもの附て山のそゝけておつる程を見居る也壹間計堀は砂山故山にひゝ入て崩落る也其程をタンナイ〳〵といひて附居る也こゝも前に類し山をうちかきてほとよき頃これは山の中ふくより四五丈の大瀧俄におち來りて（此瀧口より三四十間計ありき）谷川と成て山裾を洗也是を一番流しといふかくして段々と二番三番と流して砂金をとる也（以上ゑ仕かた粗前に類す）須叟に大瀑布の出來たる樣流末に人足の見物して居たるあたりみる〳〵谷川と成て驚き逃迷ひて高みへあかりたるなといと〳〵珍敷にと也船久保山是又同しこゝの修驗者の宅にゐひる休せし也（村雨ふりし也）其内に俄にあられに成て頻にさむく成し也こゝより新町迄三里餘也道あしけれはもゝ引半てんにて歩行幸ひに天氣に成ける也澁手と新町ゑ濱に日蓮こしかけの石と

いふあり其舊蹟に文政度ゑ碑立あり　笹川十八枚村邊は寒つよき所とみへたり漸にさくら開たり

はる遲き里もなか〳〵頼みあり今めつらしき花の咏に

けふ途中にゐ晝休いまた四ッ前なれは小休の所にゐ密に辨當にいたしけり例の燒飯をこりに入たるなれはいつにてもこまらぬ也召伯程の身からの人三代の頃は甘棠のもとに政を聞たるといふにあらすや今政のことはさて置ぬ某らか巡村とても民の勞すること夥也夫をいとひて辨當にし食物等迄嚴敷せしかと夫にゐも勞することは多き也密にきくに入費三分一に成たりと奉行巡村ゑ入用は高割に成こと故一村の一人その身にかゝることは少にゐ奉行を名として其割元の役人共飲食の費は多也されはありかたきとはおもはぬ也氣受といふことを論せむには却ゐ村入用の程よく多かたを可悅也され共奉行よりは減することくするかた法なれは減せし也いにしへを以今を論するに民の勞することはこゝろせねは多なる也甘

棠のもとにて政こと聞ほとの手輕成ことは成らぬとも其こゝろはなくて叶はぬ也華美傲奢と御威光といふものは別物なるを知るへき事也いかに華美なることなしたらむとも卑劣なることして奉行職に似合しからさる寶にけかれ其家來たるもの民のものを取を以其つとめのことくに心得には欲深き商人かあるひは盗賊のよき衣着たるにて大に御威光を損へし下を叱り候と華美を以は御威光却ゐいかゝあるへきにや　砂金山よりは石瑛のむらさき成およひ燧石出る也くろ萩枝とくさもあり佐渡に眼あるもの來たらむには眞の珠玉もあるへけれとしらぬは仕かたもなきこと也燧石といふ江戸とは變りすき通らぬ水晶のことときもの也　澁手といふ所は順德院の隱岐の　先帝を慕ひ玉ひて

いさゝらは磯打なみに事問はむ沖のかたには何事かある

と遊はされしと今も語り傳ふる也それより戀か浦とは名つけしと申也都とはあらてをきの　先帝を戀玉ひし御事そかしこけれ

このいそにおきのかたをそ戀か浦そてぬるゝ哉君かみこゝろ
歸るてふ名はあたにのみ浪よせていくたひ君の袖ぬらすらむ
立よりていさこと問はむあともなしかひなくよする戀かうら波
あられふりける時
おのかともの雪とはいかに玉あられ深き香ほりの花の梢は
めつらしきいろ香の花に宿かりてけぬともあられいとはさらまし
さく花に驚ぬらし玉あられなかめなれつる雪ならなくに
さむけさにわれも迷ひし花の雪あられふりぬを得やはとかむる
○十九日　快晴　至ゐ寒し綿入貳つ胴着二つにて歩行少も汗出不申候
五時より新町を出て眞野村に至るこゝの眞輪寺は　順德院仁治三年九月
十三日　御寶算御四十六にゐ　崩御ましませし所といふ眞輪寺の什物は
悉怪敷もの計也眞輪寺を去事八丁計にして竹田村ゑ内にゐ竪五十間横五
十間の延寶已來ゑ除地あり壹町四方も其餘もあるかことしものさひたる
松林也其内高三尺計に石かけつき廻したる所ありて眞中にとし古たる松
とさくらとありさくらはわか木なれ共松は數百年のものとみゆる也下馬
と記しあるといふとし古たる杭壹本松林の前にあり奉拜もの誰かは落涙
におよちきらむかしこさいふへくもあらす候
思ひきや雲の上をは餘所にみて眞野の入江に朽果むとは
なからへてたとへは末に歸るともうきは此世の都也けり
右を御製と語り傳ふる也眞輪寺ゟ　御陵ゑ參るみちのいかにも見苦敷農
家の庭に石抱きの梅といふものあり　順德院の御手植と土俗は申也いか
ゝあるや否はしらねとも古きことはいふへくもあらすみき四かゝへもあ
るへき也珍敷木也されは共わか〳〵敷梅也いか也もの成か其石のうちに四
五尺の石碑のことき物のみゆる也（全體はしらす自然ゑ梅の木のうちに籠りたるか根の邊並三尺計あかりたる所に石あり〳〵とみゆる故四五尺とは記せし也只の石かもしるへからされとも高き石にて漸々に梅のみきのうちにいる樣石碑のことき物ならてはかくは成ましき也武州桶川宿より三里計かと覺たり在のてらに蒲の冠者のりよりの墓ありこれはさくらのみきのうちへ段々とこもること此梅のことくおもはるゝ也　御陵はたゝひのあとにて　御遺體のある所にはあたれとも

さたかならぬこと也此梅のもしや夫等之碑ならぬにみまほしきこと也　萬乘の君の御碑等にゐ農家之塵埃に埋もれむことかしこみて梅のかくはなせしもしるへからさる也

夫ゟ國分寺村國分寺に至るこゝの什物は享祿に燒て　聖武天皇の　勅附といふ大成藥師の坐像ありいかにも可尊品にみゆ凡物にはあらぬ也こゝにて瓦の破れたるを例として奉行ゐ出す也境内の除地のみとはいへ共寺からよしさすかにそらたきの香ほりなとありき夫ゟ竹田村世尊寺にいたるこゝは日蓮宗にゐ日蓮の眞跡菅家の御筆の法華經なとあれともいつれもまこと敷ものは少き也小てらにて住持留守にゐ院代出しか什物のこともしらぬ百姓の頭圓か成こときゐ僧也夫ゟ阿佛坊村妙宣寺に至るこゝは世に知る所の阿佛坊村日得幷千日尼の居たる所の寺と成たるかに付什物殊に多し日得千日尼の像は古物可疑ものにあらす日蓮自筆のもの多あるうちに唐紙一枚程の曼多羅あり見事いふへくもあらす其上大切に成たるものとみへてあまりふるひもせす筆勢等たしかにみへ尤珍物也こゝはよき寺にゐ書院奥の坐敷共あり祖師堂其外回廊續き也辨當所故辨當のあとにゐ珍敷とおもひしもの共取よせみしにいつれも可疑ものにあらす其外日蓮身延へかへられたる跡にゐ千日尼よりけさ其外錢等を奉りし時佐渡にゐ阿佛幷尼の格別の世話に成あまの姿を日蓮のおかまれしなといふこと其外日蓮のいくたひか法の爲に殺されんとせしことなと記せし奉書ほとのものをつきませて一二と番附をしていろ〳〵のことおもひつゝけしまゝ記し書簡三卷あり實に珍物也日蓮のけさといふものもありなみの絹にゐいかなるわけか今の雜巾のことくにさしたるもの也いつれも母上なと御覽あらむに御涙にむせはせ玉ふへき程のものいくらもある也尼幷阿佛か日蓮へつかふる像はいかにもとし老たる夫婦の手にもの携へ杖にすかり行體にて只うらむらくは後世のものとみゆ水晶の念珠を持たせたるかおもしろからぬのみあとはよほとよき像にて古代のものとみゆる也こゝにて辨當仕舞夫ゟ宮浦村慶宮寺へ參るよき寺也佛畫に唐物かとおもふものあり夫ゟ長谷村長谷寺へ可行處泊りゑ宿より又二里餘あり又必行へき

所にもあらす且は御用も出來たれは長谷寺へはゆかて止ぬこゝの旅宿にては奇特もの孝行もの古主へ忠義のもの其呼出し銀子とらするもあり鳥目とらするもありき紫ちりめんの幕をしほり庭を白洲體にいたし同心等差出廣間役其外椽頰にならひとらする鳥目を肩へ打かけて引樣いかにも戯場なとに近し江戸の白洲にはなきこと也けふの村々は長石村四日町村辰巳村下八幡村上八幡村八幡新町八幡町眞野村吉岡村名古屋村大川村國分寺村阿佛坊村竹田村三宮村馬場村北村金丸村金丸本郷寺田村目黒町村安國寺村畑方村畑本郷也　上八幡村に　順德院の　皇居ましませしといふ也雪の高濱といふ所はこゝ也とそ下八幡村はこゝの松原也　佐渡の在の風呂は湯少しいれて筵を頭なかふりあたゝまる事也今迄は戸たなふろ並の風呂の所計にていり筵をかふるにはいらさりしかけふの旅宿はふろも筵も新敷故にはいりみしに風呂の大さ程の筵にゐ山岡頭巾といふものゝ如きものを作りふろにかふせある也其筵をあけていり又筵を頭よりかふること也筵へ湯氣たまりわらの匂ひの雫顔へたり何分いかぬもの也

陵の古松をみて　君いますむかしを問へは千世をふる松も時雨に枝やくつらむ末遠くつきせぬうらみ白波のおとうちよするみさゝきの松

上小幡村はこしの松原といふ所にてそはつの森とも歌まくらにいふと聞しかはけふこしの松原過ぬ人もみむ相川にやゝほとはあらしなるさを日ことにまつのわかいもはそはつの森の名やうらむらむ

歸

暖か家の庭の梅を順德院の御手うへとかたり傳けれはかしこくも君植しよをあふく哉昔なからの梅の梢に

九重のかほりはあらし藻鹽やくいふせき庭に咲し此花上八幡村は雪の高濱といふ所にて順德院の皇居ありし頃杜鵑を聞し召て

と

なけは聞きけは都のこひしきに此里過よ山ほとゝきす御製ありし故ほとゝきす鳴さりしかそのゝち日野中納言資朝卿配流の時

と

聞人も今はなきよそほとゝきす誰をしのひて過す此さと

とよみけれは今はほとゝきす鳴となむかたり傳ふる也よつてかくはおもひつゝけし

ほとゝきすなくも鳴かぬもきゝてしはみなそてぬるゝ昔也けり

ほとゝきすなかぬもむへし歸にはしはしの聲の聞かれやはする

都路を忍か袖にいにしとしともになけとやまつほとゝきす

雪の高濱にて　かこちつる冬より〻こしのたひねして名を聞もうし雪の高濱白たへの磯山のはは夏來ぬる衣やかけし雪の高濱

○廿日　晴　五時畑本郷を出て　なむたいの野　にいたるこゝは日朗の日蓮の住居を尋あかしてこゝにて後かけをみて呼かけけれるに御教書も

宮ノ浦　久保　後村
ふ　猿　山々
の　長八　河
村　谷　
大倉　
内小坊　
十十
ノ二
江五
穂ヶ
川貫
皆浦
新　
下穂
村　
内上
屋穂
善白
正大
明野
光但
寺生
甘木
田
野
澤
上
籠
長
山
立
野
江米
下
安横上釜谷
養山横
寺
吉井
吉井
水瀬
渡
田下上本吉堀井
町町
青
龍
寺
細
谷谷三
塚
方
長
故
船
二
方
潟
馬
場
津
横谷
貝塚
西方
新保
中島
田
大和
本
ヤシ
上中興
キ
多羅海
曼珍物
此の内へし
な

ち來しともしらす　なむたひの　といひてふりかへりみて出島のゆるし
ふみたることを知られたる所にて今にては開運の所といふ也題目彫し大
成石の塔ありかゝる類舊蹟此邊至ゐ多し夫ゐ大野村に至るこゝの塚原と
いふ所に根本寺といふ寺ありこゝは日蓮宗佐渡にて第一の寺也よき寺也
こゝの入口に三昧堂といふ所ありこれは日蓮配流の時此三昧堂といふ所
はいはゆる塚原にて牛馬なと捨る所に壹間四面ゑ堂ありこゝにて説法等
ありしよし也（在にては死人の燒場を三まいといふ也定ゐ燒場の小堂なるへし）今は堂のあとは石の階段等附た
る三重の三四間四面程の石垣にて上に石の塔あり（順德院の御陵より立派なること也落涙のこと也）其
わきに祖師堂あり（御本丸より内々御納ありしといふ結搆なる祖師の大像こゝにあり）夫ゐ本堂鬼子母神ゑ堂等あ
りこゝに鬼子母神の像三體あり内一體頭の上とかたとに小鬼をのせたる
鬼子母神の像別段なるもの也日蓮十八歳の時の清書といふあり草書至ゐ
見事なり甚深見新右衞門か書に似たり凡筆ならす日蓮自筆の曼多羅あり
大幅にて表具の絹と紙中の間に法華守護の諸佛神等を畫かけり墨畫なれ

とも至ゐ古く美事也又其一段うちは粟粒ほとの字にゐ法華經一部を記せ
り（これたゝ日蓮の自書といふ也いかゝあるへき）其外ゑ什物はさしてのものなし住僧云きのふの阿佛
坊一體は寺古くあり三昧堂は右ゑ曼多羅のみなれ共日蓮法華の妙理を徹
底悟道せし書共あらはせしは此三昧堂にゐゑ事故日蓮宗の根本は此寺跡
にあれは三百年來かゝる寺とは成たりとよつて妙宣寺ほとの什物はなし
といふ日蓮か伊豆へ流され再ひ佐渡へ流されいくたひか命をも失はれむ
とせしをもいとはす尙妙理を究たるなといとも〳〵かしこし此人此心あ
りて日本へ蒙古の來らむことを前より知りていひしなとは大儒も稱する
ことそかしはつか一間四面の死馬捨場の辻堂にゐも世に法華を弘めむと
心を勞せしは貴ときことならすやわか　父母の信玉へるも宜ことはりな
る御こと也然るにいかなれは末世の賣僧そこにはこゝろつかて天下ゑ御
法度たることを犯し諸宗をそしり僞のことゝもを以婦女を欺金錢を欺取
ておのれか口腹のためにす日蓮一たひかゝる輩をみはかならすそれらの

奴輩こと〳〵く七里か濱にて首きらぬには法華の正理也といふへきもしるへからす日蓮を學ふものは第一に日蓮の苦勞を身にふみてせめてはよくを少しく食もの衣類等をよくせむとのことなく孫子にひかされてあらさらむ欲心を出すことなからむ樣にありたきこと也今近く申さむに　公儀を大切に重むしなから其　公儀にていたすましきといふ御法度いたしなから立身出世を望候ことく東へ行かむとして西へ走ることなく日蓮宗の宗旨は法華にて法華には五よくをすれは地獄におつるといふ御法度ある一句にても守りたきことなるへしこの根本寺にゐ守洗米其外共出せり先例也夫等は此次にたよりに奉るへし御信心あるへし信心は心をまことにするといふ字なりされはましりなしに法華のことを信し申さすては信心にはなりかたかるへし」夫か清水寺に至る本尊の觀音は秘佛と申す故にみすねはむ像によき品あり胎そう金剛二かいの圖ありよきものとみゆれと古物にてしれかたし夫か上中興村本間西蓮寺に至る住僧をみるに品格

本間西蓮寺といふこと松平西福寺の類なるへしこの寺にはあはせ先例にあらしの寒さの團子を出す也

よし佐渡のてら〳〵にて奉行參れは地上に平服するも足の甲に手を附て立なから出迎するもありこゝの住持少々並より頭高し役僧兩人召連出たり武家の子也とおもひしによく聞は東派ゑ一向宗にゐこゝの昔國主たる本間か子孫也といふあらそはれぬもの也こゝにも日蓮より本間へ與し曼多羅又は北條家より本間ゐゑ御敎書等あり　東照宮の御書と申候ものもある也傳來覺束なしこゝには必古代ゑ武器あるへしとて聞しに太刀鎧甲冑等先祖の持傳ありしか三代已前ゑ住持へ其時ゑ奉行より所望にて奉り今はなしとて蒔繪の古くら一つみせたりよきものとみゆる也一國ゑ奉行故さもなくてはならぬなれと本堂へ行みちのうは草りを立派なる僧の手つから直せしもありき根本寺なとも中門の外に送迎上下坐也奉行は駕ゑ内にゐ戸を引かせ候計也

けふ濱邊にて冬にみしほとならなくも汐風に磯邊あまきる佐渡のしら波はつ花と遠ちにみてしもいや高き磯邊のいわほなみこへてけり

けふとまりの上中興村は夏もなを鴈の居と聞しかは夏もなたこゝに住けり鴈の名は都なる旅になくらむ

ふちかれのけふりなからの橋ならてむかしかはらぬ鴈のふるさと

中興の鴈のことは十二日の日記にもいふかことく故かくは咏せしかなを
いかなる所に居るやらむとて村長に聞せしにやゝしはらくありて鴈は秋
の彼岸に參り春のひかむには歸るもの故此ほとはをり候はすといひ出た
りそはたれも知たることなれとこゝの鴈は既に佐々木彌左衞門かかくと
いひしといひて聞かせしにけしからぬ顏して尙尋へしといひて入けるか
其後何ともいはす彌左衞門はあやまりみたることいひしや聞し村長かこ
ゝろなきにや名所舊蹟等にかゝること多かるへし

はなのちるをみて（さく花をあやなく霞かくせしもいつしかさそふはるの山かせ人しらすちりぬる花は山かせにこゝろやすくや身をまかすらむ）

花のさかり成里もありけれは（山高みさそふ嵐のさくら花麓のさとに雪とふるらむ）（山風にかたもさためすちり行しやとりかこゝの花のひともと）

○廿一日　晴　西蓮寺に　東照宮の御書ありかゝり湯いたし今朝拜見い

たす傳來さたかならす其外拜領の茶器を出すよろしくみゆれ共不相分候
傳來さたかならす候本間家上杉に被滅頃より持傳の小わきさし出す素あ
かゝねなゝ子のふち作風の武者目貫にゐさめもよろし至ゐふるし細川流
の拵に至ゐ類す細縵理（スクハ）にゐ三（み）すみ成菖蒲作也大和物のことしいつれの作
と聞しに銘はしらす中心くさり居と承るといふ中心を爲拔見しに正眞（金房正眞）と
いふ銘（なるへし）あり至ゐよろしき中心也つくしほうのことときものにゐ全ゑ短刀也
無疑もの也こゝより市ゑ澤實相寺にいたるこゝは日蓮の塚原よりこゝの
一ノ谷（サハ）妙照寺のある所にうつり住みてかしこは谷間故こゝへ來りてあさ
日を拜されし所也といふ（此間五六町もあるへし）其時袈裟をかけられたる松あり今は寶
藏にをさめある也正太夫ゐ日を拜する時はとりたるけさをもかけ不申候
ゐは不相成夫を松にかけしはいかゝと聞しに住持困りたる體なりしか日
を拜する前にうかひてうすの時けさを松にかけられたる也といひき頓智
ゑきゝたる僧也此松に布めありと江戸にゐ聞しこともありしか僞也直筆

ゑ題目菅公ゑ法華經なとうけかたきもの也夫〻妙照寺に至るこゝは日蓮の住居也種々の什物あれ共取にたらす閻浮檀金の釋迦の像也とて住持こと〳〵しくいひてみせたりづしより爲出みしにからかねにきんの箔置たるもの也あり〳〵とわかる也住持殊に高慢にゐ眞物ゑよし殊にほこり已前江戸開帳ゑ節　御殿にゐ女中共拜禮殊に感戴いたし正眞也とて信仰ありしよしいひき女中ゑ佛像ゑ目利珍敷こと成に金座に類せし品定せしを住持の證としいふも珍敷こと也こゝの什物みな夫に類す夫〻眞光寺村眞光寺に至るこゝは　御宮あるに付かゝり湯ゑ上のしめに着替拜禮いたすいか成わけにゐ奉勸請候哉追ゐ尋ぬへし　東照大神君とあたらしく行書にゐ記せし懸物を拜し奉ること也こゝには龍宮よりあかりたるといふ大鐘あり古物可疑ものにあらす古銅の色可愛也其外子昂ゑ畫等ありいつれも取にたらす日蓮自畫の三十番神ありいつれも不審成もの也景勝納たるといふ甲冑あり甲は數物なるもしるへからす胴はかなり也くさりてはら

けふ過る村々
藤牛平上長木石原二寺山窪炭十十里中籠村眞は出
々澤込矢木上長弛下野下矢當和泉野弛長澤田河原眞清青水光田屋里里本町光蕎ゑす
平中市弛下宮田平中田中原清野水田里里五郷寺澤例
東五十五十田根澤根澤十五西東五十五十田根澤根澤町ゐゐ寺麥是等も
前

はらに成たり長刀二振ありいつれもよろしくみゆるさひてわからす候夫〻河原田町にゐ畫休いたす同所妙經寺ゑ什物景勝朱印の外みるにたらす中原村本田村ゑ什物ゑ内に元信の筆といふ十六羅漢十六ふくあり古物さて又畫はしらすなから何分凡筆ならす見事いふへくもあらす密なるかことくあらきかことく剛なるかことくやさしきかことく珍物なるへしされ共眞物かはわれにしれぬ也八半時過澤根村にいたる明日は船にゐ相川ゑ歸候積に付先けふにて巡村はすみたり其内に可笑ことあり同心先に立下に〳〵といふに下におらす其時ねまれ〳〵といふとはい〳〵といふて下におるところもあり　のたまおやすな　とて叱ることあり是はかしらあくへからすなるへしをり〳〵頭をさけい〳〵と目付役等ゑ類いふ也廁に杉のおり枝をいれて箒丸（キンクヽ）をいら〳〵とつゝかれし所もある也或は寺にゐ岩清水を手水鉢に取りて夫か手水鉢は裸の木人形の股より竹のつゝを斜に出し夫〻水走り出るなとけしからぬ仕かた也龍の口なと附可申をかく

せしは龍は陽物也といふよりおもひ附もしるへからす（薑は神明に通といふをあやまりて生姜を神明にて賣類なるへし）寺の本堂の脇の廊下のたゝみをあけ天井より例の筵をつり下に居ふろ桶を置しに入しこともある也夫等は江戸にて旅せぬものはしらぬなれ共いつくも田舍はかくの如なるもの也おかしきことなれ共鍬五郎なとの田舍のことしらぬ故奉行にゐ廻村してさへかくの如なる故民の難義のこと江戸のもの難有おもふへきため且は母上の御わらひの種ともおかしきことをも其儘記せし也

○廿二日　晴　五時前に澤根村を立出て同所御番所を見廻り則御番所ゑ前にて船に乘り西浦七浦を海上よりみて是は澤根より相川の入口下戸村を省てのこり七浦あれは也其七浦は二見村（こゝにいせの二見のことき岩あり夫か村名出る歟）米郷稻鯨橘村高瀨村大浦村鹿伏村也いつれも岩石峨々たる谷間の潟に村居を成せし也常に居間よりみる春日の燈明崎烏帽子岩等に大成いかにしてこゝを冬は浪のこゆるやと驚計也けふのとか成日ならは浪こさしとゑ誓するともくるしからさる程也勁松の寒歳にあらはるゝにてものは穩成時は君子小人相混し君子もともすれは小人に近くなれとも大濤祁寒のことく變事ならては君子小人の差別はわかりかたき也山中鹿之助かうきことのなかしいのちある身の心たのみにといひしも謂あることにて人は變によく處することこそ己か力をみる所なりなとおもひ過し候うちにはや相川羽田町の濱へ參りぬ舟中よりみるに相川のもの共老若の馳走る體いとかしまし鑓爲持たるか行かふは役人の出迎するにて法師の走來るは御役所の詰醫師　御靈屋の御別當か出迎として來る也遠目かねにゐみるにわか家來共其外御役所の塀の上より歸るをまちみる樣なとあり〳〵みゆる也從者の船漕よするをしはしまち居るうち岸の上に相川のまち町々の人々のよりしをみるに江戸より來ける時にこと國程におもひも（マヽ）十四五日已來あやしけなる島人計をみ居し目にては都のことくにおもふ也こゝのもの江戸か相川といふも土地のものゝこゝろにはさもあるへし岸へのほれは其筋ゑ役人共御やと

ひ其外ゑもの共まてみちせきまてに居ならひて平服す目付役こと〳〵く
に披露する也町々の子供は着替なとして居る體也御役所惣御門ゐ參り候
當番ゑ面々ゑ内廣間役目付役出迎いたす（出迎ゑ廣間役は鑓箱にゐ羽田町ゐ出迎居し也）夫ゟ着服のま
〻にて召連し廣間役御船手等へ居間にて挨拶いたし組頭共呼出し相應挨
拶およひし也われ今日まてにて東西拾三里南北貳拾六里惣廻り五拾貳里
三郡貳百六拾四ヶ村を廻しかさしてこゝろあたりたることなし鷲崎にゐ
百姓の飯をみて辛苦に驚き笠とりはしり等ゑ難所風雨にゐ歩行し貳尺三
寸の新刀はゞかさね相應なるに短刀をさし山坂十里に近く歩行しことの
外くたひれ候右ゑ體にゐは都にゐ貳里三里ゑみちこそ三尺以上ゑ大刀も
役に立可申候得共陣中ゑ心懸には貳尺壹寸前後ゑ刀なるへきか鑓もちは
あれ共刀もちと申候こと陣中にはあるましきか野太刀遣ひたらむとも鑓
の用は如何可有之か平日竹刀ゑ長短もしなひうちに長せすことを欲せす
非常武篇の心懸あらはあまりに長きは如何あるへしか一日にてくたひれ
たり二日三日のことまして一月二月のおもふへき也しなひうちの論にて
只に勝負のみを爭は武といふへきかされ共勝負を爭ふこともしらす理と
話とに長したるは明儒のいふ野狐禪に近きものなるへしけふ通る七浦邊
の十一二歳位のこともは海上一里に近きところへ大たらひに乗出て漁す
る也はしめは子供の游きを習ふとおもひしかそはよくみれはたらひにの
りて漁する也珍ら敷みし也　御役所へかえりみしに半開たる櫻はさら也
いまた開かさりし花も梢みとり成夏こたちと成ておもかはりしたり池の
葦なと驚はかり延たり日月のしはしの間にうつり行ことあとみゆるもの
を以みれはかくのことしことを成さむとのこゝろあるものいか樣にも月
日ををしむへきこと也われ既に四十一歳に成れり先祖の積善と　上の御
惠の深きによりてかくは被　仰付たれとひまの時くりかへしおもふに一
つとこれと出來たることなし希古のとしの七十迄春秋をふるとも今迄の
ことくならむには何事の御爲かならむや只利欲につかはれて老朽なむと

おもへは口惜きこと也何卒今日より尙いましむへしと只今なおもふ也鍬五郎なと青年もの故こゝろして出精あるへし名身とゝもにくちて上の御爲等出來ぬ時は山野の禽獸よりは遙におとれりわれいかもして此禽獸たらむことをまぬかれむとおもふ也世に愚なるものをあの田舍もの百姓なとゝいふ也されは共こゝろなき時は其百姓には大におとりたる也春秋冬夏朝夕に農事にかゝり　上へ御年貢を奉るは一分ンの出來たるといふもの也此ほともうちかへす田の泥にて百姓は泥もてつくりたるかことくなり居る也夫にはをひたる婆々もわかき女もうちたれかみのをさな子もあるも也かく　公儀のことにかゝりきりにいたし居ると武家の當番等に主人のみ出るとは大に違ふ也せめては鍬五郎なともはやくわれ等かくるしむ所の山野の禽獸の場をまぬかれてよにいやしめらるゝ百姓ほとの　上に對し一分ンをつくす武士たるへきこゝろかけあるへし士たるものゝ農夫に不及こと日々に忘るへからさる樣心かくへき也

○廿三日　晴山本丈右衛門昨夕至ゐゑ不快と才右衛門新十郎今朝申聞る定なきよの常とはおもひなから驚たること也

○廿四日　雨　きのふはものみよりみゆる所也一里岩の邊にゐしは〳〵鯨の潮をふきたりとそ家來はみし也追ゐ某につけし頃ははやなかりし也

○廿五日　雨　ある地役人ゑ親に汝か子はよく出精すといひしに左思召ならは何とそ異見給るへしといひきいや汝か子は毀譽のあるものなれと某へ對し候ゐは出精にて異見いふへきことなしといひてやみたれされ共其心切なることみへし故に其子に追ゐあひし時汝か親はかくいふ也何もいふへきことはなけれとも親の心切成故にいふ也汝か三年已前御吟味ゑ時揚り入に被　仰付時のこゝろはいかに扨又出牢ゑ上佐渡へ歸りて親子手に手を取てよろこひ泣に泣たるときの心はいかに其囚人と成て佐渡の地離るゝと出牢して故郷へかへるとの二事は實地を踏みてよくしるへし只朝夕に其恐るへきと難有とゑ二事忘さらむ樣にあらまほしき也外にいふへきことなしといひて置たりけふ其親に逢て其こといひしよしかたり

しに悴よりも一かたならぬ願有ことに親共にも申聞候よく相知候御さとしにて某か腸へもしれ候とて殊に歡たる樣也人は實地をふみてみぬことは感動うすきもの也さしてのことにあられ（さ脱カ）ともことに恐れたるとことに歡敷と一身に二年か間に二度うけしものなれは早わかりせしとみへき難有も忝もしらぬものゝ日々におこりの氣の長するは末はわるきむくひ來也おそるへきことそかし

○廿六日　晴　至ゐ暖氣也

○廿八日　晴　御出棺の出仕ありわた入壹ッを著す今日を初とす

○廿九日　風雨　此ほと相川の蕎麥や帆かけし入船と革の袋のゆめをみて夢はんしに聞しに海のみゆる所にて金山を掘たらむには必盛なるへしといひしとて彌十郎と申山（銀山也）裾をかたき石十間計はや穿ちたりまた何もいてすと此事にて三人計身上つふすものあるへしかゝる類こゝに多きこと也江戸のとみの札とおなしこと也　庭のふちのはな兩三日已來さかり也ことによきふち也　七時頃御奉書貳ッ十四日廿三日附ゑ御用狀來る市川ゑ書狀幷母上より被下候　御文幷菓子二箱其外共相屆一同ゑ御別義あらせられぬとの御事何よりゑ義也

○晦日　晴　けふほとゝきす承り候さむしわた入かさね也

○四月朔日　晴　月次の禮受ること例の如し此ほと風ひかぬものとてはなし某も珍ら敷少々ひきたり尤半日も臥たることなし廿八日に月代すりたりけふは浴せむとおもひしかといまた殘あるかことくなれはあすといひてやみたり云ところ鼻風といふものゝ流行せる也

○二日　はれ　よほとの暖氣也わた入一ッにてよろしこのほとはちめといふ魚至ゐ下直也味いさきと黑鯛に似たり目の下八寸位なる品五十文位也あまり下直故味なきかことしと家來なといふ故江戸にて干魚給候時感心せよといひて笑ひし也　江戸へ佐渡より出て店持たるものゝ世話に成

所の主人酒のことにはあやしきまて巧者也けりある時佐渡第一の酒を一ひさこをくりしに直に盃へいれこゝろみて至ゐ珍敷酒也とて歡し故いつくの酒なりしや奉る某もよき珍かなる酒とみ聞（の脱カ）てしらぬ也そこのかくのたもふ上は彌以證とする也いつくの酒にゐいかなる所珍敷やといひしにわれいまたのみたることなしよつて珍敷といひし也尙考へしとて追々にのみ考てのちいひしはこの酒あらき水もてつくりたりこれを譬ゆるに山川の早瀨なといふものなるへしさるにしてもあく強し是水のこなれよからぬ故也されは山淺き國の酒なるかとおもふ也といひし故かのもの甚驚て實は佐渡の酒也といひしになるほと離島小國の酒なるへし全地狹く流短きによるものなるへしといひしよし廣間役吉田藤助ゟ家來俊藏へ語りし也

○四日　晴　わた入貳ッにてよろし　けしからぬ大鯛壹枚民藏持參り家來一同へ振舞のこと申しぬ價は五百五十文也とあなたかしけしからすといひし是にゐ佐渡の魚類下直のことおもふへし　此程は池そひの藤こと によろし六七間餘もあるへし　至ゐ見こと也かきつはたつほみ少々宛みゆるうのはなさかり也御役所の庭は花のまつはあらむことくにうへしものなるへし　江戸の御臺所も魚類にゐ鯛の獻上ありしよし同役より申來ぬよつて頃日魚類を給候（廿一日ゟ也）久しく給されは殊に味あるかことしいにしへの三年の喪なといふことのある也魚類味あるとおもふは恐入たる事也

○五日　晴　けふ役替申付るもの廣間役以下數人ありなかにはあしきもありてあはれにおもふ也其内に兄弟四人結構につとめしものゝ内二人迄けふあしき役替せりみつれはかくるなといひて土地のもの一向にあはれむけしきなし某等かことものゝおもふへきこと也某もつゝしむへし新右衞門幸三郎共心つけ候へ

○五日　晴　よほと夏のけしきもよほし候

○六日　晴　時太郎順之助願之上にゐつりに參るふく　はしめ　あひなめ等十計を得たり順之助たこの枕といふものを得來れり桔梗のことき姿にてうらもゝいろにて表にくろ地に赤き紋あり厚くして蛸のかたさのことくにてぬらめかすざら〳〵としたるものにゐ見し姿菓子に似たり海の虫の類なるへし海よりあけしときはよく動といふ江戸にてはしらぬもの也なまくさし磯くさし目もはなもなし

○七日　晴　わた入にゐはあつし七十五度に至る

○八日　晴　七十六度にて暑に至る家來單衣のものあり

○九日　晴　家來老人もす給也　佐渡にては犢（子ウシ）のある母うしは他國へはうらぬ也是は二疋子のある牛を他國へ賣赤泊といふ所より出船せしに其牛海中二里計の所を泳て歸り其牛こやに入て死けるよりもとより國禁の上に別ゐ其禁を密におかすものなしといふ　此ほとは庭の藤ちりてかきつはたはらのはなさかり池は蓮の葉至ゐ少也地にあはぬ故なるへしこうほねは咲そめたり

○十日　晴清暑の如し八十一度に至る　佐州に髪ゆひといふもの出來たるは四十年來也某のもの江戸へ往き返りて髪ゆひに成十六文宛にて結たり若きもの殊なる晴には結せしよし彼ものひんたらひ造り度とて出入之ものゟ百文宛もらひてつくりたり佐渡のものは髪たらひとて持歩行候故必手桶のことものなりとおもひ居しに丈高き筥也とてみな不審せしよし也田中從太郎いふ佐渡にいにしへより唐本にゐもよみたるものなし某か本よみ詩文章なとするは佛法の初ゐ日本へ渡りたるかことしと誇たることにあらさる也七十一歳に成地役人いふそれか幼年の頃四書の名は知れるもの多し早五經のことは御經か五經かしらぬ位也されは共近頃かく成て難有といふ也われよつておもふに五六十年の昔より却ゐ人氣開過て佐渡の人甚わるく成たりよつて徒に書籍をみて聖賢のみちに實踐のこゝろなからむには私智日に長してあしかるへし書物よむものゝおそるへきこ

と也唐土にゐも三代聖王堯舜なとの時はみなひらけぬよ也こゝろあるへき事か　佐州ゑ一國内ゑ寺社ゑ什物をみしにいまた相川のものをみすよつて寺社へ其をいひ示して什物書出させみしに相川は金銀山のなきうちははつか成漁父のみ居し所の俄にひらけて寺夥出來たること故重器とすへきものなしされ共龍宮より春日大明神へ奉りしといふ能の面或は天満宮の自ら彫刻ましませしといふ天満宮の尊像日蓮か飯くひたる椀雷か置て行といふてうしさかつき當麻中てう姫の曼多羅なといふもの夫々書出したり重器と什物と誤傳へし哉此外夜着蒲團有之又は勝手道具疊建具少々有之なとの奥書せしもみゆおかしき事也　夕かた鯨の潮をふくよし家來の申せしかは物見へ行てみしに今横岩のあたりといひし故（此横岩はものみより北手にて眼下間近き岩也）その邊をみしにはや沖のかた二三里内外ともいふへき所へ行たりとみへて二ケ所にて一道の白氣天に冲するかことく吹あくることしはしは也是は夕日にかゝやく故也をちよりみてかくの如しそはにては定ゐよほとのことなるへし二尾とみへて二ケ所にてふきし也

○十一日　晴　頃日十二日計雨なし定ゐ歸府ゑ頃日々ゑ雨と此ほとは晴ゑ事を一同日々うらみかこち申候人心の勝手今にはしめぬ事に候

○十二日　雨　四月三日附ゑ御用狀到來いたす　母上よりゑ御用狀幷新右衞門方ゑ書狀鐵作よりゑ書狀相屆今日は便も有之候間新右衞門鐵作ゑ返事出之　母上よりゑ御文は昨日申上候外は別に可申上義無之候間御返事奉らす候

○十三日　雨　民藏義塚原三昧堂根本寺阿佛坊妙宣寺ゟ參る六里計りあるといふ此寺々は開帳百文宛也といふ阿佛坊迄は五十町道七里餘也民藏大に草臥候由也奉行ゑ家來故寺にても丁寧にいたし候由乍去開帳いたし候布施二百文差出候由也されは共漸日蓮の像を爲拜候計にゐ何も見すと云ふ巡村ゑ時は改ゑ心得に付像ゑ古色或は書ゑ眞僞等を評せしかさそかし坊主不承知なるへし絶倒

○十四日　微雨　昨日石井昇助事石枕院天外輝昇居士か墓相川曹洞宗高安寺に彖藏參る追々家來參詣に花手向あるといふ墓は佐渡奉行川路三左衞門家來石井昇助墓とあり碑は三重臺にゐ惣高四尺餘（四尺五寸四分あるよし也）もあるへし某か供のさふらひには過たるもの也と彖藏のかたりし也　御船見分いたし家來歸りて申せしは船に祭るところの神の神體は紙ひいなにて夫に紅白粉をはしめとして粧具十二色幷骰子を貳ツ納めて其上に埋木をすると納所は帆柱也船たまの忌ものあり　くちなは　たのき　かゝみ也といふ蛇可好にもあらすかゝみの忌といふこと紅粉に不似合也狸を忌は餘國ならは狐なるへしある人の語りしは此ひなはひいなにあらすひなふりのひなにてかたちもみめも又ひな也よつてかゝみを忌也狸をいみしは度々人に化されけることあるもしるへからすといつれもおほつかなき事也

○十五日　晴　庭に出てはや歸るさも近く也けりなとおもひて歸るとてつきぬゆかりをかきつはた隔こゝろの色はあらしな

みなれつる池の蛙もやゝ近く歸るわかれをねにやなくらむ

かりねにも一とせ近くなりぬれはなれてわかれのおしまるゝ哉

又もこむ春待てさけ山さくらこととしはしけるみとりなりとも

はちす葉のわか葉ももれぬわかれちの涙おきそふ露のしら玉

のこしぬることおもほへてかへるともにこりにそむな池のはちす葉

うれしくそかはらぬみとり故さとのこゝろを庭のまつにみる哉

なつくさにまたわか葉成庭の菊又かさねみむあきやちきらむ

月花に山ほとゝきす此庭にきゝしも近きわかれとはなれ

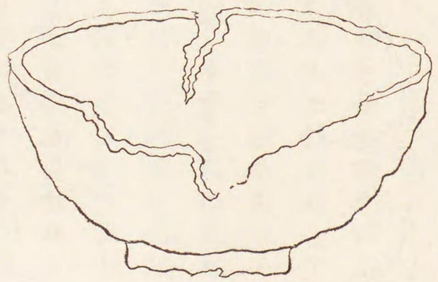
いへつとにならは成さなむ此庭に咏ことたる山と水とを

○十六日　雨雷　相川に寺社より靈寶物を出す珍敷ものも多尤兼ゐ其事いひてさらてもなきものは取捨せよといひし故なるへし西光寺に二尺計の平うちの刀あり切物至ゐ見事なるへしとおもはる（本間家所持に正宗といふ眞僞はしらすひらうちにて無銘燒ケたるもの也）錆甚しくみへす宗近刀（是も無銘也二尺四五寸餘もあるへし至て切先細に京大和の鍛冶の太刀の姿あるかことくほう

しなれ所々かけて
やきは等みへす　此刀は春日社人津田山城より出せし也是も本間より之獻
備と申せし也興禪寺の大涅槃畫像是は明晁か所畫といふよくみゆる傳ふ
る所は京五山之内ハ興福寺こゝの所化年をへて住職し明晁に畫かせて贈り
し也と惜哉彩色を追ふ手入せしもの也されば共なみ〳〵ならすみゆる也其
外配流になりし公家之墨跡等多くあり小倉宰相公連卿といふ人の試筆に
わたつ海の最中に霞む朝日かけ波路のとかに春やくるらむ
涙あるゝ雪の高濱一夜とてあくれはやかて霞む海つら
元日やあれてもさすかとこやらか
其外此卿の七言絶句の詩等あり
雷の銚子といふものは水色の地に薄紫の村雲たちたるかことき物也
日本のものともみへす磁石なから至ゑめつらしくみゆる也本敬寺に日
蓮の椀といふものありかたち圖の如し其麁末なることいふへくもあら
す小刀なとにてくりたるかことく柱ならむにはてふなもてはつりたる
計といふかことくにて今は乞食非人たりともかゝるものは持たぬ也今

佐渡國相川下寺町
本敬寺寶物

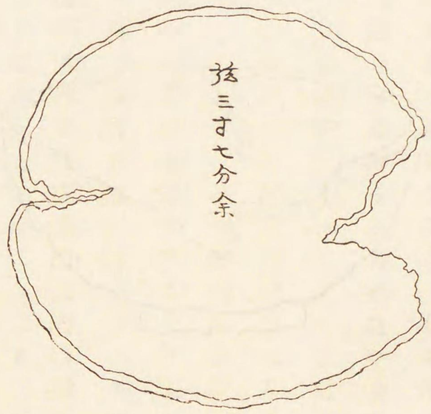
日蓮上人之椀



高サ壹寸五分

のよのものとは更にかはりたるもの也其椀の傳來書に添狀之事　一澁
手村地頭安達兵後守殿兵庫頭なかく記しもおかし家老續木孫右衞門祖師依御宿成一所
持之靈寶數多有之候得共越後影勝景勝の誤字也入亂之時分致紛失殘る靈寶と

して祖師御常器枕有之候依是ニ當國他國ゟも傳聞ニ致拜見勿論小木湊也安隆寺幷河原田邑名妙經寺阿佛坊ゟ切々所望被致候得共手前に不思義成事數多有之或時は眼病平愈之者多立願之品々相叶申候故于今持傳候所に此



厚サ壹分五厘

度當村浦御目付役松田助左衞門樣依御肝煎貴寺ゟ相納申候後代可爲什物候仍添狀如件

享保二年酉四月五日　奇進主澁手村續木孫右衞門印同忰同名兵之丞印

肝煎澁手浦目付役松田助左衞門印　相川本敬寺樣

とあり添書之趣僞物にあらされは椀の日蓮か枕か否はしらねともいひ傳へしも古きことにゐ其古きことといふへくもあらぬ也此椀の麁末なるをみて塚原の牛馬を捨たる所にある一間四面の三昧堂に居なからも心を動かす法華をときたることおもふへきこと也今のものは法華を信するとはいひなから欲深くしてとかくよき衣類うまき物をこのみはつかのことにはら立或は孫や子のためにあらねぬよくをなしみるものきくものにこゝろうこきて地獄に生なからをちてこゝろをくるしめ又は少も辛抱のならぬよりうそまてをいひて人をわるくいふなとみな五欲の惡よりいつる也法華經に僞なからぬには日蓮か必手傳て地獄へかゝるもの共を投玉ふなる

へしつゝしむへきこと也木像は木のきれ經文はくろくすみのかたをおしたる紙也夫をよみおかみて成佛せむとおもふはをろか成事也それよりも半時にゐもよろしく惡心なく欲を薄くすへき事也

○十七日　雨　五時頃より山之神なる教壽院の御宮に拜禮として罷越きのふ七時よりこゝろよりの御清を成して詣ける也至ゐ六ケ敷出來損したりされ共けふの拜禮ある故にや久しく妄念に流れはせす難有こと也畢ゐ孔廟へ參る拜禮畢ゐ學問所引受田中從太郎其外定役並役のものとしはし申談事し例之通稽古所に參るこゝは地役人の子供等か手習幷讀書する所也二三十人計居たりよく精を出せおとなしくして孝行せよと辭懸遣し候いつれも平服して居し也夫々武藝の稽古所に常は參るなれとけふは早くいまたはしまらぬ故參らぬ也某聖像を拜すれは必地役人の子供に逢て辭遣す也是は往々は佐渡の要たる御用立人もあれかしとおもへは也奉行故に子供を拜しはせねと拜するもおなしこゝろにて必辭を遣す也是は則御奉公と一つなるへし

○十八日　晴　さむしわた入かさねにゐもよろし一ッにてはさむ過候俊藏銀山のみちにて磯なのことものを摘居るをみて尋しに萬歳といふものゝ由わからぬ故萬歳とはと聞直せしにそれならは江戸にては歌うたひとは申さすやといひし是もわからす醫師に問しに江戸のヲムハコといふものゝ類也と所によりけしからす名も違ふ也

○十九日　晴夕雨　重輔少々不快風邪也田中從太郎戯に云此國にゐ病ある時は祈禱よし醫師の藥はよからす扁鵲か巫を信して醫を信せさるの說とは大に反せり藥はきゝめなくして若哉の害はかりかたし祈禱は利益も害もなしされは祈禱のかた藥よりは大によしと醫のこと是にゐおもふへし　誰かいひけむ　江戸狐佐渡の狸に化されて一度は來たり二度はこむこむとされは誰もこまるとみへたり

○廿日　晴夕雨　けしからぬ大鯛一枚貳朱也家來一同へ遣し候至ゐ見事

なるもの也

○廿一日　晴　此ほとはかへりのしたくにて家來共いそかし某もいろいろの御用多し

○廿二日　晴　江戸のことはしらねと定ゑ天氣かもしらすあすは久須美出立いかゝあらむなといひき　巡村の時在郷にゑ話に某か村の鎮守の祭は相川の祭ほとにはあらねとも至ゑよろしと殊更にほこりたり其相川の祭といふものは兼ゑもいふふるひたる人形に今畑より採來りけむともいふへき程の東捕塞を臺せしもありて笑ひを忍ひてみし也先つは江戸の香具店のかさりに似てかみひなふりなるもの也然るを在にてかくはいふ也又相川の役人の都しらぬものゝ海内にならひなき祭禮のことくおもふは生國のこと故蛙見當よりのこと也其内江戸へ出たるものゝ都の御方には笑ひ玉ふ程のことにて江戸の氷川祭のことなるへし哉とて謙遜していふ也氷川は大社のこと牛込の赤城市谷八幡のかけまつりなといふものにても遙に相川の類にあらすそれかくはいふ也しらぬにもほとのあることそかしされは虞卿か天下の師を尋たるといふこと□のことならすや都に居なから懇意につれ東脩等少のこと或はくさ〳〵の小事にかゝはりてさらてもなき師の門弟子となるは江戸に居なから相川より又も末なる海濱の祭禮をみて喜ふの類なるへしよき師につけは一生涯たちてもしらぬことしはしの茶話にきくこともある也何事も學ひなむものゝこゝろあるへきこと也

○廿四日　くもり微雨　こゝの春日崎に車前子草のうらに白毛ある奇品あり江戸にても珍とするなとこと〳〵敷いひてけふ取よせてみしにヲムハコといふものゝ葉のうらに聊むく毛のこときものゝありし也一同笑たり乳母か子の齒に白き毛あるならは奇也ともいふへきにとて絶倒せし也田舍のもの土地にほこることみな此類としるへし

○廿六日　曇微雨　けふより本住居久須美待受ゑ普請に付向陣屋ゑ引移

廊下つゝきにて都ゐ手狹也引移といへは旅宿にても新宅のわたましの如くにはあらす

五月雨にぬれしかあやし袖の露かりのやとりもわかれ也とて

きのふよりおきこそまされわかれちをおしむや池のはちすはの露

こゝのくせにて人足共かゝる時もの盜也灰又はこも或は古草履之類也けしからぬ事也

○廿七日　曇微雨　いかにせしや十三日出之御用狀いまた來らすいろいろの取さたなといふ也これも例のくせなるへし

○廿八日　曇微雨　例にて出立前に御別當敎壽院方蕎麥を家來まてへくるゝ也　こゝり鯛といふものを賣に來る大さ五寸計至ゐひらめなる魚にゐくちもいらも至ゐ小にして尾ひれともみとり也全身の色薄墨にして村雲の立たるかことき あやあり脊に頭のかたにより太き針のことき一本のひれあり其下に汐をふく穴ありよき味の魚也と土俗一名をハクチウチといふいかなれは博奕の名あるにや江戸にてはみしことともなき魚也

重建佐州脩敎館記

治敎隆於上而風俗化於下蓋敎化之本在學校之設其所關係者可謂至大矣方今　昇平文明之化洋洋乎洽於海內自邦國以至鄉黨皆莫不有學猗歟盛哉我州之有學搬於文政季年命曰脩敎館無幾州治有災延及館中堂廡門廊盡燼書庫僅免時從事者有所請稍建齋舍炊廚及南西二門而明倫之堂力未能及焉榛莽雜穢使人慘然天保庚子　川路君蒞治首察風俗委靡敎誨胥吏大要以有犯無隱之意且諭且戒諄諄不倦衆皆心服以違敎命爲恥一日巡視到學館之舊趾深憫敎學墜廢慨然有重建之志吏人大喜敢申前請越明年穀豐民和遂及此擧其規模仍舊貫更省有華飾三閱月竣功僚屬歡抃相率賀成清在廳下竊語僚友曰我州斗絕海表土瘠人頑流風汙俗殆有不忍言者幸今遭逢至治之德化彝倫之敎淳樸之風所由興端在乎斯此館若亡則吏民亦可亡此館若存則吏民亦可存闔州生靈之存亡實係此館之興廢豈可忽乎豈可

忘乎恭惟入此館登此堂聞道承教永保其命者不啻虔奉明府之休命又庶幾報國恩之萬一乎於戲可不懋哉皆曰爾爾既而命清記其事謹記顚末以軋進止云

脩敎館督學臣田中清謹識

○廿九日　晴　同役今廿九日寺泊出津ゟ先觸到來いたす　此ほと年來のことし至ゟいそかしゝ追々捕ものも有之白洲多く其上くみ頭四ッ前より七ッ半時過まても此長日に居り申候けしからさる事也給人を急に調物有之候ゟ立合として大吹所ゟ差出す朝より夜四時迄も歸り來らす候尤某も夫につれ用多也けふは少もなくさみなし少々書物よみ候位ゟ事にゟよなへに一覽もの多し

○五月朔日　晴夕曇　月並ゟ禮受ること例の如し組頭暮六時頃迄居るといへ共御用不殘不相濟候至ゟ御用多大晦日の如し　道中日雇ゟもの今日參る八重島等ゟ書狀を出す　昨夜九ッ時十三日十九日廿一日附ゟ御用狀到來いたす林肥前守ゟ御役御免差控御加增被召上候義小野（水カ）美濃守同斷美濃部筑前守御免甲府勝手小普請入被　仰付高三百石被召放候由之申參る驚歎いたす　御新政ゟ程奉感戴されなるにはなけれ共只々驚入たる事にゟ氣ゟ毒にもおもふ也

○二日　曇風　此程吟味ゟ一件に可笑ことあり佐州ゟ寺院はいかくりといふものにもあるかことくとかくに厄介の女を寺におく也然るに某か佐渡奉行被　仰付候と相川邊の寺院はこと〳〵寺より出し市中に店もたせたりと某か佐州ゟ參りたる時地役人共右一件ゟあと故ことに恐居最初は吸口を銀にてはりたるきせるもち居候ものも家來をみると懷中へいれ候位故かく申成し候ことかと計おもひ居し也然るに佐州相川の在へ醫師參りねたり事似せ役人ゟ風聞ありしによつて召捕吟味せしに片瀨の水上坊といふ寺院かの醫師に申せしは今度の奉行は嚴敷惡黨もの召捕に成よし

也もしや寺院へ手のいるへくもはかりかたし夫等ゑことあらむにはしらせくれよといひしよりをもひ附て似せ役人になりし也地役人より家來は取扱にくゝ家來より某か身ひとつの修めかたにこまり居て中々寺院の不律に及ふことあたはす然るをかく寺院のおそるゝは脇坂中務殿の手につきて色々のことせし故に彼朝臣の餘威を某か荷ひしなるへしと密に笑ひ居る也

○三日　雨夕晴　六郎左衞門朔日に寺泊へ着して風次第渡海のよし申來る一同歸りの彌近きをよろこひぬ

○四日　晴　八半時頃に久須美六郎左衞門出帆ゑ帆かけ沖かた三里ほとに相見候由赤泊より注進有之其後午中刻同人赤泊ゟ到着ゑ旨廣間役其外ゟ尙注進有之候

○五日　曇　端午ゑ禮受ること常の如し　八時過久須美六郎左衞門到着也さし具足を胴丸と記し候ゟ上覆金から革也其外供立みな某よりみことも六郎左衞門七十一歳老健以前にかはらす六郎左衞門は本陣屋に付參り御機嫌伺いたす其外御用談にゟ夜五ツ過まて相懸り候　六郎左衞門は某か支配勘定たりし時格別ゑ推舉にゟ寺社奉行調役ゑ當分助にせし也（此時六郎左衞門布衣にゟ調役御勘定組頭格也）右ゑ次第に付其上坐たらむこと公事なれ共心安からすよつて勘へしに月番のもの御役被　仰付候順序に不拘上座たるへきこと町奉行御勘定奉行ゑ許定所ゑ出席并近く當地ゑ組頭までも如此也よつて目付役に例を尋しにさにあらすと右は深くの穿鑿せしにもあらしと尙尋さする所に在勤として罷越候奉行ゑ上座たる例もある也よつて六郎左衞門は上座某は次座也まして居間にゟは燕居も同前ゑ義に付始終六郎左衞門を上座にせし也家來共はよく傳達等都ゟ手をひきくいたし不遜あるへからす無洩傳達すへし是則御奉公也さて六郎左衞門は某に恩ある人に付心は某か方筆下ゑ心得たるへし下々まて麁略あるへからすと書付を以申渡之

○六日　曇　六郎左衞門方ゟ演説其外申渡等之義に付午後分参る暮時前歸宅せし也

○七日　曇　六郎左衞門方ゟ申渡等之義に付参る役替申付候ものは拾四人あり　彌明日之出立と觸けれは地役人共之内廣間役共暇乞として参るけふは一人宛申候事也こゝろ心のこと共にて秋草の花咲たる體也こと葉の程にゐ凡平日之人才もおもひあたる也又今までの勤かたによりて某よりもいろ〳〵挨拶およふ也常の某かおもふ程に向よりもいふかことし人をとかむへきことかはとおもひあたる也

○八日　曇　拂曉之出立にゐ出懸六郎左衞門玄關迄相望かへる當番之もの弁六郎左衞門用人御門内にゐ暇乞いたす夫分をり戸口其外遠きは澤根の湊迄をくり來る七時頃に小木之湊ゟ到着いたし山方役に藏田太中といふものあり佐州にゐ之歌よみ也已前淳介へ　隅田川すむらむ月におもひ出よわかたもとにもやとるものとは　いふ送別の歌よみし男也我人より物受ることとてはなしされと歌贈るほとのことはあしからしといひしに五月のはしめ大江戸へかへらせ給ふをおくり奉るとて　といふ辭書にゐたち花のかくはしき名をなこりにてほとは雲井に行ほとゝきす　とよみておくりし也太中か實名は茂樹と申せし

けふ御役所立出るとて

一とせをうしと過せし島根しもなれてはぬるゝわかれ路の袖

わかれちのおしあけかたの露そおくいさむ歸りの都なからも

をり戸口といふ御番所ゐに島の役人共わかれを告けれはおり〳〵はおりとの關の隔なくことの葉よせよ佐との島人濁ぬるこゝろしなくは諸人よ此相川に千よも住らむ

中山のたふけにゐ

こともなく佐渡の中山又こゆるけふの歸りもいのち也けり

歸路におもへはやすし中々に佐渡の中山たへかねてしも

石井昇助のみげふの歸りにもれけるよとおもひ出けれは

おもひきや石井の水の手にもれて結ひもあへすわかるへしとは

なき玉のこゝろをくめは袖ぬるゝのこす石井のわかれかなしも

○九日　曇風まち也　昨夜旅宿の假廐の繋柱たをれて馬の肩を打たる故無事成馬なれ共大に驚たりされ共さしたる事はなし旅宿假廐の柱なとはこゝろつくへき事也

○九日　雨　小木湊に風待也　佐州御役所ゟ犬如咄きのふ某をしたひて五十町みち十里餘を經て此湊へ來れりみちにて辨當の餘を與れは不食してみつから穴をうかち夫へおさめて土をかけ石をのせ置よし也來るには某か家來共の不便也とて世話するもあれと歸りはよほと飢且難義して相川へ參るころは甚敷やつるゝことのよし不思義なるもの也右食物を藏むるはかへりの手當とおもはるゝ也

○十日　曇　けふも風待也　五月四日附ゟ御用狀到來新右衞門鍬五郎ゟ

ゟ壹封相屆く

○十一日　曇　けふも風待也　入費もあり歸情もあり雨のうきことといふへくもあらす中々拙吟等に可盡ことかはよつてこゝろなくさめに經書なとよみ居候易の濡のことなとおもひ出候ゟ漸とこゝろいられもおさまり候乍去酒食にまつ場には決ゟならぬ也民藏歎して御運よき御かたなれと道中の川とめ大雨等いくたひもあり夫をかけみちとあきらめて此風待のつれ〳〵も格別には不存といひき此位のことにゟ濟ならは難有こと也民藏よほとこゝろくるしくおもひしとみへし難義計にあらす入費か成の所の持參金ほとなるへし厄拂にはちと〳〵過分也といひて笑ひき

○十二日　雨　さみたれさへうきものなるに一年ゟ御用濟歸り懸ゟ旅中風待にてけふは信州路あすは關東ゟ踏込むへきにとおもひて其うきこといひつくすへきにあらす

○十三日　けふも又雨也

くれなひにたもとやくちむ五月雨にぬれにそぬれしたひの衣手

しはしみし日かけは又も雲とちて軒端さひしくさみたれそふる

さみたれに歸る船路をさへられてたとへもあらぬうきおもひ哉

うちよりて晴より外はいふこともなき〳〵くらすさみたれの空

わすれめとおもへは又も五月雨におとつれまさる軒の玉水

さみたれはこゝろつよしなけふいく日わひしと人のかこちくらすに

晴るゝ日につなてときしは夢船にてなを袖ぬるゝよ半のさみたれ

ふるさとの梅か香ならて東風のそてぬらせとやおくるさみたれ

晴るゝ日ははれしとおもひ捨つゝもいくたひなかむさみたれの空

五月雨の船とゝめすはふるさとにはや程近きたひねなすらし

朝夕にとふ島人もさみたれのうさいふ人に言の葉もなし

五月雨にかゝるみなとの船いくつわれのみならぬうきに有けり

ほとゝきすうら山敷もこへ立てわけ行沖のさみたれの雲

さみたれもしはしにこしの海なるをわたらむほとの晴間あらせよ

よりてかくうらむこゝろをさみたれのしりないかに晴さらめやは

軒端なる玉水よりも五月雨にせきあへぬわか涙也けり

けふは相川の用達見舞として來るもちなとくれたり

○十四日　雨　けふも船まち也つれ〳〵のことといふへくもあらす下部の日傭に軍書よみ咄家なとあり其外將棊等おもひ〳〵也博奕ゝ取締嚴敷いたす　相川より附參りたる犬の不便さにけふ歸るものに相川へつれさせむとせしに行かすきくに常に奉行の出立の時湊ゝ參り乘船見屆けて歸ることのよし也歸りには五十丁みち十餘里を歩行てつかれ候上食もなく四五日はあはれなる體になり居るよし也此犬のことくに人の歸伏せむこと

あらむにはうれしかるへし

○十五日　曇　あまりのつれ〳〵に家來を湊ゝ出しみしに四國九州其外所々の船々五六十艘も湊懸いたし居候由風は東北にゐ能登のかたゝ參る

か下の關のかたならては出しかね候由けふの天氣ならむには必定兩三日東風なるへしとてみな船よそほひしみる〳〵三里四里宛走出たるなとひし時のこゝろいかゝあるへし某か幼時に手習師のかたに行て怠ことありてかへることゆるされす人々みな歸るときに獨とゝめられてなく〳〵好まさる手習せし時の甚敷ものこそありけり然るに七ッの下りの頃よりいさゝか晴たれと例の日よりくせなるへしとおもひ居しか長き竹の末に紙きり下て置たりしか西より東になひくか如しこはとおもひ居しうちに又東より西になひく也されは風間〳〵に動かとおもひ居しうちに日くれて御船手辻新兵衛來り家來もていひしは十三半といふ所へ行て入日をみしにけふは入日みへぬあすは十に八ッ迄は出船なるへしといひし時は夢かまことかといふ計にあけふまての愁眉頓に開たり日くれより彌順風にあ空晴わたり月さへさしのほりたるはこゝろうれしくおもひし也

○十六日　晴　風なし海上如鏡今曉七ッ半と申には案内せむと御船手より申出しか鷄の初こへきく頃より目覺たり家來共いつれもおなし燈にあ髪月代いたし候あ五時前に乘船也例の如くみるものありの如し船中格別のことはなけれと波濤少々荒かりけれは某并家來ゑ内壹兩人ゑ外はいつれも吐氣にて大になやみける人心地のものなし八半前に出雲崎本陣に着也こゝはよき所にて都あの人物等迄島國とは格別也

きのふ佐渡にて日くらしなきけれは
常とはになく日くらしのねもむへし佐渡の島根はものかなしきに
うきときはいつも秋とてさみたれの空も日くらし鳴くらすらむ

けふ船中にあ

こそよりのうき島根をも忘れけりはれわたりぬるこしの白波
行船に遠かりぬる佐渡の島うきねもなれてわかれかなしも

○出雲崎の本陣はつるかや松之助といふ豪家とみゆ庭に高き山あり芝原に亭あり松あり月のなかめさそとおもふ也

○十七日　晴　六半時出雲崎出立石地椎谷宮川荒濱を經て柏崎宿にゐひる飯給夫々鯨波青海川龜割坂をこへ鉢崎宿の御關所相通り同所に止宿也

○出雲崎はよき所なれ共柏崎は又一段よろし五六萬石の城下のことし柏崎より鉢崎の御關所迄は米山の麓をめくり候故殊の外なる難所也東海道ならむには峠といふへき所いくらもある也　龜割坂ふうふ湯の水といふ石碑ある泉あり義經奥州下りの時妾の出産して龜王といふ男子をもうけられたる所也とて土俗はことゝ〳〵敷いふなれと例の附會もしるへからす肩輿のうちよりみれは茶店の婦人（此茶店を辨慶茶屋と云）産湯水の由來を旅人に解示し尙其ことを卷物に記たるを手にもち高らかによみあくる也其體辨慶か勸進帳と口よせの女巫をかねたるかことし大笑也鯨波といふ建場の茶やは北海に向たる山のはなにあり北海よくみゆる眼下の海中に人多くよりてあまり深からぬ海底へ沒して何かとる樣也清水故あしの水中にひら〳〵とするなとみゆる也あまにて女なるへしといふされ共みな月代のあるかことしさたかならすよつて例の遠めかねにてみしに婦人の手拭をかふりて水中へ沒海草をとるにはありけり細毛こと〳〵く數へきほとにみへし家來共一同絶倒此邊に彖の仙人あらは海中に溺へし石地の建場は内藤某といふ舊家のよし千石以上御旗本長屋ほとの長屋あり角柱銅包也出しけたも銅包也關東の建場といふものはあやしき茶店なるに珍敷こと也

荒濱といふ所にて

吹よせしまさこに深くうつもれぬ風荒濱につゝく芝山

海上を咏て

なきの日もこしの海原あらけれは白波くゝるあまのつりふね

けふよりそ荒磯つたへいくさともなみのよる〳〵旅ねなすらむ

みねはまた雪ありけれは

あらいそのなみと高根になつも尙いろをあらそふこしの白雪

佐渡よりも風俗變りけれは

賤の女も髪とりあけて島根よりひなふりうすきこしの浦人

○十八日　晴　六半時前出立西濱といふ所にて

けさはまた一しほ遠く横雲のたえ間にみゆる佐渡の島山

高根なる殘る雪よりあけ初て波間はくらきこしの海原

此西濱といふ所は東南は山西北は海にて海邊けしからぬ眞砂地深き所也人足こと〳〵くに板金剛をはきたり且十人に六七人迄は婦人也こま下駄はきたる婦人の長持を擔ひ行なと珍ら敷こと也此西濱鉢崎より二里之間也竹ヶ鼻といふ小村之濱にゐ野立也柿崎宿上下ケ濱を經潟町宿にゐ晝休行ケ濱村黑井宿春日新田稻田町を過高田に至りて止宿こゝは榊原式部大輔之城下にゐよき町也　本陣にゐ雪を差出す半は氷けれともさく〳〵として暑にたへぬ時故ことにめつらし

○十九日　微雨　六半時高田宿出立いたし茶屋町荒井宿二本木關山宿二俣宿小田切大田切を經關川宿にゐ小休關川關所之改濟にゐ榊原式部大輔領知此御關所之川向ゟ信州に成例之通通行野尻宿に至り止宿　關山宿にゐ晝休いたす　野尻宿にはよき湖水あり　小田切と關川之間にゐ自分幷六郎左衞門に被遣候御奉書持參之旨宿役人申立る關川宿迄召れ同所にゐ受取掃部頭殿　御役御免幷鳴物之義御百ケ日も相立候間　御免被成候旨之被仰出也

○廿日　曉雨午後ゟ晴　六半時前出立柏原古間侔禮に至る矢代渡船川留に付神代長沼福島川田を經松代に至る都合壹里半餘也　松代にゐ本陣なし領主祭禮內覽之場所市中に有之同所に止宿也長沼村と福島村と之間にゐ筑摩川を渡る至ゐおたやか也　松代之領主は懇意に付別段使者來る國產之綿相贈る

○廿一日　朝くもり午後晴　六半時松代出立いたし二里にゐ矢代に參る夫ゟ利倉坂木鹽尻上田海野田中ほく屋村を過小室に至る　上田は松平伊賀守城下にゐ上田織商ふみせ共多よき所也　矢代とくらの邊より姥捨山みゆる　小室に參る途中へ元牧野遠江守家來の悴にゐ一旦某か家來たり

し長谷川愼藏事山中出迎として出居尙小室ニ泊りに參り國鍛冶の脇差を贈りぬ金子菓子なと遣したり夜ふくる迄物語たり共つきす民藏とも物語たきよしにゐ九過暇こひて退きぬ　夕方々雷鳴電甚し

○廿二日　曇　六半時小諸宿間瀨口村追分宿沓懸宿輕井澤宿笛吹峠をこへ坂本の關所を過松井田宿にいたり止宿　中小諸より二り計をくり來りて當直なりとて別れをつけ歸りたり某か禁酒して久敷破さることをいたくよろこひきなをつゝしみ玉へなと告て歸りぬ不相替ニ深切なりき　某か評定所留役たりし時中山道東海道旅行せし時之ものは道中宿役人共ニ內に甚少く輕井澤宿本陣問屋は其頃のものにゐ某か去る戌年き曾山に參る時吟味役成たるをよろこひしかけふの旅行を殊に喜ひ嚴敷取締いたし候義なと難有由申之其時の本陣は隱居せしか夫も出て家來に喜ひを申せし由也

○廿三日　晴　六半時出立にゐ八本木安中板鼻豐岡高崎倉ヶ野新町石神を經て本庄宿に至り止宿俄ニ暑氣にて病人多し今日江戸にゐ田口加賀守に被仰渡有之候由等初ゐ承り驚入

○廿四日　晴　六半時出立にゐ牧西深谷籠原熊谷久下吹上ヶ三田（箕田也）を經鴻巢に至り止宿　此ほと俄ニ大暑にゐ病人日々多しよつて某も恐れて食味こと更に心附候兩三日已前迄は例の燒飯計也しか日中を携歩候間おのつからあしきかのあるか如く也よつてけふより建場にゐおり〳〵飯壹貳宛兩度くらひ給候　日雇の入口鴻の巢まて先達ゐ參り候處著無之由にゐ熊谷へ出迎（十日已前ゐ此日雇入口は參り居候由例ニ吉藏也）　三田村の建場は軒場等くち果たる村持體の社地也されは共大木多し休うちに月參りニものニ由にゐ參詣ニものあり之候故家來見來りて三田の八幡也といふよつてみるに石の手洗盥に三ツ星の紋ありさらはとおもひて口手あらひて參詣せし也拜殿かくら殿はことに破れたり本殿は存外の銅瓦にゐありき鄕名を箕田といひ宮居ある所を宮前村といふ三ツ星の紋ある所もておもへは我等か家の曩祖渡邊の

綱か出生の郷にて此八幡宮產神かもしるへからすと殊に信し拜せし定ゑ名所圖畫或は聖堂にゑ出來ゑ地誌の類に其ことあるへし歸らは尋へし

○廿五日　曇夕大雷雨　六半時出立にゑ桶川上尾天神橋大宮浦和を經厳宿に至り止宿　わらひ宿入口より雷鳴家來一同到著後大雷雨也

○廿六日　晴　六半時早めゑ出立にゑ五時前板橋宿に至る親族其外懇意ゑもの等參りたり九ツ時前歸宅也。

昭和七年七月二十日印刷
昭和七年七月廿五日發行

川路聖謨文書第一

非賣品

不許複製

編輯者　東京府豐多摩郡杉並町大字高圓寺四百十八番地　大塚武松

發行者　東京市四谷區新堀江町三番地　日本史籍協會代表者　早川良吉

印刷者　東京市京橋區湊町三丁目八番地一　高橋赤次郎

發行所　東京市四谷區新堀江町三番地　日本史籍協會　電話四谷三二八七番　振替東京三九四五番

BILLOSZ
DOMSKI
NOCKOWA